

茨城県教育財団文化財調査報告第171集

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設工事地内埋蔵文化財調査報告書 1

下大井遺跡

平成13年3月

建 設 省
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財團文化財調査報告第171集

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設工事地内埋蔵文化財調査報告書 1

しも おお い
下 大 井 遺 跡

平成13年3月

建 設 省
財団法人 茨城県教育財團

序

茨城県南部の峯崎町周辺地域には、国の首都圏整備計画による「土浦・筑波業務核都市構想」が計画されております。

首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の建設は、県南・県西の交通の円滑化と、交流・連携が強化され、地域の自立性を高める拠点となる都市整備を目的に計画されたものであります。その予定地内には埋蔵文化財伝蔵地である下大井遺跡が確認されております。

財團法人茨城県教育財団は、建設省と埋蔵文化財の発掘調査事業について委託契約を結び、平成11年4月から8月まで下大井遺跡の調査を実施いたしました。この調査によって貴重な遺構、遺物が確認され、郷土の歴史を解明する上で多大な成果をあげることができました。

本書は、下大井遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究の資料としてはもとより、郷土史の理解を深め、ひいては教育、文化の向上の一助として広く活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である建設省からいただいた多大なる御協力に対し、心から御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、峯崎町教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただいたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成13年3月

財團法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤 佳郎

例　　言

- 1 本書は、建設省関東地方建設局（常総国道工事事務所）の委託により財團法人茨城県教育財團が平成11年度に発掘調査を実施した、茨城県稲敷郡美崎町大字大井に所在する下大井遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調　査	平成11年4月1日～平成11年8月31日
整　理	平成12年4月1日～平成12年9月30日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久の指揮のもと、調査第3班長仙波亨、首席調査員川津法伸、副主任調査員皆川修が担当した。
- 4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理課長川井正一の指揮のもと、首席調査員川津法伸が担当した。
- 5 本書の作成にあたり、墨書き土器の訛文については、国立歴史民俗博物館の平川南教授に御指導いただいた。
- 6 発掘調査及び整理に際し、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を原点とし、X軸=+1,560m、Y軸=+27,960mの交点を基準点（A1 a1）とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1 区」、「B 2 区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…oとし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A 1 a1 区」、「B 2 b2 区」のように呼称した。

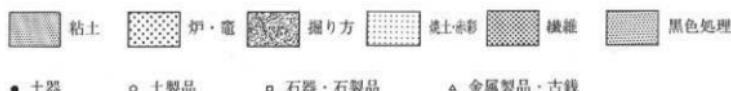
- 2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡-S I 土坑-S K 塚-T M 溝-S D 不明-S X

遺物 土器-P 土製品-D P 石器・石製品-Q 金属製品・古銭-M 拓本上器-T P その他-Y

土層 撹乱-K

- 3 遺構・遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。



- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構・遺物実測図の掲載方法については、次のとおりである。

(1) 遺跡の全体図は300分の1の縮尺とし、各遺構の実測図は、60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々に縮尺をスケールで表示した。

6 「主軸方向」は、炉・竈を通る軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E）。なお、〔 〕を付したものは推定である。

7 土器の計測値は、口径-A 器高-B 底径-C 高台径-D 高台高-E つまみ径-F つまみ高-Gとし、単位はcmである。なお、現存値は()で、推定値は〔 〕を付して示した。

8 遺物観察表の備考欄は、土器の残存率、出土位置、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

9 遺物番号については、土器、拓本のみ掲載の土器片、土製品、石製品、金属製品ごとに通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に付した番号は同一とした。

抄 錄

ふりがな	いっぽんごくどう假名をとけんちのうおひんらくじどうをどうしをせつこうちないほいそらひかがくちうきほにくし						
書 名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書1						
副 書 名	下大井遺跡						
卷 次							
シリーズ名	茨城県教育財團文化財調査報告						
シリーズ番号	第171集						
著者名	川津 法伸						
編集機関	財団法人 茨城県教育財團						
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587						
発行機関	財団法人 茨城県教育財團						
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587						
発行日	2001年(平成13年)3月21日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 08445	北緯 36度	東經 140度	標高 19	調査期間 19990401	調査面積 4,136.78m ²
下大井遺跡	茨城県教育部主幹局 大学大井字栗木1387 首島の11か	1	00分	08分	~	~	一般国道468号 首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う 事前調査
種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		
下大井遺跡	その他 葉落跡	石器 縄文	石器集中地点1か所 整穴住居跡 古 墳	8軒 1基 4軒 1基	ナノフ形石器、剥片、石核 繩文土器(深鉢)、石器(石誠・磨石) 上部器(环・壳・堆)、石製品 (筋縫革・勾玉・管下・双孔 円板)	縄文時代から 平安時代にかけての葉落跡 である。	特記事項 縄文時代から 平安時代にかけての葉落跡 である。 遺物では、「上 家」「上寺」と 書かれた墨書き 上器。鉄鉢、 三彩陶器が出 土している。
		奈良・平安	堅穴住居跡 ビット群	16軒 1か所	土師器(环・壳・鐵鉢)、須恵器 (环・高台付环・蓋・碗・ こね鉢・鐵鉢・高盤)、墨書き 土器、三彩陶器、灰釉陶器、 金瓦製品(刀子、鍵、鏡具)、 鐵津、上製品(羽口支脚)、 石製品(鐵石)	遺構では、出 入り口部に階 段状施設を有 する住居跡、 コ・ナーに竈 をもつ住居跡 が検出されて いる。	
塚墓	中 貴	塚 土塹墓	1基 1基	1基	土師質土器、金瓦製品 (火打金)、石製品(火打 石)、古錢、陶器(小皿)		
その他	不 明	不明遺構 土坑 溝	1基 58基 3条				

目 次

序	
例 言	
凡 例	
抄 錄	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序の検討	7
第3節 遺構と遺物	8
1 旧石器時代	8
2 繩文時代	14
(1) 姫穴住居跡	14
(2) か穴	23
3 古墳時代	24
(1) 姫穴住居跡	24
(2) 上坑	37
4 奈良・平安時代	38
(1) 姫穴住居跡	38
(2) ピット群	75
5 中世	76
(1) 土壙墓	76
(2) 塚	78
6 その他の遺構	80
(1) 土坑	80
(2) 溝	80
(3) 不明遺構	80
7 遺構出土遺物	84
第4節 まとめ	95

写真図版

挿 図 目 次

第1図 下大井遺跡調査区設定図	2	第35図 第6号住居跡実測図	49
第2図 下大井遺跡周辺遺跡分布図	4	第36図 第7号住居跡実測図	50
第3図 基本七層図	7	第37図 第7号住居跡出土遺物実測図	51
第4図 旧石器集中地点平面図	9	第38図 第8号住居跡実測図	53
第5図 旧石器集中地点遺物実測図	10	第39図 第8号住居跡出土遺物実測図	54
第6図 旧石器遺物実測図(1)	12	第40図 第9号住居跡実測図	55
第7図 旧石器遺物実測図(2)	13	第41図 第9号住居跡出土遺物実測図	56
第8図 旧石器遺物実測図(3)	14	第42図 第10号住居跡実測図	57
第9図 第4号住居跡出土遺物実測図	14	第43図 第10号住居跡出土遺物実測図	58
第10図 第4号住居跡実測図	15	第44図 第11号住居跡実測図	60
第11図 第15・18号住居跡実測図	16	第45図 第11号住居跡出土遺物実測図	61
第12図 第17・20号住居跡実測図	18	第46図 第12・13・14号住居跡実測図	63
第13図 第21号住居跡実測図	19	第47図 第12号住居跡出土遺物実測図	64
第14図 第22号住居跡実測図	20	第48図 第13号住居跡出土遺物実測図	64
第15図 第24号住居跡実測図	22	第49図 第16号住居跡実測図	66
第16図 第24号住居跡出土遺物実測図	22	第50図 第16号住居跡出土遺物実測図	67
第17図 第1号炉穴・出土遺物実測図	23	第51図 第19号住居跡実測図	68
第18図 第1号住居跡実測図	25	第52図 第19号住居跡出土遺物実測図	69
第19図 第1号住居跡出土遺物実測図	26	第53図 第27号住居跡実測図	70
第20図 第23号住居跡実測図	28	第54図 第27号住居跡出土遺物実測図	71
第21図 第23号住居跡出土遺物実測図(1)	29	第55図 第28号住居跡実測図	74
第22図 第23号住居跡出土遺物実測図(2)	30	第56図 第28号住居跡出土遺物実測図	75
第23図 第25号住居跡実測図	32	第57図 第1号ビット群・出土遺物実測図	76
第24図 第25号住居跡出土遺物実測図	33	第58図 第1号土塙基・出土遺物実測図	77
第25図 第26号住居跡実測図	34	第59図 第1号塙・出土遺物実測図	79
第26図 第26号住居跡出土遺物実測図	35	第60図 士坑実測図(1)	81
第27図 第60号土坑・出土遺物実測図	38	第61図 士坑実測図(2)	82
第28図 第2号住居跡実測図	40	第62図 士坑実測図(3)	83
第29図 第2号住居跡出土遺物実測図(1)	41	第63図 第1・2・3号溝実測図	84
第30図 第2号住居跡出土遺物実測図(2)	42	第64図 第1号不明遺構実測図	84
第31図 第3号住居跡実測図	44	第65図 遺構外出土・遺物実測図(1)	85
第32図 第3号住居跡出土遺物実測図	45	第66図 遺構外出土・遺物実測図(2)	86
第33図 第5号住居跡実測図	48	第67図 遺構外出土・遺物実測図(3)	87
第34図 第5号住居跡出土遺物実測図	48	付 図 下大井遺跡遺構全体図	

表 目 次

表1 下大井遺跡周辺遺跡一覧表	5	表4 溝一覧表	94
表2 壘穴住居跡一覧表	92	表5 墓古土器一覧表	97
表3 土坑一覧表	93		

写真図版目次

P L 1	下大井遺跡遺址、A区遺構確認状況	P L 12	第28号住居跡完掘状況、第28号住居跡遺物出土状況、旧石器グリット調査状況
P L 2	第1・2号住居跡遺物出土状況、第2号住居跡完掘状況	P L 13	IH石器出土状況、第1号ビット群完掘状況、第1号塚確認状況
P L 3	第2号住居跡窓内遺物出土状況、第3号住居跡完掘状況、第3号住居跡遺物出土状況	P L 14	第1号塚上層断面、第1号炉穴遺物出土状況、第1号土塙墓人骨・遺物出土状況
P L 4	第3号住居跡窓内遺物出土状況、第4・5号住居跡完掘状況	P L 15	第1・23号住居跡出土遺物
P L 5	第5号住居跡遺物出土状況、第7・8号住居跡完掘状況	P L 16	第23・25・26号住居跡、第60号土坑出土遺物
P L 6	第8・9号住居跡遺物出土状況、第9号住居跡完掘状況	P L 17	第2・3号住居跡、第60号土坑出土遺物
P L 7	第9号住居跡窓内遺物出土状況、第10号住居跡遺物出土状況、第11号住居跡完掘状況	P L 18	第3・5・7・8号住居跡出土遺物
P L 8	第11号住居跡出入り口施設完掘状況、第12・13・14号住居跡完掘状況	P L 19	第7・9・10・11号住居跡出土遺物
P L 9	第13号住居跡遺物出土状況、第16号住居跡完掘状況、第16号住居跡窓内遺物出土状況	P L 20	第13・16・19・27・28号住居跡、第1号土塙墓出土遺物
P L 10	第21・22号住居跡完掘状況、第23号住居跡遺物出土状況	P L 21	第28号住居跡、第1号ビット群、第1号塚、遺構外出土遺物
P L 11	第26・27・28号住居跡完掘状況、第27号住居跡遺物出土状況、第27号住居跡窓内遺物出土状況	P L 22	出土遺物(墨書・印花文)
		P L 23	住居跡・遺構外出土遺物
		P L 24	土製品出土遺物、IH石器出土遺物
		P L 25	旧石器出土遺物
		P L 26	石製品、金属製品出土遺物

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の通過する県南・県西地域は、国際研究学園都市“つくば”を中心に、首都機能の一翼を担う地域として多くのプロジェクトが進められており、圏央道の建設がこれらの地域の発展に大きく貢献することが期待されている。そうしたなか、建設省は茨城町内を通る圏央道の新設工事を計画した。

工事に先立ち、建設省関東地方建設局常総国道工事事務所は、平成9年1月7日に茨城県教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。茨城県教育委員会は、平成10年4月20日に現地踏査、平成10年6月9日に試掘調査を実施し、平成10年6月17日に建設省関東地方建設局常総国道工事事務所にて工事地内に下大井遺跡が所在する旨を回答した。建設省関東地方建設局常総国道工事事務所は、平成10年11月17日、茨城県教育委員会にその取り扱いについて協議を求めた。茨城県教育委員会は、建設省関東地方建設局常総国道工事事務所と遺跡の取り扱いについて協議を重ね、現状保存が困難であることから、平成11年3月15日、建設省関東地方建設局常総国道工事事務所に対し、下大井遺跡を記録保存する旨の回答を行い、調査機関として財團法人茨城県教育財團を紹介した。

建設省関東地方建設局常総国道工事事務所と財團法人茨城県教育財團は、埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を結び、平成11年4月1日から平成11年8月31日にかけて、下大井遺跡の発掘調査を実施することになった。

第2節 調査経過

下大井遺跡の発掘調査を平成11年4月1日から平成11年8月31までの5か月間にわたって実施した。以下、調査の経過について、その概要を記述する。

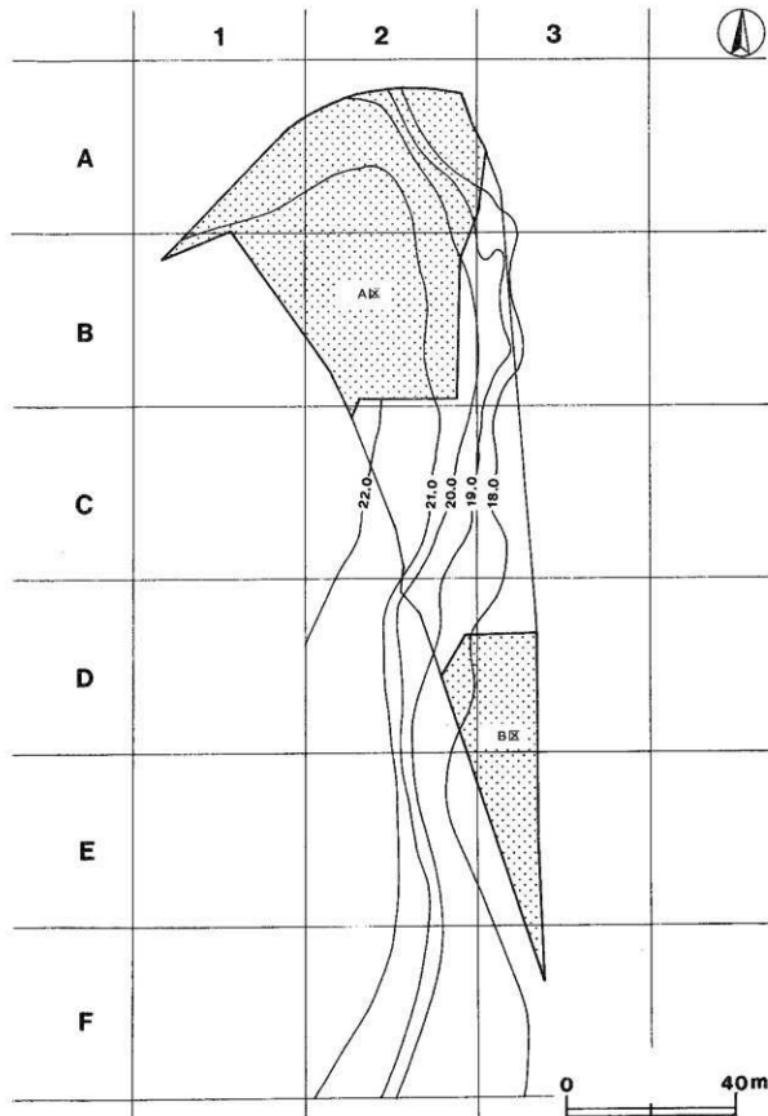
4月 発掘調査を開始するための諸準備を行う。4日に調査区域の現地踏査を行う。19日に発掘機材の搬入を行い、同日には補助員を投入して試掘を開始した。試掘の結果、縄文時代から平安時代の集落跡であることを確認した。28日から第1号塚の地形測量を開始した。

5月 6日から第1号塚の調査を開始し、17日からは重機による表土除去及び遺構確認作業を行った。A区は杉等の切り株が多く、表土除去も思うように進まなかったが21日に終了した。引き続き24日からB区の表土除去を開始した。B区は、黒色帯で1mほど下げたところで湧水によりぬかるんでしまう状況であったが、住居跡1軒、土坑2基を確認した。

6月 1日にB区の表土除去も終了し、2日に遺構確認作業も終了した。4日からは遺構調査を開始し、8日に方眼杭打ち測量を行い、月末までに住居跡10軒、土坑21基、塚1基の調査を終了した。

7月 引き続き遺構調査を行い、月末までに住居跡12軒、土坑23基、溝2条の調査を終了した。

8月 2日からは、A区とB区の遺構調査を並行して行い、9日にはB区の完掘全景の写真撮影を行い終了した。19日には、航空写真撮影を実施し、20日から補足調査と旧石器の調査、撤収の準備を行い26日には遺構調査が終了した。調査区域内の安全対策を行い、27日には現場事務所を撤収した。



第1図 下大井遺跡調査区設定図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

下大井遺跡は、茨城県稲敷郡大字茎崎町字橋本1,387番地の1ほかに所在し、JR常磐線ひたちのうしく駅から北西に直線で約2kmに位置している。

遺跡のある茎崎町は、関東平野の中央部からやや東に寄った、鹿島灘海岸から約50km、南南西の東京湾から約40kmの茨城県南部に位置し、東は牛久市、南は北相馬郡藤代町、西は筑波郡伊奈町、北はつくば市に接している。

地勢は、標高約23m前後の筑波・稲敷台地と呼ばれる平坦な台地となっている。この台地は、西を小貝川、東を桜川と南流する河川によって区切られ、その流域には沖積地が発達し、両河川の間に東から花室川、小野川、茎崎町の中央部を流れ牛久沼に注ぐ稲荷川、東谷田川などの中小河川がほぼ北から南に向かって流れている。筑波・稲敷台地は、茨城県南部から千葉県北部に広がる常総台地の一部であり、地質的には新生代第四紀更新世に形成された層が基盤となっている。下層から龍ヶ崎砂礫層、常総粘土層、関東ローム層が順次堆積している。茎崎町の台地は、ほぼ並行する稲荷川、東谷田川、西谷田川などによって形成され、小堀や上岩崎にある二つの細長い半島状の台地が東西に広い台地の間を北から南へ牛久沼に向かって延びている。

下大井遺跡は、小野川右岸の標高19~21mの台地縁辺部に位置している。台地は、4~6mの比高をもつて小野川の流れる冲積地に囲み、南部は西から谷津が延びる。台地上はほぼ平坦であり、遺跡はこの台地の東部に形成されている。遺跡周辺の土地利用状況は、主として宅地・畑地・平地林であり、小野川流域の冲積地は水田として利用されている。遺跡の現況は、畑地・山林であった。

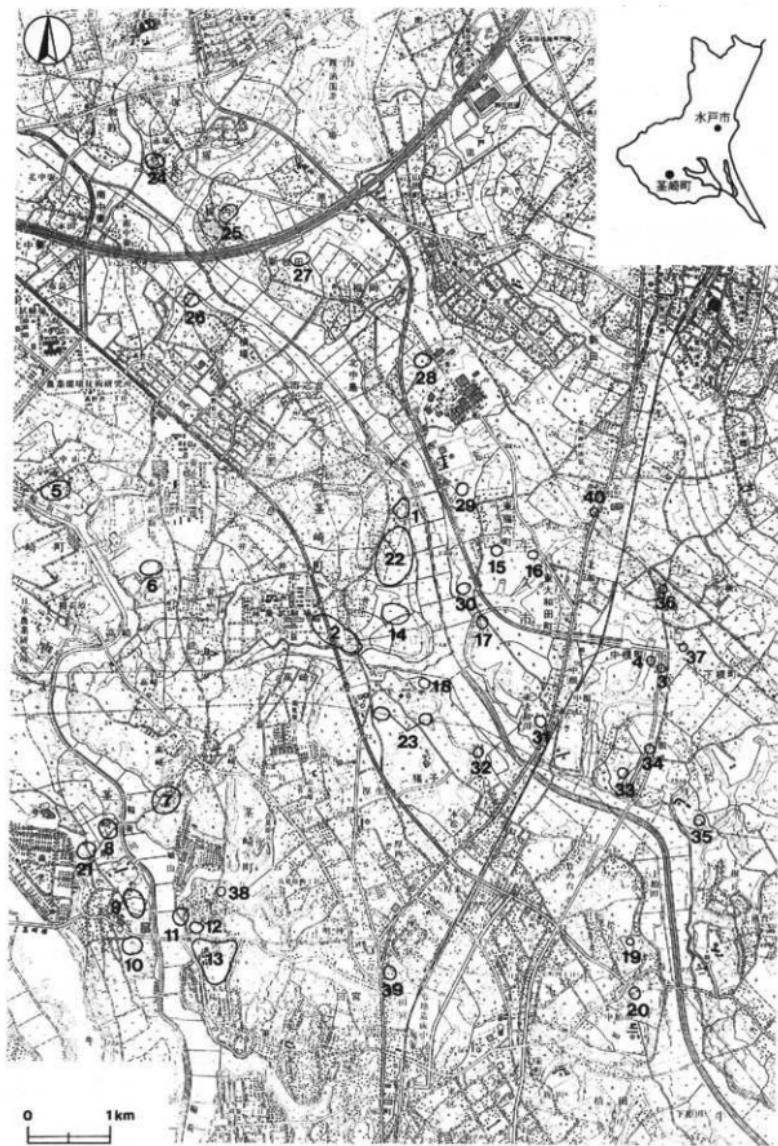
第2節 歴史的環境

下大井遺跡の所在する地域は、牛久沼周辺や小野川、稲荷川水系によって開拓された台地上に位置し、数多くの遺跡が存在している。ここでは、小野川、稲荷川流域の当遺跡と関わりの深い遺跡について、大きく旧石器時代から古墳時代までと奈良・平安時代以降の二つに分けて述べることにする。

(1) 旧石器時代から古墳時代

旧石器時代の遺跡は、茎崎町の大井五十塚古墳群内遺跡(2)、下岩崎泊城跡、小山台貝塚、牛久市のヤツノ上遺跡(3)、中久喜遺跡(4)がある。大井五十塚古墳群内遺跡は、小野川右岸に分布する古墳群であり、昭和48年12月から昭和49年3月にかけて学園都市街路牛久駒岡線の敷設に伴って発掘調査が実施され、全長43mの前方後円墳である。第5号墳の前方部周溝内から刃器が出土している。ヤツノ上遺跡・中久喜遺跡からは、剥片・ナイフ形石器が出土している。

縄文時代の遺跡は、大小河川の流域及び牛久沼沿岸の台地上に20か所以上確認されており、貝塚も9か所が周知されている。稲荷川沿いでは、茎崎町の中山鹿島遺跡(5)・菅原遺跡(6)・孝学院遺跡(7)・小堀北遺跡(8)・小堀貝塚(9)・小堀南遺跡(10)・天宝寺C遺跡(11)・天宝寺貝塚(12)・天宝寺西遺跡(13)等がある。小野川沿いでは、茎崎町の大井遺跡(14)・牛久市の馬場遺跡(15)・東山遺跡(16)・坂木遺跡(17)・守子橋遺跡(18)・柳原山上池遺跡(19)・出し山遺跡(20)等がある。小堀貝塚・天宝寺C



第2図 下大井遺跡周辺遺跡分布図

表1 下大井遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中世	近世
①	下大井遺跡	○	○	○	○	○	○	21	稻荷山古墳群		○				
2	五十塚古墳群			○				22	下大井古墳群		○				
3	ヤツノ上遺跡	○		○	○			23	道山古墳群		○				
4	中久喜遺跡			○	○			24	駒形遺跡		○				
5	中山鹿島遺跡	○						25	桜内遺跡		○				
6	音間遺跡	○						26	下横場遺跡		○				
7	孝学院遺跡	○						27	新牧田遺跡		○				
8	小莘北遺跡	○						28	北中島遺跡		○				
9	小莘貝塚	○						29	大久保遺跡		○				
10	小莘南遺跡	○						30	行人田遺跡		○	○			
11	天宝喜C遺跡	○						31	根柄遺跡		○				
12	天宝喜貝塚	○						32	中宿遺跡		○				
13	天宝喜西遺跡	○		○				33	宮の台遺跡		○				
14	大井遺跡	○						34	梨の木遺跡		○				
15	馬場遺跡	○		○	○			35	水落下遺跡		○				
16	東山遺跡	○		○	○			36	華人山遺跡		○	○			
17	坂本遺跡	○	○					37	中下根遺跡		○	○			
18	守子橋遺跡	○						38	高崎城跡				○		
19	権現山上池遺跡	○		○				39	田宮一里塚				○		
20	出し山遺跡	○		○				40	荒川沖一里塚				○		

遺跡は、中期の大遺跡である。以上の縄文時代の遺跡の傾向は、早期には小規模で遺跡数が少なく、中期になり遺跡数が増大し、後期の段階でより安定して貝塚が多く形成され、晩期には遺跡数が減少する傾向にある。

古墳時代の遺跡では、稲荷川・小野川沿い及びその周辺には多くの古墳群が確認されている。稲荷川沿いで、は、茎崎町の稲荷山古墳群(21)、小野川沿いで、茎崎町の大井五十塚古墳群・下大井古墳群(22)、牛久市の中山古墳群(23)等であり、その他の古墳も多く確認されている。発掘調査された古墳群は、前述した大井五十塚古墳群内遺跡であり、前方後円墳2基、円墳9基以上から形成されており、調査は部分的に第5・8・10号墳について実施されている。古墳の時期は、埴輪をもたないことや造物等から6世紀後半頃と推定されている。稲荷川と小野川の間に位置する茎崎町の中山古墳群は、発掘調査が実施されていないため詳細は不明である。集落跡では、小野川沿につくば市の駒形遺跡(24)・桜内遺跡(25)・下横場遺跡(26)・新牧田遺跡(27)・北中島遺跡(28)・牛久市の大久保遺跡(29)・馬場遺跡・東山遺跡・行人田遺跡(30)・根柄遺跡(31)・中宿遺跡(32)・宮の台遺跡(33)・梨の木遺跡(34)・水落下遺跡(35)・華人山遺跡(36)・中下根遺跡(37)・中久喜遺跡・ヤツノ上遺跡等がある。遺跡は複合している場合が多く、発掘調査も行われていないため不明な点が多い。ヤツノ上遺跡・中久喜遺跡・中下根遺跡・華人山遺跡は中期後半の集落跡で、

馬場遺跡は中期から後期にかけての集落跡である。

(2) 奈良・平安時代以降

奈良・平安時代は、当遺跡の中心的な時期と考えられる。笠崎町は郡成立以前は筑波国の一都であったが、その後笠崎町の中央部を流れる稻荷川及び笠崎町と牛久市の境界を流れる小野川周辺は常陸國河内郡河内郷に編入された。笠崎町内での律令期の遺跡については、笠崎町の九万坪遺跡・房内遺跡から奈良時代の上師器窯が出土しているが、造構等については不明である。小野川の右岸では、今回報告の下人井遺跡がある。小野川左岸では、牛久市の行人田遺跡・馬場遺跡・作人山遺跡・東山遺跡・中久喜遺跡・ヤツノ上遺跡・中下根遺跡等数多く確認されている。住居跡の調査軒数は、行人田遺跡で5軒、馬場遺跡で3軒、华人山遺跡で1軒、東山遺跡で3軒、中久喜遺跡で5軒、ヤツノ上遺跡で11軒と掘立柱建物跡7棟、中下根遺跡で2軒と数的には少なく、当遺跡では16軒の住居跡が確認され、小野川沿いの貴重な資料となると思われる。

中世の遺跡では、笠崎町内に稻荷川沿いに戦国時代漸次勢力を拡大していった岡見氏の支城であった高崎城跡(38)、応永3年(1396年)小田治朝の子岡野宮内少輔康朝が築城したと言われる下岩崎泊崎城跡等がある。下岩崎泊崎城跡は、昭和54年の発掘調査により内濠・外濠・土壘に囲まれた連郭式の平山城で、本丸跡・濠・土壘等が確認されている。

近世の遺跡では、稻荷川と小野川の間に位置する牛久市の田宮一里塚(39)、小野川左岸には荒川沖一里塚(40)等がある。

※ 文中の〈 〉内の番号は、表1、第2図の該当番号と同じである。

註

- 1) 興和物産株式会社 図書刊行会『小山台貝塚』 1976年3月
- 2) 茨城県教育財團「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ) ヤツノ上遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告』第81集 1993年3月
- 3) 茨城県教育財團「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ) 中久喜遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告』第86集 1993年9月
- 4) 笠崎町史編さん委員会『笠崎町史』 1990年3月
- 5) 茨城県教育財團「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅳ) 馬場遺跡 行人田遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告』第106集 1996年3月
- 6) 茨城県教育財團「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ) 東山遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告』第101集 1995年9月
- 7) 茨城県教育財團「牛久東下根特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 中下根遺跡 西ノ原遺跡 华人山遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告』第113集 1996年6月
- 8) 笠崎町教育委員会『泊崎城跡』 1980年

参考文献

- ・ 茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』 1991年3月
- ・ 茨城県『茨城県史料 考古資料編 先上器・縄文時代』 1979年3月
- ・ 茨城県『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』 1974年3月
- ・ 茨城県『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』 1995年3月
- ・ 笠崎町史編さん委員会『笠崎町史』 1990年3月
- ・ 笠崎町教育委員会『笠崎町史』 1973年3月
- ・ 角川書店『角川日本地名大辞典 8 茨城県』 1983年12月
- ・ 大森昌衛・峰須紀夫『茨城の地質をめぐって』 1987年8月
- ・ 茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査 調査結果』 1987年12月

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

F大井遺跡は、茎崎町と牛久市の境界を流れる小野川右岸の標高19~21mの台地縁辺部に位置している。現況は畑地と山林である。調査区域は、畑地を挟んで2か所に分かれるため便宜上、北側をA区、南側をB区と分けた。

今回の調査によって、旧石器時代の石器集中地点1か所、縄文時代の住居跡8軒、炉穴1基、古墳時代の住居跡3軒、土坑1基、奈良・平安時代の住居跡17軒、土坑1基、中世の塚1基、土塙墓1基、時期不明遺構1基、不明土坑54基、溝3条が検出された。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に30箱出土している。主な遺物としては、旧石器(ナイフ形石器・スクレイバー・剥片・石核)、縄文土器片、土師器、須恵器、墨書き土器、三彩陶器、灰釉陶器、石器・石製品、土製品、金属製品、土師質土器、古錢等が出上している。

第2節 基本層序の検討

当遺跡のA区内(B2a3)にテストピットを設定し、深さ約2mまで掘り下げて、上層の堆積状況を確認した。(第3図)

第1層は、暗褐色の表土層で、粘性は弱く、しまりもあまりない。層厚は28~46cmである。

第2層は、褐色のソフトローム層で、炭化粒子を極少量含んでいる。粘性は普通で、しまりはあまりない。層厚は12~20cmである。

第3層は、褐色のソフトローム層で、ローム小ブロックを少量含んでいる。粘性は普通で、しまりはあまりない。層厚は10~24cmである。

第4層は、褐色のハードローム層への漸移層で、ローム中・小ブロックを少量含んでいる。粘性・しまりとも普通である。層厚は25~45cmである。

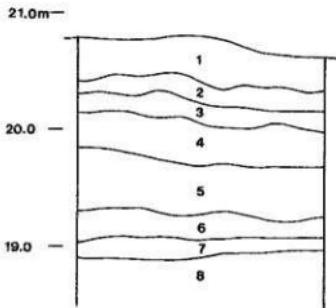
第5層は、褐色のハードローム層で、粘性・しまりとも強い。層厚は40~55cmである。

第6層は、明褐色のハードローム層で、粘性・しまりとも強い。層厚は15~26cmである。

第7層は、にぶい褐色の粘土層で、白色粒子を少量含んでいる。極めて粘性・しまりとも強い。層厚は13~24cmである。

第8層は、にぶい黄褐色の粘土層で、白色中・小ブロック・白色粒子を多量含んでいる。極めて粘性・しまりとも強い。

遺構は、第1層下面及び第2層上面で確認され、第2層から第3層にかけて掘り込んでいる。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 旧石器時代

今回の調査で、調査A区の大調査区A1・A2・B2区を中心に石器等が出土し、特にA2区に集中していた。旧石器の調査区は、調査A区の北部及び中央部の標高21mの台地上の半壇部である。以下、石器集中地点の調査方法、出土状況及び他時期の遺構調査時に覆土から出土した石器や表面採集された石器についてもここで記載する。

(1) 調査の概要と方法

試掘調査及び遺構確認時に、調査A区の北部からガラス質黒色安山岩のナイフ形石器、黒曜石の剥片などが出土した。また、調査が進行するにしたがって、第16号住居跡からホルンフェルスのナイフ形石器、第1号住居跡北側から大型の珪質頁岩の剥片等が出土した。そこで、堅穴住居跡等の調査終了後に、遺構確認時に剥片などが出上したA1h6を基点に東に32m、北に16mの範囲に4×4mのグリッドを25か所設定し掘り下げた。

(2) 石器集中地点（第4図）

位置 今回の調査で出土した26点のうち11点が、調査A区の中央部A2j2区を中心に出土している。他の15点については、第4図に示した出土遺物の平面分布のとおりであり、集中している地点は点線で示した。

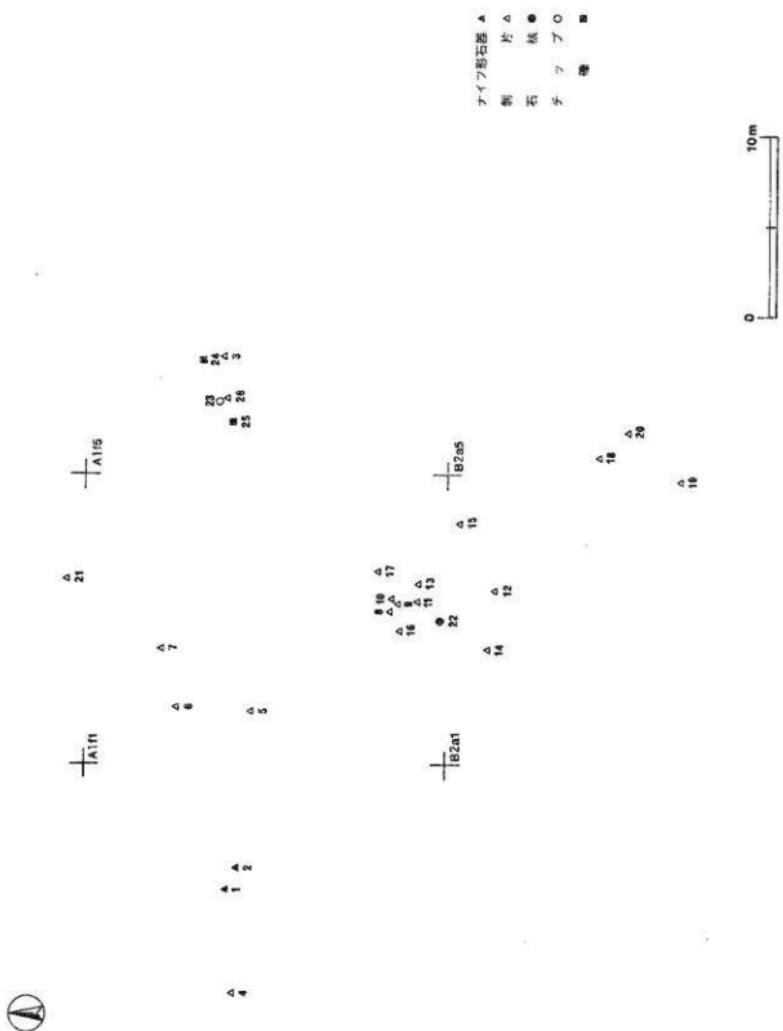
出土状況 遺物が出土した地点は、調査A区の大調査区A1・A2・B2区の範囲で、特にA2区から15点が出土し、全体の57%を占めている。レベルは標高20.597m～21.214mの範囲である。当遺跡の基本層序第5層のハードローム上層から主として出土しており、確認面からの深さは50cmである。広範囲から石器は出土したが密度は薄い。

遺物 出土石器等の総数は26点である。内訳はナイフ形石器が2点で、石質は流紋岩1点、信州系の黒曜石1点である。剥片は20点で全体の77%を占めている。石質は流紋岩2点、ガラス質黒色安山岩5点、頁岩3点、黒曜石1点、チャート5点、瑪瑙2点、ホルンフェルス1点、硬砂岩1点である。石核は頁岩の1点である。チップは黒曜石の1点である。蝶片は2点で流紋岩、石英片岩の1点ずつである。第5図1は流紋岩のナイフ形石器で、縦長剥片を用いた片側縁の先端部に加工が施されている。2は黒曜石のナイフ形石器で、縦長剥片を用いた基部の両側縁に加工が施され、片側縁は全面に押圧剥離がなされ使用痕が見られる。3は流紋岩の二次加工痕のある剥片である。

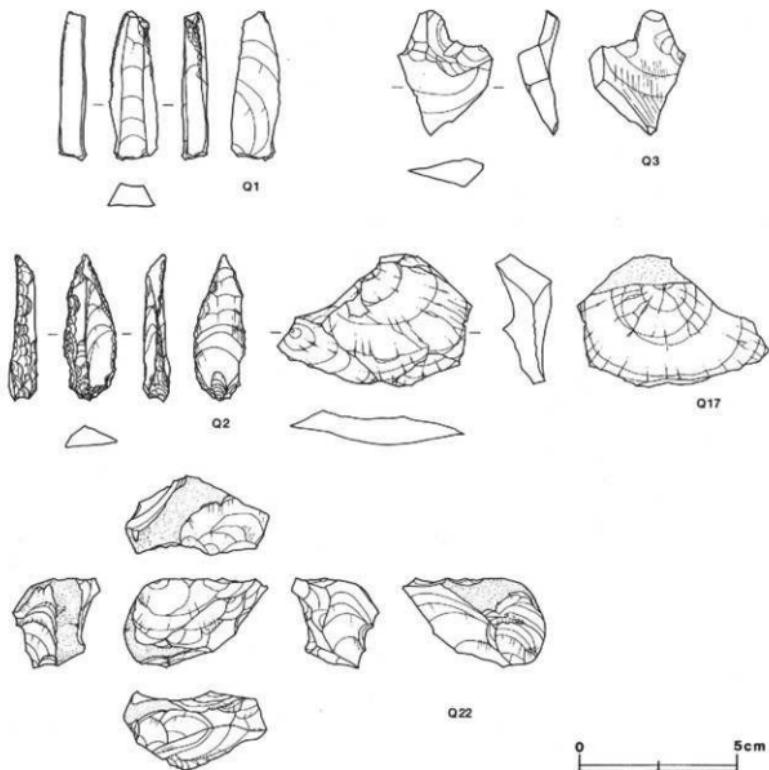
所見 本跡は、出土した石器類の半数が剥片及び石核であることから、石器製作跡の可能性が考えられる。

旧石器時代 石器観察表（石器集中地点出土）

回収番号	種別	計測値			石質	出土場所 出土地区 標高(m)	剥離と調整の特徴	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)					
第5図Q1	ナイフ形石器	4.7	1.6	0.8	6.7	流紋岩	A1h9	20.958	縦長剥片を用いた片側縁の先端部に加工が施されている。
第5図Q2	ナイフ形石器	4.6	1.7	0.8	3.1	黒曜石	A1h9	20.971	信州系の黒曜石。縦長剥片を用いた基部の両側縁に加工が施され、片側縁は全面に押圧剥離がなされ使用痕が見られる。
第5図Q3	ナイフ形石器	3.9	3.0	1.3	6.3	流紋岩	A2g6	20.632	二次加工有。難皮面が残る剥片。
Q4	剥片	3.3	2.1	0.8	4.5	流紋岩	A1h7	20.732	難皮面が残る剥片。
Q5	剥片	2.6	2.4	0.6	4.0	珪質鉆孔	A2h1	21.172	難皮面が残る剥片。
Q6	剥片	2.0	1.7	0.4	0.8	頁岩	A2g1	21.021	多方面から打撃が加えられた剥片。



第4図 旧石器集中地点平面図



第5図 旧石器集中地点遺物実測図

図版番号	種別	計測値				石質	出土地點 出土地区 標高(m)	剥離と調整の特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q7	剥片	2.8	2.6	1.2	6.6	黒曜石	A 2g2	21.087 不純物が多い高級白産の黒曜石。多方面から打撃が加えられた剥片。	写真のみ掲載 PL24
Q8	剥片	2.8	2.0	1.2	4.7	珪質頁岩	A 2j3	21.182 礫皮面が残る剥片。	写真のみ掲載 PL24
Q9	剥片	3.3	1.6	0.7	3.5	チャート	A 2j3	21.125 礫皮面が残る剥片。	写真のみ掲載 PL24
Q10	剥片	3.4	1.5	1.1	4.1	チャート	A 2j3	21.119 礫皮面が残る剥片。	写真のみ掲載 PL24
Q11	剥片	5.3	4.8	0.9	20.4	珪質頁岩	A 2j3	21.094 礫皮面が残る剥片。	写真のみ掲載 PL24
Q12	剥片	2.0	1.6	0.8	1.3	鷺卵	B 2a3	21.149 多方面から打撃が加えられた剥片。	写真のみ掲載 PL24
Q13	剥片	3.1	4.8	1.8	21.3	チャート	A 2j3	21.098 礫皮面が残る剥片。	写真のみ掲載 PL24
Q14	剥片	1.7	1.7	0.9	1.2	鷺卵	B 2a2	21.211 礫皮面が残る剥片。	写真のみ掲載 PL24
Q15	剥片	5.3	5.6	1.2	37.0	チャート	B 2a4	21.153 礫皮面が残る剥片。	写真のみ掲載 PL24
Q16	剥片	1.8	1.9	0.3	0.8	チャート	A 2j2	21.152 多方面から打撃が加えられた剥片。	写真のみ掲載 PL24
Q17	剥片	4.1	6.1	1.8	28.6	珪質頁岩	A 2j3	21.214 礫皮面が残る剥片。	PL25
Q18	剥片	4.8	5.2	1.0	22.4	頁岩	B 2c5	21.017 礫皮面が残る剥片。	写真のみ掲載 PL25
Q19	剥片	2.7	1.8	0.6	1.8	珪質頁岩	B 2d4	21.128 礫皮面が残る剥片。	写真のみ掲載 PL25
Q20	剥片	2.3	1.8	0.8	2.2	珪質頁岩	B 2c5	21.153 礫皮面が残る剥片。	写真のみ掲載 PL25

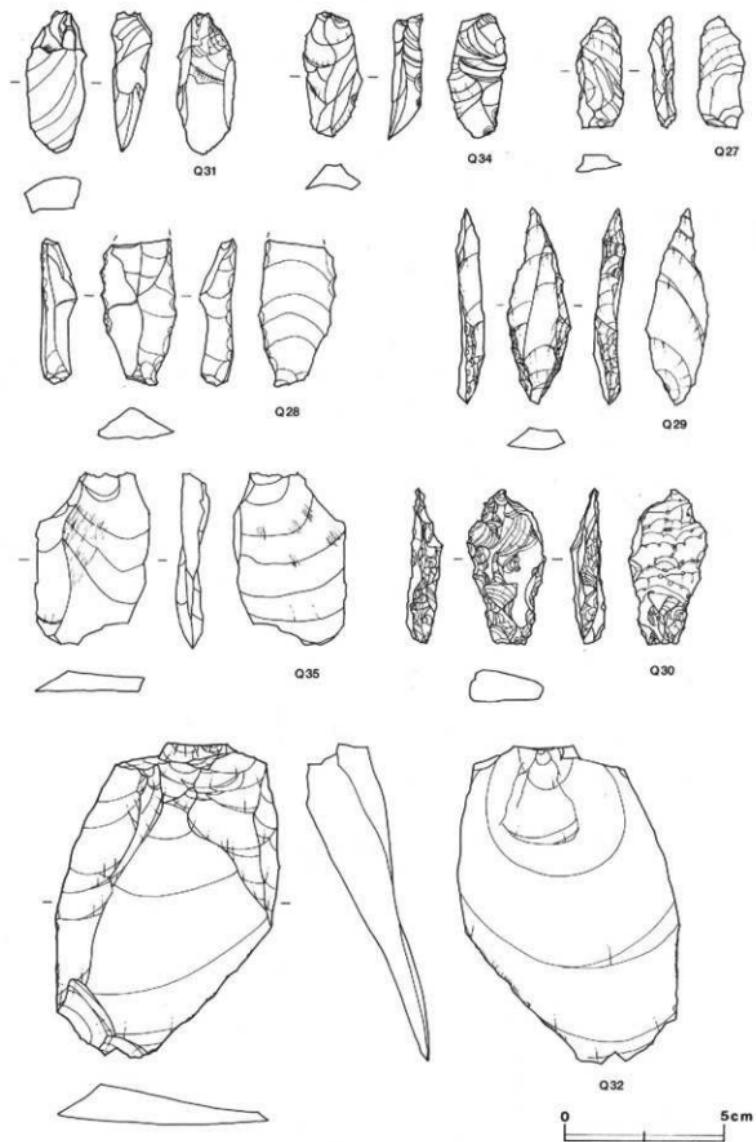
図版番号	種別	計測値				石質	出土地點	古跡と調整の特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q2 刃 片		1.9	2.3	0.6	2.8	44.7g	A2-3	21.190 鉄走面が残る鉄片。	写真的み複数 PL25
第5回Q23 G 枝		2.6	4.6	2.7	24.4	珪質頁岩	A2e3	20.848 輝度面が残る鉄片。	PL25
Q21 チップ		0.9	0.8	0.1	0.1	黑曜石	A2e6	20.632 凹削面の先端部。	写真的み複数
Q24 砕		2.3	1.5	0.9	4.1	泥灰岩	A2g6	20.597 微分的に加熱を受けている。	写真的み複数
Q25 離		4.7	2.7	2.5	41.3	石英片岩	A2a5	20.884 部分的に加熱を受けている。	写真的み複数
Q26 刃 片		2.3	1.4	0.5	4.3	泥灰岩	A2g6	20.772 輝度面が残る鉄片。	写真的み複数

(3) 造構外出土遺物

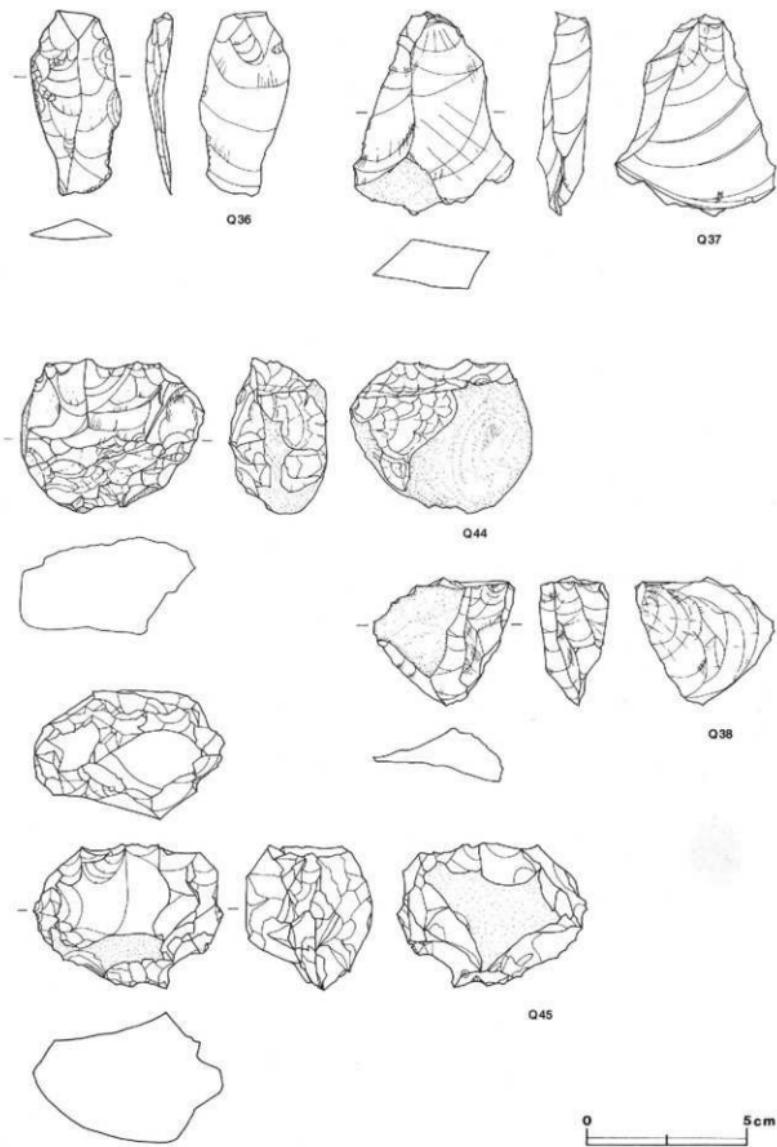
石器は、石器集中地点以外からも出土している。ここでは、表面採集したものを含めて図示する。第6図27はガラス質黒色安山岩のナイフ形石器で、片側縁の端部に加工が施されている小型のものである。28はホルンフェルスのナイフ形石器で、両側縁の基部に加工が施されており、ほぼ中央部で切断されている大ぶりのものと思われる。29はガラス質黒色安山岩のナイフ形石器で、両側縁の基部に加工が施され、片側縁に加工されたものである。30は高原山産の黒曜石のサイドスクレイパーで、縦長剥片を用い両側縁に刃部調整が施されている。31は油脂頁岩の使用痕のある箇片、32は珪質頁岩の使用痕のある大ぶりの剥片である。33は高原山産、34は信州系の黒曜石の剥片である。

旧石器時代 石器観察表(遺構外出土)

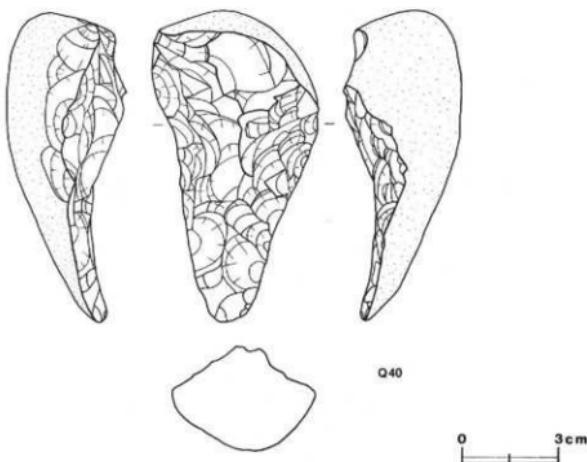
図版番号	種別	計測値				石質	出土地點	古跡と調整の特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第6回Q27 ナイフ形石器		3.5	1.5	0.9	4.0	野川経石	AR系採	片側縁の端部に加工が施されている小ぶりのナイフ。 両側縁を受けて変形している。	PL25
第6回Q28 ナイフ形石器		4.6	2.4	1.0	11.6	44.7g	S1-12層	両側縁の基部に両側縁に加工が施され、ほぼ中央部で切断されている大ぶりのナイフ。	PL25
第6回Q29 ナイフ形石器		6.1	2.1	0.9	5.2	野川経石	S1-18層	両側縁の端部及び、両側縁に加工が施されたナイフ。	PL25
第6回Q30 ナイフ形石器		4.8	2.5	1.1	9.6	黑曜石	A区表	高麗山産の直角片岩。既長剥片を用い両側縁に加工して調節が施されている。	PL25
第6回Q31 剥離片岩		2.6	4.0	1.2	8.6	油脂頁岩	A区表	先端部に使用痕が見られる。	PL25
第7回Q32 剥離片岩		9.9	7.0	2.5	110.2	珪質頁岩	A区表	両側縁に使用痕が見られる大ぶりの剥片。	PL25
Q33 刃 片		3.5	4.5	1.3	17.8	黑曜石	A区表	高麗山産の直角片岩。多角形に打撃が施された剥離片。	写真的み複数 PL25
第6回Q34 刃 片		3.9	2.9	1.0	5.9	黑曜石	S1-2層	付材系の黒曜石。基部に打撃が残る。	PL25
第6回Q35 刃 片		5.4	3.6	1.0	15.3	チャート	A区表	打撃で残る直角の剥片。	PL25
第7回Q36 剥離片岩		3.6	2.8	0.9	7.9	泥灰岩	A区表	両側縁に使用痕が見られる剥片。	PL25
第7回Q37 剥離片岩		6.3	5.0	1.4	35.3	珪質頁岩	A区表	理波部が残る剥片。	PL25
第7回Q38 破 残		5.1	4.9	1.6	18.1	珪質頁岩	A区表	右肩部分が残る直角。	PL25
Q39 刃 片		4.2	2.2	0.7	5.1	珪質頁岩	A区表	両側縁に使用痕が見られる剥片。	写真的み複数 PL25
第8回Q40 破 残		9.7	5.1	3.3	152.7	44.7g	A区表	片側縁が残る剥片。	PL25
Q41 刃 片		4.7	2.1	2.2	53.3	珪質頁岩	A区表	輝度面が残る剥片。	写真的み複数 PL25
Q42 破 残		4.6	4.5	2.6	55.7	輝 磨	A区表	輝度面が残る剥片。	写真的み複数 PL25
Q43 刃		6.1	8.1	2.3	137.8	珪質頁岩	A区表	輝度面が残る。	写真的み複数 PL25
第7回Q44 破 残		4.6	5.6	3.0	81.8	泥灰岩	A区表	建設用が残り、多方から打撃が加えられている。	PL25
第7回Q45 破 残		4.5	5.9	4.0	110.6	泥灰岩	A区表	輝度面が残る。多く次から打撃が加えられている。	PL25



第6図 旧石器遺物実測図(1)



第7図 旧石器遺物実測図（2）



第8図 旧石器遺物実測図（3）

2 縄文時代

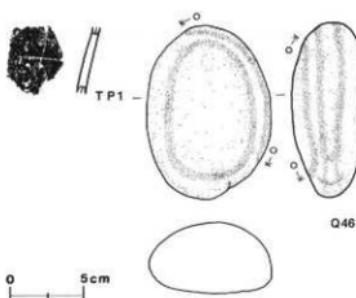
縄文時代の遺構は、竪穴住居跡8軒、か穴1基である。以下、検出された遺構の特徴や遺物について記載する。

（1）竪穴住居跡

第4号住居跡（第10図）

位置 調査A区の南部、B2g5区。

規模と平面形 上部が削平されているため、壁の立ち上がりをとえることができなかった。ピットの配列から長径4.94m、短径4.26mの楕円形と推定される。



第9図 第4号住居跡出土遺物実測図

長径方向 N-19°-Eと推定される。

床 平坦で、特に踏み固められた面はない。

ピット 16か所（P1～P16）。P1～P6は径26～35cmの円形で、深さ20～45cmである。いずれも規模及び配列から主柱穴と思われる。P7～P14は長径22～35cm、短径16～28cmの楕円形で、深さ21～40cmである。いずれも主柱穴と主柱穴の中間に位置し補助柱穴と思われる。P15は長径55cm、短径41cmの楕円形で、深さ14cmである。P16は長径51cm、短径33cmの楕円形で、深さ39cmである。いずれも他の柱穴に比べ大きく性

格は不明である。

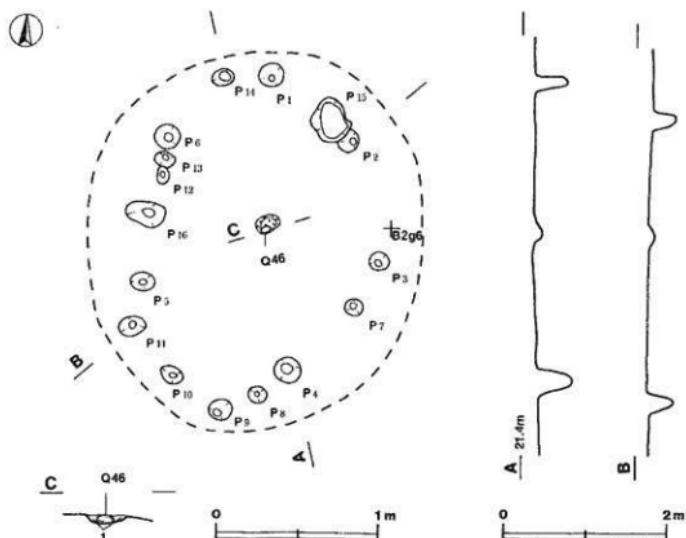
炉 ほぼ中央に付設されている。平面形は長径30cm、短径22cmの梢円形で、床面を7cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状で、赤変硬化していない。

炉土質解説

1. 灰化色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量

遺物 繩文土器片1点、磨石1点が出土している。第9図TP1は深鉢の胸部片、Q46は磨石で炉内から出土している。

所見 本跡は、炉が付設されていること、柱穴が巡っていることから住居跡と判断した。時期は、繩文土器片1点が炉内から出土しており、本跡に伴う遺物と判断し、繩文時代前期後葉（興津式期）と考えられる。



第10図 第4号住居跡実測図

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 TP1	深鉢 繩文土器	B(4.6)	胸部片。側底と横底に沈痕が施されている。	段石 灰色 普通	5% PL23

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第9図Q46	石	11.8	8.6	5.0	725.0	安山岩	円盤状で2面使用	100%

第15号住居跡（第11図）

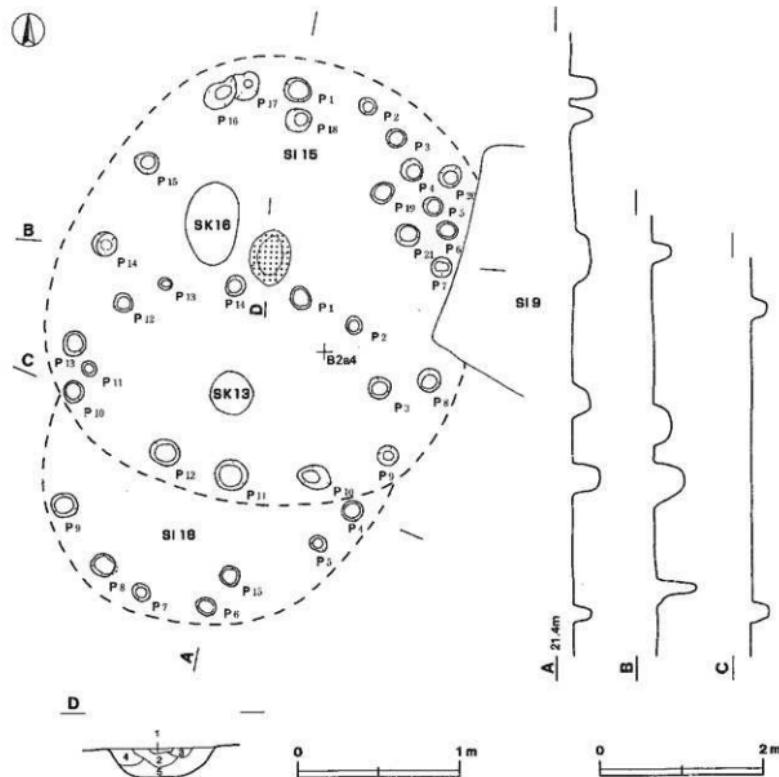
位置 潟堺A1区の中央部、A2j3区。

重複関係 第9号住居、第13・16号上坑に掘り込まれており、本跡が古い。また、第18号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 上部が削半されているため、壁の立ち上がりをとらえることができなかった。ピットの配列から径5.53mの円形と推定される。

床 平坦で、特に踏み固められた面はない。

ピット 21か所（P1～P21）。P1・P10・P12・P16は長径36～45cm、短径30～33cmの楕円形で、深さ32～39cmである。P2～P9・P11・P13～P15は径25～35cmの円形で、深さ16～48cmである。いずれも炉を中心に入っていることと配列から主柱穴と思われる。P17・P18・P20・P21は径30～35cmの円形で、深さ18～29cmである。P19は長径30cm、短径22cmの楕円形で、深さ23cmである。いずれも主柱穴の内側及び外側に位置し補助柱穴と思われる。



第11図 第15・18号住居跡実測図

炉 ほぼ中央に付設されている。平面形は長径70cm、短径53cmの楕円形で、床面を17cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床床面は皿状で、赤変硬化していない。

炉土層解説

- 1 壁 細 色 壁上小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子少量
- 2 土 層 色 ローム粒子・焼土粒子は少々量
- 3 地 壓 付 ローム粒子少々量、壁上小ブロック少々量
- 4 地 壓 付 ローム粒子中量、焼土小ブロック微量
- 5 地 壓 付 ローム粒子少々量、壁上小ブロック微量

遺物 瓢2点のみで、土器は出土していない。

所見 本跡は、炉が付設されていること、柱穴が巡っていることから住居跡と判断した。時期は、土器が出土していないため明確ではないが、遺構の形態から縄文時代としておく。

第17号住居跡（第12図）

位置 調査A区の北部、A 2g4区。

重複関係 第20号住居、第23・25号土坑に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 上部が削平されているため、壁の立ち上がりをとらえることができなかった。ピットの配列から長径5.08m、短径4.70mの円形と推定される。

床 平坦で、特に踏み固められた面はない。

ピット 15か所（P 1～P 15）。P 1・P 2・P 6～P 8・P 13～P 15は長径37～55cm、短径30～45cmの楕円形で、深さ14～32cmである。P 3～P 5・P 9～P 12は径30～45cmの円形で、深さ17～43cmである。いずれも配列から主柱穴と思われる。

P 5・P 10土層解説

- 1 壁 細 色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少々量、炭化粒子微量
- 2 地 壓 付 ローム粒子中量、ローム中ブロック少々量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、柱穴が巡っていることから住居跡と判断した。時期は、土器が出土していないため明確ではないが、遺構の形態から縄文時代としておく。

第18号住居跡（第11図）

位置 調査A区の中央部、B 2a3区。

重複関係 第15号住居、第13号土坑に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 上部が削平されているため、壁の立ち上がりをとらえることができなかった。ピットの配列から長径4.80m、短径4.22mの楕円形と推定される。

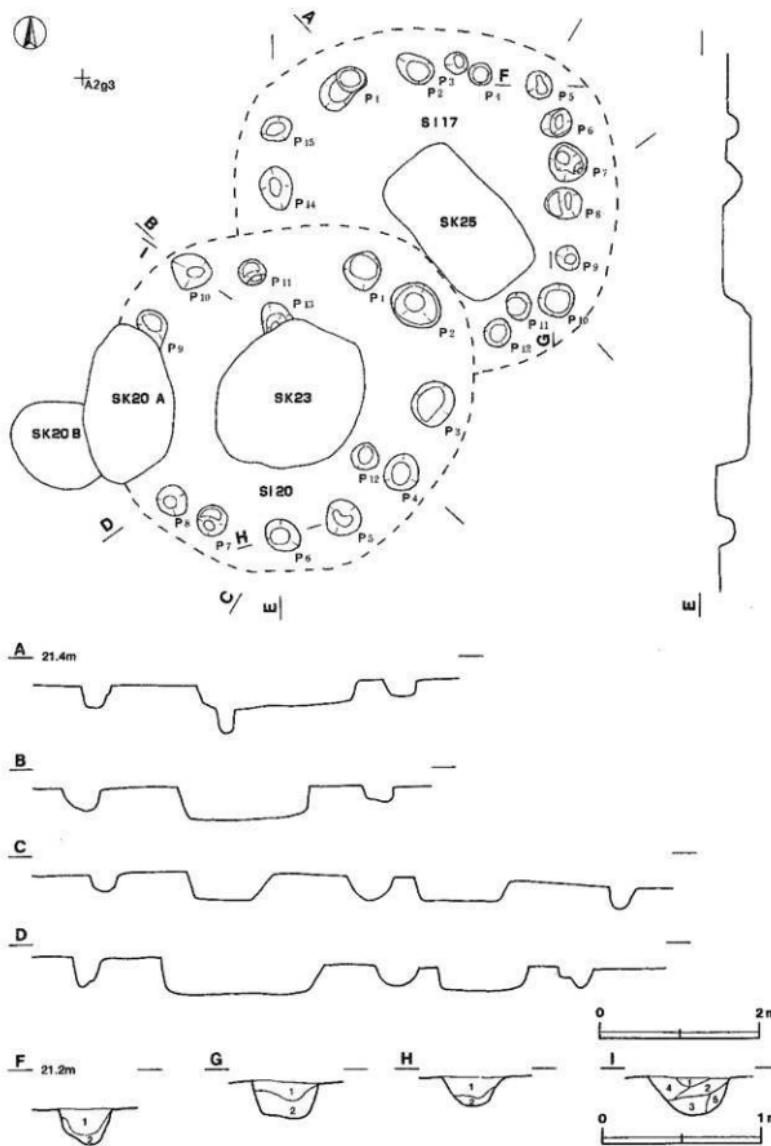
長径方向 N-29°-Eと推定される。

床 平坦で、特に踏み固められた面はない。

ピット 15か所（P 1～P 15）。P 1・P 2は長径31cm、短径24cmの楕円形で、深さ23～25cmである。P 2・P 4～P 14は径19～34cmの円形で、深さ17～30cmである。いずれも配列から主柱穴と思われる。P 15は径26cmの円形、深さ21cmで、P 6の内側に位置し補助柱穴と思われる。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、柱穴が巡っていることから住居跡と判断した。時期は、土器が出土していないため明確ではないが、遺構の形態から縄文時代としておく。また、本跡からはかが検出されておらず、第15号住居に掘り込まれたことも考えられる。



第12図 第17・20号住居跡実測図

第20号住居跡（第12図）

位置 調査A区の北部。A 2h31K。

重複関係 第20A・20B・23号上坑に掘り込まれており、本跡が古い。また、第17号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 上部が削平されているため、壁の立ち上がりをとらえることができなかった。ピットの配列から長径4.54m、短径4.42mの円形と推定される。

床 平坦で、特に踏み固められた面はない。

ピット 12か所（P 1～P 12）。P 1・P 4・P 5・P 7・P 8・P 11は直径37～46cmの円形で、深さ19～27cmである。P 2・P 3・P 6・P 9・P 10は長径42～65cm、短径22～55cmの楕円形で、深さ23～33cmである。いずれも配列から柱穴と思われる。P 12は径36cmの円形、深さ35cmで、P 4の内側に位置し補助柱穴と思われる。

P 6 土層解説

1	褐	色	ローム粘子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
2	褐	色	ローム粘子中量、ローム小ブロック少量

P 10 土層解説			
1	褐	色	ローム粘子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
2	褐	色	ローム粘子中量、ローム小ブロック少量
3	褐	色	ローム小ブロック、ローム粘子中量
4	半	褐	ローム小ブロック、ローム粘子少量、炭化粒子微量
5	褐	色	ローム粘子多量、コーム小ブロック中量

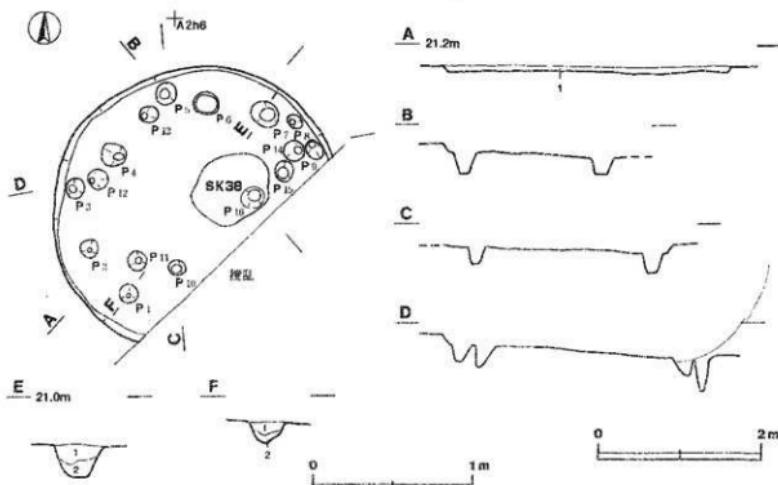
遺物 出土していない。

所見 本跡は、柱穴が巡っていることから住居跡と判断した。時期は、土器が出土していないため明確ではないが、遺構の形態から縄文時代としておく。また、第17号住居跡と重複しており、ピットの配列及びピットの切り合い関係から本跡が新しいものと判断した。

第21号住居跡（第13図）

位置 調査A区の北部。A 2h61K。

重複関係 第38号上坑に掘り込まれており、本跡が古い。



第13図 第21号住居跡実測図

規模と平面形 南東部が擾乱されている。擾乱部を除いた規模は長径3.62m、確認できた直径2.48mで楕円形と推定される。

長径方向 N-44°-Eと推定される。

壁 壁高は12~16cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、特に踏み固められた面はない。

ピット 16か所 (P 1 ~ P 16)。P 1 ~ P 6・P 8は径20~32cmの円形で、深さ12~27cmである。P 7・P 9は長径25~37cm、短径20~30cmの楕円形で、深さ24~43cmである。いずれも配列から主柱穴と思われる。P 10 ~ P 16は径22~30cmの円形で、深さ14~28cmである。いずれも主柱穴の内側に位置し補助柱穴と思われる。

P 1 ~ P 7 土質解説

- 1 黒 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
2 開 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

覆土 単一層で、自然堆積である。

土壤解説

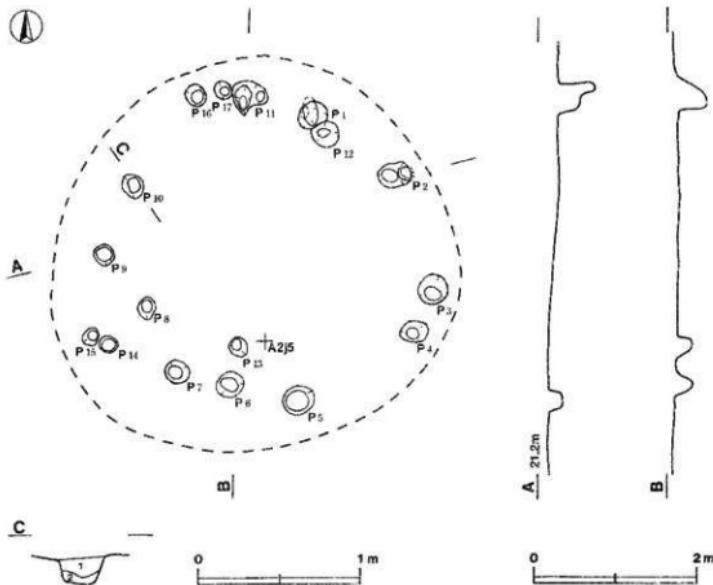
- 1 黒 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化物微量

遺物 黒曜石の小剝片4点、灘口点が出土している。

所見 本跡は、柱穴が巡っていることから住居跡と判断した。時期は、土器が出土していないため明確ではないが、造構の形態から縄文時代としておく。

第22号住居跡（第14図）

位置 調査A区の中央部、A 214区。



第14図 第22号住居跡実測図

規模と平面形 上部が削平されているため、壁の立ち上がりをとらえることができなかった。ピットの配列から長径5.06m、短径4.95mの円形と推定される。

床 平坦で、特に踏み固められた面はない。

ピット 17か所（P 1～P 17）。P 1・P 2・P 4・P 6～P 8・P 10・P 11は長径33～40cm、短径21～31cmの楕円形で、深さ16～43cmである。P 3・P 5・P 9は直径30～40cmの円形で、深さ20～28cmである。いずれも配列から主柱穴と思われる。P 12～P 17は径21～30cmの円形、深さ13～31cmで、いずれも主柱穴の内側及び外側に位置し補助柱穴と思われる。

P 10土層解説

- 1 種類色 ローム小ブロック・ク・玄武岩子少量、炭化粘子微量
2 種類色 ローム粘子中量、炭化粘子微量

遺物 縄文土器片4点、礫9点が出土している。

所見 本跡は、柱穴が巡っていることから住居跡と判断した。時期は、遺物が細片であり明確にできないが、遺構の形態から縄文時代としておく。

第24号住居跡（第15図）

位置 調査A区の中央部、B 2664m。

規模と平面形 長径4.48m、短径3.91mの楕円形である。

長径方向 N-58°-W

壁 壁高は7～12cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、特に踏み固められた面はない。

ピット 15か所（P 1～P 15）。P 1・P 9は長径30～33cm、短径25cmの楕円形で、深さ27～30cmである。P 2～P 8・P 11・P 12は直径25～30cmの円形で、深さ21～30cmである。いずれも配列から主柱穴と思われる。P 12・P 13・P 15は径24～32cmの円形で、深さ19～30cmである。P 14は長径25cm、短径18cmの楕円形、深さ27cmである。いずれも主柱穴の内側及び外側に位置し補助柱穴と思われる。

P 1・P 4土層解説

- 1 種類色 ローム小ブロック・ローム粘子中量、炭化粘子微量
2 種類色 ローム小ブロック・ローム粘子中量、ローム中ブロック微量

炉 中央から北寄りに付設されている。平面形は長径82cm、短径65cmの楕円形で、床面を8cmほど掘りくぼめた地炉床である。炉床面は粗面で、火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 種類色 砂・小ブロック中量、玄土粘子少量、透水土中ブロック・炭化粘子微量
2 種類色 砂・小ブロック・透水粘子中量、炭化粘子微量

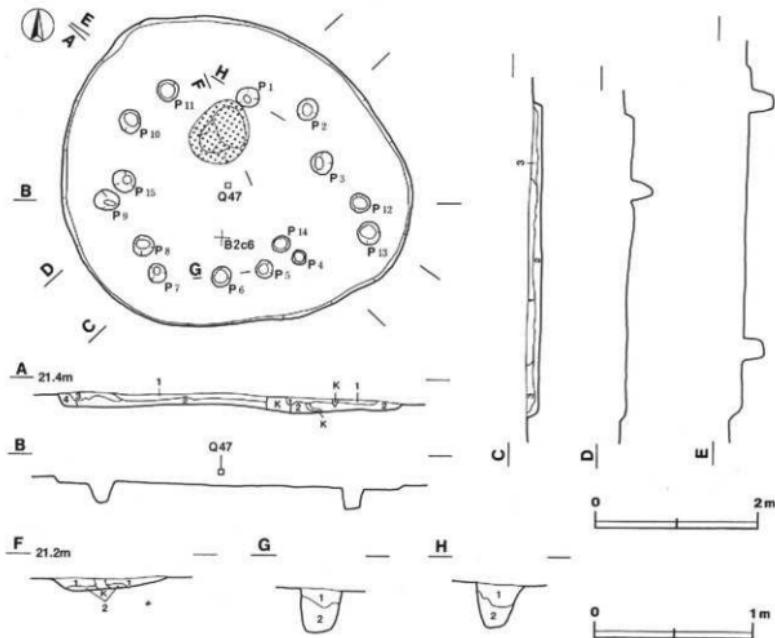
覆土 1層からなり、ロームブロックの不均一な混入から人为堆積と思われる。

土層解説

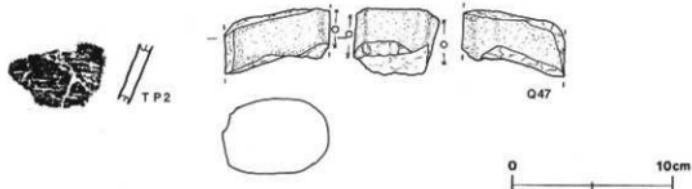
- 1 種類色 ローム粘子少量、ローム小ブロック・炭化粘子微量
2 種類色 ローム粘子中量、ローム小ブロック少、透水粘子微量
3 種類色 ローム小ブロック少、ローム粘子・炭化粘子微量
4 種類色 ローム粘子中量、ローム小ブロック微量

遺物 縄文土器片2点、上師器片4点、磨石1点、礫1点が出土している。第16図TP 2は深鉢の副部片、Q 47は磨石で、いずれも中央部の覆土下層から出土している。上師器片は、搅乱による混入である。

所見 本跡からは、炉及び炉を中心とする柱穴を検出した。時期は、遺構の形態及び覆土下層から出土した上器から、縄文時代前中期から中期初頭（巣島台式期）と考えられる。



第15図 第24号住居跡実測図



第16図 第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土上遺物観察表

国版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 TP2	深鉢 縄文土器	B (3.6)	脚部片。黑絵文が描かれている。	長石 橙色 普通	5%
<hr/>					
国版番号	器種	計測値	石質	特徴	備考
第16図Q47	石	長さ(cm) (4.1) 幅(cm) (6.5) 厚さ(cm) 5.3 重量(g) (180.7)	安山岩	一部欠損	20%

(2) 炉穴

第1号炉穴 (第17図)

位置 調査A区の中央部、B 2d4区。

規模と平面形 径1.25mの円形で、深さ52cmである。

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 凸状である。

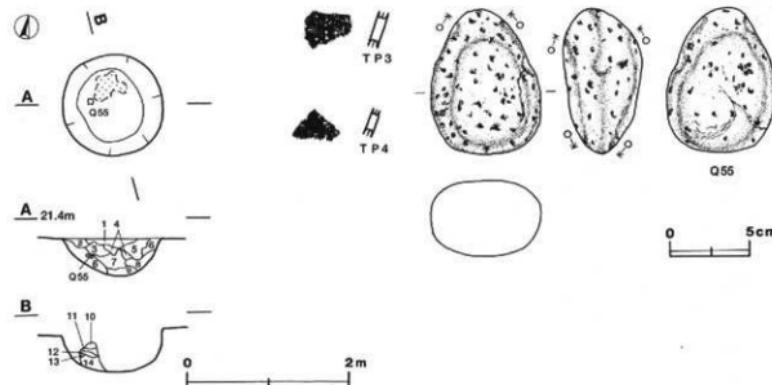
覆土 14層からなる人為堆積で、中央部や北側に焼土ブロック・焼土粒子が多く見られ、特に底面から14cmほど上の12層には焼土ブロックが多く含まれている。

土壤解説

- 1 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子、炭化物微量
- 2 灰褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土小ブロック・焼土粒子、炭化物微量
- 3 灰褐色 烧土粒子多量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック中量、炭化物微量
- 4 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子中量、炭化物微量
- 5 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土小ブロック・炭化物微量
- 6 灰褐色 烧土粒子、炭化物微量
- 7 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子、炭化物微量
- 8 灰褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子、炭化物微量
- 9 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量
- 10 灰褐色 烧土粒子中量、ローム粒子少量
- 11 灰褐色 烧土粒子中量、ローム粒子少量
- 12 灰褐色 烧土小ブロック・焼土粒子中量
- 13 灰褐色 烧土粒子少量
- 14 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量

遺物 繩文土器片4点、磨石1点、蝶3点が出土している。第17図TP3・4は深鉢の胸部片で、覆土から出土している。Q55の磨石は、中央部の覆土上層から出土している。

所見 本跡は、覆土に焼土ブロック・焼土粒子を多く含み、縩文土器片が出土している。時期は、覆土の状況及び遺構の形態等から、縩文時代早期前葉(夏島式期)と考えられる。



第17図 第1号炉穴・出土遺物実測図

第1号か穴出土遺物観察表

開拓番号	器種	当制限(cm)	器形及び文様の特徴	底土・色調・焼成	備考
第17回 T P 3	漆 鉢 陶文土器	B (2.2)	底部に、陶文が施されている。	長石・漂母 に赤い鉄色 普通	5%
T P 4	漆 鉢 陶文土器	B (1.7)	底部に、陶文が施されている。	長石・漂母 に赤い鉄色 普通	5%

開拓番号	器種	計 測 値	石 墓	特 徵	備 考
第17回Q57	石	9.1 6.9 4.9 412.7	安山岩	全面使用	100%

3 古墳時代

古墳時代の遺構としては、堅穴住居跡4軒、土坑1基が検出された。以下、検出された遺構の特徴や遺物について記載する。

(1) 坚穴住居跡

第1号住居跡（第18図）

位置 調査A区の南部、B255区。

重複関係 中世の第1号塚が本跡の覆土上に構築されており、本跡が占い。

規模と平面形 南壁側が調査区域外にかかる。長軸5.22m、確認できた短軸2.91mで、長方形と推定される。

主軸方向 N-82°-Eと推定される。

壁 壁高は8~36cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 東部を除き、壁トを巡っている。断面はU字形で、上幅15~29cm、下幅5~10cm、深さ5~11cmである。

床 中央部に少し凹凸があり、踏み固められている。

ピット 3か所。(P 1~P 3)。P 1は二段掘り込みになっており、上段は長径53cm、短径46cmの楕円形で、深さ25cmである。下段は長径44cm、短径33cmの楕円形で、深さ35cmである。北東コーナー部に位置し、主柱穴と思われる。P 2は長径41cm、短径36cmの楕円形、深さ7cmで、位置からP 1の補助柱穴と思われる。P 3は長径40cm、短径31cmの楕円形で、深さ12cmである。南壁側が調査区域外のためピットの有無がはっきりしないため、性格は不明である。

P 1 土層解説

- 1. 黄 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、漂土粒子・炭化粒子微量
- 2. 淡 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、漂土粒子微量
- 3. 黑 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、漂土粒子微量

P 2 土層解説

- 1. 黄 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量

P 3 土層解説

- 1. 黄 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2. 黑 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

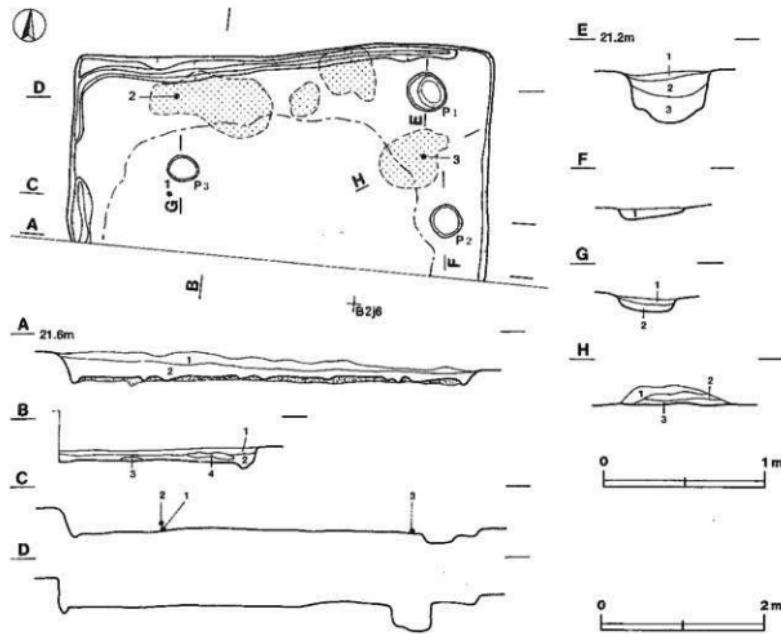
覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。また、壁際を中心に床面上に焼土及び炭化物の堆積した層が4か所ほど検出され、焼失住居の可能性が考えられる。

土壤解説

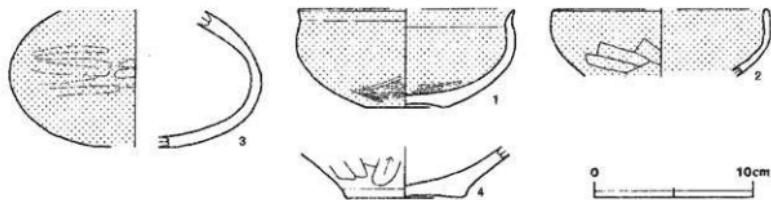
- 1 砂褐色 残土壁子中量、ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
 - 2 灰褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・純土粒子・炭化粒子少量
 - 3 黑褐色 ローム粒子少量
 - 4 赤褐色 純土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 残土層解説**
- 1 黑褐色 残土壁子中量、壁上小ブロック・炭化粒子少量、炭化物微量
 - 2 灰褐色 炭化物微量、炭化粒子少量、壁上小ブロック・壁上壁子微量
 - 3 紅褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、純土小ブリッタ・壁上粒子微量

遺物 土師器及びその小破片100点、須恵器片2点が出土している。第19図1~4は土師器である。覆土下層では、2の壺が北壁際から正位の状態で出土している。床面では、1の壺が中央部から逆位の状態で、3の壺が東側から逆位の状態で出土している。その他にも覆土から4の甕が出土している。須恵器片は搅乱による混入である。

所見 本跡は、南部が調査区域外に延びており、全体の半分ほどの確認であったと推定される。時期は、出土土器から古墳時代（5世紀後半）と考えられる。



第18図 第1号住居跡実測図



第19図 第1号住居跡出土上遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	直徑(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1 上 部 瓶	瓶	A [13.6] B 6.2 C 3.0	底部から口縁部分。凹んだ平底。体部は内側で立ち上がり。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外側擦ナメ。体部外側へタ割り後ハラ焼き。内面ハラ焼き。内・外面赤彩。	長石・石英・赤色粒子 に赤い赤褐色 普通	P1.15
	瓶	A [13.4] B (4.2)	体部から口縁部分。体部は内側して口縁部に来る。	口縁部内・外側擦ナメ。体部外側へタ割り。内面ナマ。内・外面赤彩。	長石・石英・赤色粒子 に赤い赤褐色 普通	P1.15
	罐	B (8.6)	口縁部・底部欠損。体部は瘤状で幾段入氷を半径にもつ。	体部外側ハラ焼き。外面赤彩。	長石・石英・赤色粒子 に赤い赤褐色 普通	P1.15
4 土 鍋 瓶	甕	B (3.2)	底部丸。やや凸んだ平底。体部は内側して立ち上がる。	体部外側ハラ焼き。	長石・石英・赤色粒子 に赤い赤褐色 普通	5%
	土 鍋 瓶	C [7.6]				

第23号住居跡（第20図）

位置 調査A区の南部、B 2h7区。

重複関係 第60号土坑を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸7.30m、短軸6.90mの方形である。

主軸方向 N - 3° - E

壁 壁高は35~53cmで、外傾して立ち上がる。

盤溝 入り口部及び竈の部分を除き、壁下を巡っている。断面はU字形で、上幅22~41cm、下幅10~22cm、深さ8~13cmである。

床 西壁際から東壁際にかけて傾斜しており、東壁際は13cmほど低くなっている。

ピット 13か所 (P 1 ~ P 13)。P 1は長径65cm、短径55cmの梢円形で、深さ31cmである。P 2は二段掘り込みになっており、上段は長径62cm、短径53cmの梢円形で、深さ18cmである。下段は径22cmの円形で、深さ32cmである。P 3は長径46cm、短径39cmの梢円形で、深さ47cmである。P 4は径44cmの円形で、深さ57cmである。いずれも配列から主柱穴と思われる。P 5は長径70cm、短径47cmの梢円形で、深さ14cmで、竈を結ぶ直線状に位置し、入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6・P 7・P 9・P 10・P 12は径31~45cmの円形で、深さ12~28cmである。P 8は長径40cm、短径31cmの梢円形で、深さ32cmである。P 11は一段掘り込みになっており、上段は径60cmの円形で、深さ16cmである。下段は径20cmの円形で、深さ30cmである。P 6・P 7はP 1の外側、P 8はP 3の内側、P 9・P 10はP 4の外側、P 11はP 1とP 2の中間、P 12はP 3とP 4の中間に位置し、いずれも補助柱穴と思われる。P 13は長径100cm、短径75cmの梢円形、深さ10cmで、遺構の中央部に位置し、掘り込みも浅く性格は不明である。

P 4 土層解説

- 1 暗褐色
ローム小プロック・ローム粒子少量、ローム小プロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 灰褐色
ローム小プロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 黄褐色
炭化物・中层、ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色
ローム小アッシュ・ローム小粒子少量、炭化粒子微量
- 5 黑褐色
ローム小プロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 6 黑色
ローム小プロック・ローム粒子少量、ローム中プロック・炭化粒子微量

窓 北壁中央に付設されている。焚口部から煙道口部までの長さ130cm、両袖幅102cmで、壁外への掘り込みは36cmである。袖部は粘土と砂粒を混せて構築されている。火床部は、円形に6cmほど掘り込まれ、火熱を受け変形化している。煙道は火床部から緩やかに立ち上がる。

窓土層解説

- 1 乾燥型
ローム粒子・焼土粒子少量、ローム小プロック・炭化粒子微量
- 2 湿潤型
ローム粒子・焼土小プロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 粘土層
炭化小プロック・焼土粒子中量、男性化少量、ローム粒子・粘土小プロック微量
- 4 褐色
ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量
- 5 黑褐色
燒土粒子・炭化粒子少量、燒土小プロック・ローム粒子微量
- 6 灰褐色
燒土粒子中量、燒土粒子・燒土粒子・炭化粒子微量
- 7 黑褐色
燒土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 8 黑色
燒土粒子・ローム粒子・炭化粒子微量、燒土小プロック微量

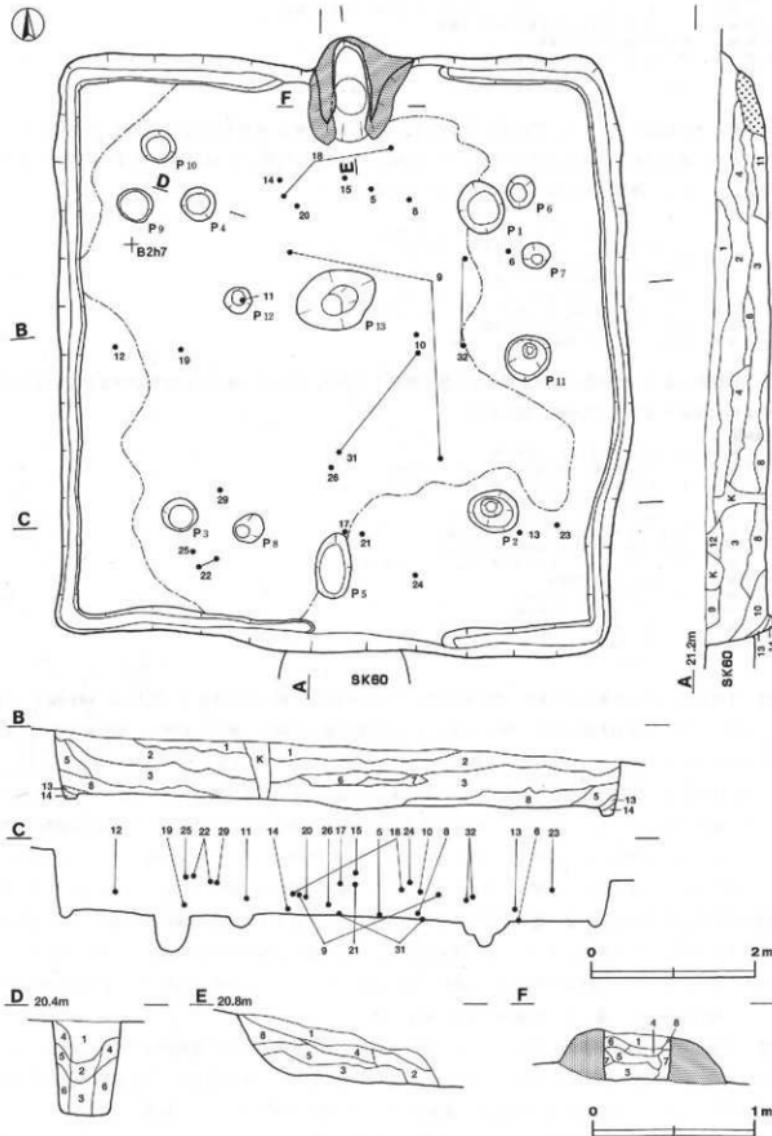
覆土 14層からなる。暗褐色上及び黒褐色上土体の堆積土であり、ローム・焼土・炭化物が含まれていること及び遺物の投棄状況から人為堆積と思われる。

土層解説

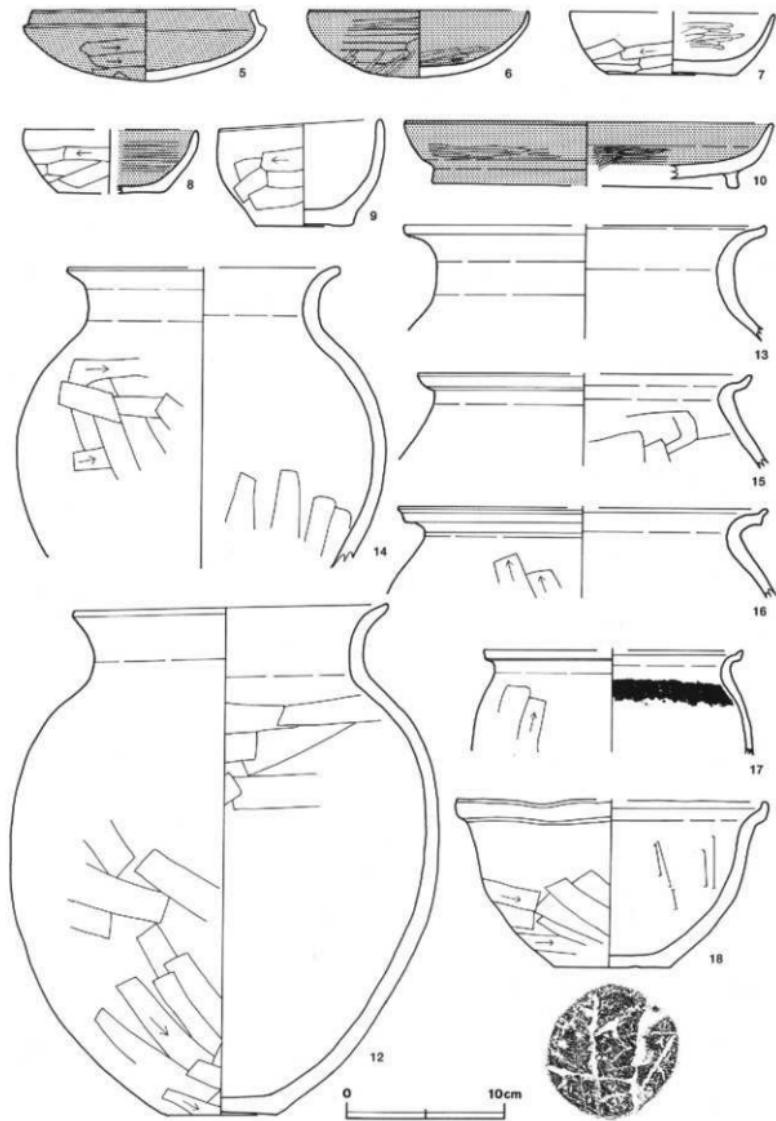
- 1 暗褐色
ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量
- 2 黑褐色
ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量、ローム小プロック微量
- 3 黑褐色
ローム粒子中量、ローム小プロック・燒土粒子・炭化物微量
- 4 暗褐色
ローム粒子中量、燒土粒子・炭化物微量
- 5 灰褐色
ローム小プロック中量、ローム粒子・炭化物微量
- 6 黑褐色
燒土粒子・燒土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 7 灰褐色
燒土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・炭化物少量
- 8 灰褐色
ローム小プロック・ローム粒子中量、燒土小プロック・炭化物少量
- 9 黑褐色
ローム粒子中量、炭化物微量
- 10 黑褐色
ローム小プロック・ローム粒子中量
- 11 黑褐色
ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量
- 12 灰褐色
ローム粒子・燒土粒子・炭化物微量
- 13 黑褐色
ローム粒子中量、ローム小プロック少量、燒土粒子微量
- 14 黑色
ローム粒子中量

遺物 土器器及びその小破片1,158点、須恵器及びその小破片249点、砥石1点が出上している。第21図5~19は土器器で、20~34は須恵器である。覆土上層では、15の甕が窓の南側から横位の状態で、17の甕がP 5の北側から斜位の状態で、21~24の壺がP 5の東側から逆位の状態で、23の壺が南東コーナー部から逆位の状態で、22~25の壺がP 3の南側から逆位の状態で、29の盤がP 3の東側から逆位の状態で出土している。覆土中層では、9の瓶が中央部から逆位の状態で、10の皿が中央部から壊れた状態で、18の鉢と20の壺は窓の南側から横位の状態で、32の高盤はP 11の西側からとP 1の南側から逆位の状態で出土した破片が接合したものである。覆土下層では、8の壺がP 1の西側から壊れた状態で、12の甕が西壁際から壊れた状態で、13の甕がP 2の南東側から横位の状態で、14の甕が窓の南側から壊れた状態で、19の鉢が中央部から横位の状態で、26の高台付壺が中央部から正位の状態で出土している。床面では、5の甕が窓の南側から正位の状態で、6の壺がP 7の西側から正位の状態で、31の盤が中央部から壊れた状態で出土している。その他にも覆土から7の壺、16の甕、27~29の高台付壺、30の蓋、34の短腹甕、Q49の砥石が出土している。

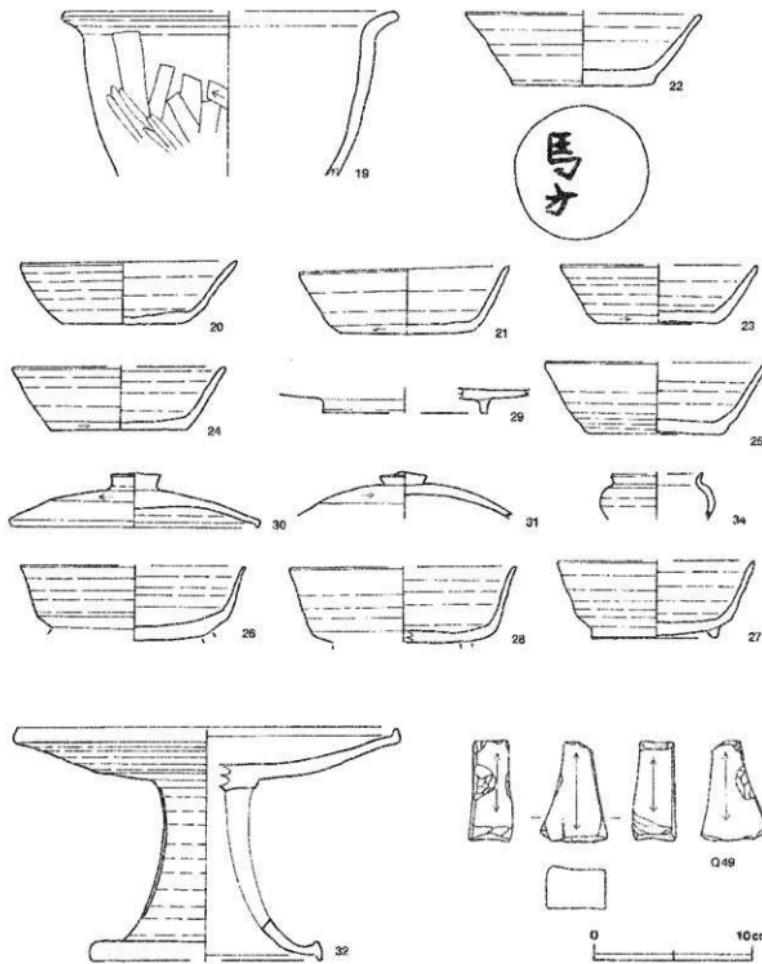
所見 本跡からは、遺物が多量に出土している。出土状況から、住居が廃絶後に投棄されたものと思われる。投棄状況は、覆土上層とそれ以下の2つに分けられ、覆土上層の第1~2層から出土した土器群は、下層の上蓋群と時期差がある。覆土上層の土器群は当遺跡の中心時期である9世紀代であり、数多く出土している「馬方」1と墨書きされた須恵器壺も投棄されている。時期は、床面及び覆土下層から出土している5~6の土器器、12~14の土器器窓から古墳時代（6世紀末~7世紀初）と考えられる。



第20図 第23号住居跡実測図



第21図 第23号住居跡出土遺物実測図（1）



第22図 第23号住居跡出土遺物実測図（2）

第23号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	高さH(cm)	器形の特徴	手付の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
5 土 器	环	A 14.0 B 4.5	丸底。外縁は内側で立ち上がり。 口縁部とその裏に明瞭な棱をもつ。口 縁部は内側する。	口縁部内、外側棱少す。体部外縁ハ テ折り。内面平す。内、外面凹凸見 る。	灰石・黄土・赤色粒子 において青色 青斑	22%	21.15
	环 土 器	A 13.9 B 4.3	丸底。体部は内傾して立ち上がり。 口縁部は内側する。	口縁部内、外側棱少す。体部外縁ハ テ折り端へテ崩れ、内面へク崩れ。 内、外面無色透明。	灰石・石英・赤色粒子 において褐色 青斑	30%	21.15

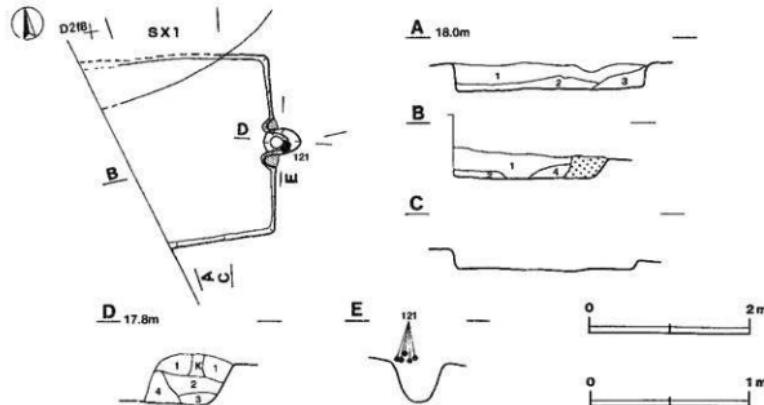
図版番号	器種	説明(例)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	船上・色調・焼成	備 考	
第21図 7	环 土 鈎 器	A [13.0] 底部から口縁部分。平底。体部は内側して立ち上がり。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面へク割り、内面へク崩し。底部へク削り。	長石・石英・赤色粒子 に赤い黄褐色 普通	70% PL15		
		B 4.0					
		C [2.2]					
8	环 土 鈎 器	A [11.0] 底部から口縁部分。平底。体部は内側して立ち上がり。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面へク削り、内面へク崩し。底部へク削り。内面黒色処理。	長石・石英・赤色粒子 に赤い黄褐色 普通	50% PL15		
		B 4.1					
		C [2.2]					
9	环 土 鈎 器	A [10.3] 底部から口縁部分。平底。体部は内側して立ち上がり。口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面へク削り、内面ナギ。	長石・石英 に赤い褐色 普通	60% PL15		
		B 6.8					
		C 6.3					
10	環 土 鈎 器	A [23.2] 高台部から口縁部分。底部と体部の境は後から削断する。体部は外傾して立ち上がり。口縁部に至る。高台はハコ形に開く。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面へク削り。高台両面取り付け後、ナギ。内・外面黒色処理。	長石・石英 に赤い褐色 普通	40% PL15		
		B 4.2					
		D [19.6] E 1.1	して立ち上がり。口縁部に至る。高台はハコ形に開く。				
		F 32.8	門んだ平底。体部は内側して立ち上 がり。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面へ ク削り。内面へクナギ。	長石・石英 に赤い褐色 普通	80% PL15	
		G 6.8					
12	圭 土 鈎 器	A [23.2] 口縁部等。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナギ。	長石・石英 に赤い黄褐色 普通	10% PL15		
		B [7.4]					
13	圭 土 鈎 器	A [17.4] 体部から口縁部分。体部は内側して立ち上 がり。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面へ ク削り。内面へクナギ。	長石・石英 に赤い褐色 普通	30% PL15		
		B [18.9]					
15	圭 土 鈎 器	A [21.0] 口縁部等。口縁部は上方につまみ 上げられている。	口縁部内・外面横ナギ。	長石・石英・雲母 に赤い褐色 普通	10% PL15		
		B [5.9]					
16	圭 土 鈎 器	A [23.2] 体部上端から口縁部分。口縁部は上方につまみ 上げられている。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面へ ク削り。内面へクナギ。	長石・石英・雲母 に赤い褐色 普通	10% PL15		
		B [5.6]					
17	圭 土 鈎 器	A [16.4] 体部下端から口縁部分。口縁部は上方につまみ 上げられている。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面へ ク削り。内面ナギ。	長石・石英・雲母 に赤い褐色 普通	5% PL15	内面剥離者	
		B [6.5]					
18	鉢 土 鈎 器	A [19.6] 底部から口縁部分。平底。体部は内側して立ち上 がり。口縁部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面下 部へク削り。内面へクナギ。底部小 量削。	長石・雲母・赤色粒子 に赤い褐色 普通	60% PL15		
		B 10.6					
		C 7.5					
第22図 19	鉢 土 鈎 器	A [20.8] 体部から口縁部分。体部は外傾して立ち上 がり。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面へ ク削り後へク削。内面ナギ。	長石・雲母 に赤い褐色 普通	20% PL15		
		B [10.4]					
20	环 須 悠 器	A 13.6 B 3.9 C 7.5	平底。体部は外傾して立ち上 がり。口縁部に至る。	口縁部。体部内・外面クロクナギ。 近部二方向へのへク削り。	長石・雲母 に赤い褐色 普通	100% PL15	
21	环 須 悠 器	A 13.2 B 3.7 C 8.7	底部から口縁部分。平底。体部は外 傾して立ち上 がり。口縁部はわずかに 外反する。	口縁部。体部内・外面クロクナギ。 体部下端回転へク削り。底部延軸へ ク削り。	長石 灰褐色 普通	80% PL15	
22	环 須 悠 器	A [15.0] B 4.6 C 8.6	底部から口縁部分。平底。体部下端 は丸みを帯び。外傾して立ち上 がり。口縁部はわずかに 外反する。	口縁部。体部内・外面クロクナギ。 底部へク削り。	長石・石英・雲母 に赤い褐色 普通	70% PL15	底部外側剥離 [馬方]
23	环 須 悠 器	A [12.4] B 3.7 C 7.8	底部から口縁部分。平底。体部は外 傾して立ち上 がり。口縁部はわずかに 外反する。	口縁部。体部内・外面クロクナギ。 体部下端手持ちへク削り。底部二方 向のへク削り。	長石・雲母 灰色 普通	60% PL15	
24	环 須 悠 器	A [13.4] B 4.0 C 8.6	底部から口縁部分。平底。体部は外 傾して立ち上 がり。口縁部はわずかに 外反する。	口縁部。体部内・外面クロクナギ。 体部下端回転へク削り。底部二方 向のへク削り。	長石・雲母 灰褐色 普通	40% PL15	
25	环 須 悠 器	A [14.2] B 4.5 C 8.6	底部から口縁部分。平底。体部下端 は丸みを帯び。外傾して立ち上 がり。口縁部はわずかに 外反する。	口縁部。体部内・外面クロクナギ。 底部延軸へク削り。	長石・石英・雲母 暗灰褐色 普通	60% PL15	
26	高 台 付 环 須 悠 器	A [14.1] B [4.7]	底部から口縁部分。高台底欠損。体 部は外傾して立ち上 がり。口縁部は わずかに外反する。	口縁部。体部内・外面クロクナギ。 底部に高台底欠損。	長石・石英・白色粒子 暗灰褐色 普通	60% PL15	

図版番号	器種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・施成	備 考
第22図 27	高台付环 颈 息 器	A [12.4] 高台部からU縫隙片。底部と体部の B 4.9 縫は後をもじ留めする。体部は外横 C 7.9 て立ち上がり、口縫部に下る。高 D 0.7 台はハの字状に付く。 E	口縫部、体部内・外面ロクロナデ。 縫は後をもじ留めする。体部は外横 て立ち上がり、口縫部に下る。高 台はハの字状に付く。	底部回転ヘラ削り後、高台部に付く。	長石・石英 灰白色 普通	60% PL16
28	高台付环 颈 息 器	A [14.2] 高台部からU縫隙片。高台部欠損。体 B (4.8) 部は外横して立ち上がり。口縫部は E わずかに外反する。	口縫部、体部内・外面ロクロナデ。 縫は後をもじ留めする。体部は外横 て立ち上がり。口縫部は わずかに外反する。	底部回転ヘラ削り後、高台部に付く。	長石・石英 陶灰色 普通	30%
29	盤 颈 息 器	B [1.6] 高台落し。高台は垂下する。 D [10.4] E 0.9	高台落し。高台は垂下する。	底部回転ヘラ削り後、高台部に付く。	雲母・赤色粒子 にぶい黄緑色 普通	10% PL16
30	蓋 颈 息 器	A [15.8] つまみからU縫隙片。天井部は膨形 B 3.4 で、縫隙部のつまみが付く。口縫 C 3.2 頭部は窓く折り返している。 G 1.1	U縫部、外縫内・外面ロクロナデ。 天井部回転ヘラ削り後、つまみ窓合。	長石・石英 青灰色 普通	60% PL16	
31	蓋 颈 息 器	D [3.0] 天井部。縫ぐ跡状のつまみが付く。 F 3.0 G 0.8	外縫内・外面ロクロナデ。天井部回 転ヘラ削り後、つまみ窓合。	長石・石英・雲母 灰灰色 普通	20%	
32	高 盤 颈 息 器	A [24.0] 頭部からU縫隙片。頭部はラッパ状 B 14.8 に開く。脚部上位から中位にかけて D [14.6] 長方形の透かし孔が2方向に空く。 E 11.4 脚部は大きく開き、口縫部上位に 用撚な縫をもつ。頭部はつまみ上げ られている。	体部内・外面ロクロナデ。脚部回転 ヘラ削り後、脚部外面ロクロナデ。 内面手彫。	長石・石英・雲母 灰色 普通	60% PL16	
34	複 頸 袋 颈 息 器	A [5.8] 体部からU縫隙片。体部は外側しな B (2.9) がら立ち上がり、肩部に縫をもつ。 E 縫部はわずかに外反する。	口縫部、体部内・外面ロクロナデ。	長石・石英・雲母 灰黄色 普通	10%	

図版番号	器種	計 測 値	石 質	特 徴	備 考
第25図 34	石	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重量(g) 4.6 4.3 2.8 (84.5)	凝灰岩 泥質 泥岩 有面使用		PL26

第25号住居跡（第23図）

位置 調査B区の北西部、D 2g g IX。



第23図 第25号住居跡実測図

重複関係 第1号不明遺構に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 西壁側が調査区域外にかかる。長軸2.39m、確認できた短軸1.78mで、長方形と推定される。

主軸方向 N-83°-Wと推定される。

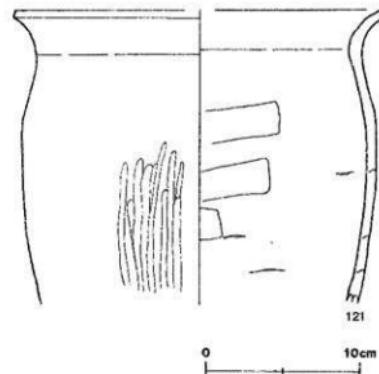
壁 壁高は28-32cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。

竈 東壁中央部に付設されている。焚口部から煙道口部までの長さ56cm、両袖幅67cmで、壁外への掘り込みは42cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床部は、平坦で掘りこぼめられた様子は見られない。煙道は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼上小ブロック微量
- 2 本褐色 烧上粒子、粘土粒子、砂粒少量、ローム粒子、燒上小ブロック微量
- 3 赤褐色 烧上小ブロック、燒上粒子、粘土粒子、砂粒少量
- 4 黑褐色 ローム粒子少量、燒上粒子、粘土粒子、砂粒微量



第24図 第25号住居跡出土遺物実測図

覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子中量、炭化物微量
- 2 本褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック、炭化物微量
- 3 赤褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
- 4 黑褐色 ローム粒子少量、燒上粒子、粘土粒子、砂粒微量

遺物 上器部及びその小破片10点が出土している。第24図121は土器器の壺で、窓内から壊れた状態で出土している。

所見 本跡は、黒色土主体の調査A区から検出された住居である。時期は、出土遺物が少なく時期決定が難しいが、窓内から出土した土器から古墳時代（7世紀代）と考えられる。

第25号住居跡出土遺物観察表

調査番号	器種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	施上・色調・施成	備考
第24図 121	壺 土器	A [24.0] B (19.0)	体高から1/3部分。体部に内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	1)窓内・外向模ナギ。体部外面へク崩き、内面ヘラナギ。	長石・石英・雲母 に多い褐色 普通	20% PL16

第26号住居跡（第25図）

位置 調査A区の南東部、B 2d7区。

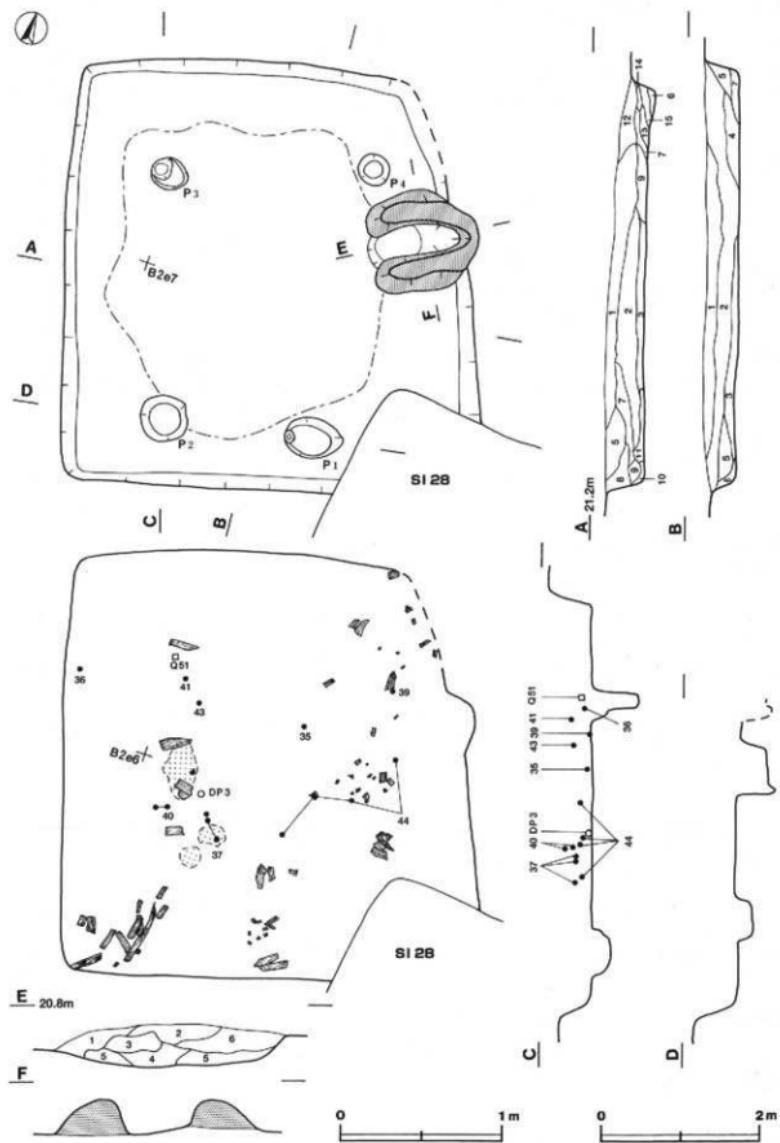
重複関係 第28号住居に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長軸5.39m、短軸5.08mの方形である。

主軸方向 N-66°-E

壁 壁高は38-53cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦である。主柱穴の内側及び竈の焚口部にかけて、特に踏み固められている。



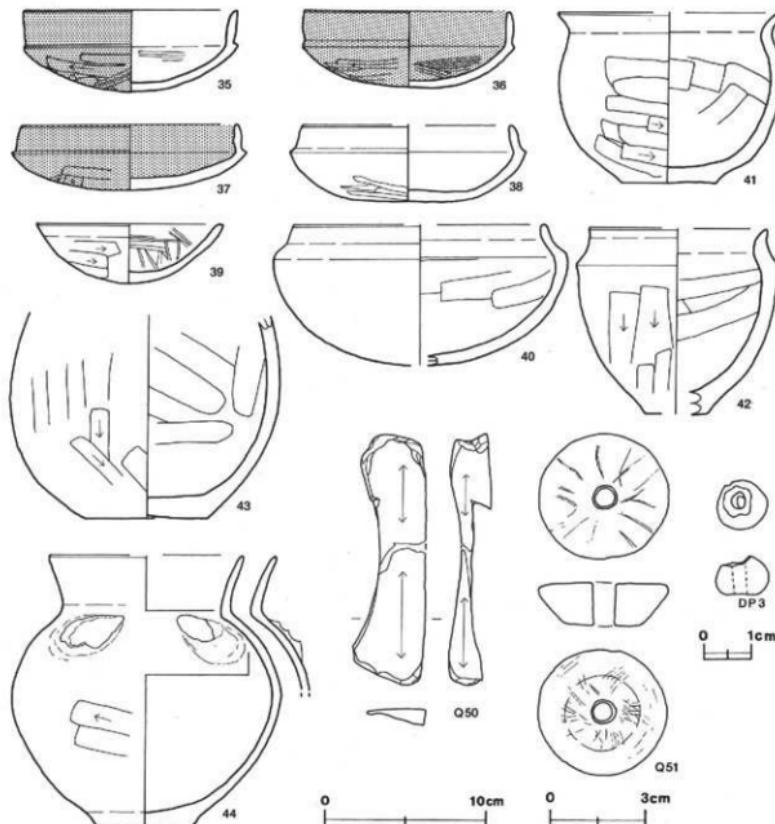
第25図 第26号住居跡実測図

ピット 4か所 (P 1～P 4)。P 1は二段掘り込みになっており、上段は長径61cm、短径52cmの楕円形で、深さ30cmである。下段は径16cmの円形で、深さ15cmである。P 2は径56cmの円形で、深さ25cmである。P 3は二段掘り込みになっており、上段は長径45cm、短径39cmの楕円形で、深さ24cmである。下段は径29cmの円形で、深さ40cmである。P 4は径40cmの円形で、深さ30cmである。いずれもコーナーに位置し主柱穴と思われる。

竈 東壁や北寄りに付設されている。焚口部から煙道口部までの長さ130cm、両袖幅122cmで、壁外への掘り込みは20cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床部は、円形に4cmほど掘り込まれている。煙道は火床部から緩やかに立ち上がる。

遺土層解説

- 1 暗褐色 建土小ブロック・建土粒子・炭化物・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 2 暗褐色 建土小ブロック・建土粒子・炭化物少量、炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 建土大ブロック・建土小ブロック中量、建土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 4 暗赤褐色 建土中ブロック・建土小ブロック少量、建土粒子・炭化物微量
- 5 暗褐色 建土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 建土粒子・炭化物少量、建土小ブロック・炭化粒子微量



第26図 第26号住居跡出土遺物実測図

覆土 15層からなる。全体的にローム・焼上・炭化物・炭化粒子が含まれていることから人為堆積と思われる。また、覆土下層及び床面上から炭化材が検出され、堆積状況から焼失住居の可能性が考えられる。

土解説

1	褐 黄 色	燒上粒子少數、ローム小ブロック、ローム粒子、炭化粒子微量
2	褐 黄 色	ローム小ブロック、焼上粒子、炭化粒子少數、ローム粒子、焼上小ブロック、炭化物微量
3	褐 灰 色	焼土ブロック、焼土粒子、炭化物、炭化粒子少數、ローム粒子微量
4	褐 黑 色	炭化物、炭化粒子少數、ローム小ブロック、ローム粒子、燒土粒子微量
5	黑 黑 色	炭化粒子、ローム小ブロック少數、ローム粒子、炭化物微量
6	褐 黑 色	ローム小ブロック、ローム瓦・中骨、炭化物、炭化粒子微量
7	黑 黑 色	炭化瓦・少數、ローム小ブロック、燒土粒子、長骨微量
8	褐 灰 色	ローム小ブロック中骨、炭化物、ローム粒子少數、燒土粒子、炭化粒子微量
9	黑 黑 色	燒土瓦子、炭化瓦・中骨、燒土小ブロック、炭化粒子少數、ローム粒子微量
10	褐 灰 色	ローム小ブロック、ローム瓦少數、炭化物、炭化粒子微量
11	褐 黑 色	ローム小ブロック、ローム瓦少數、炭化粒子微量
12	褐 黑 色	ローム小ブロック、ローム瓦、炭化瓦・中骨、炭化粒子微量
13	褐 灰 色	燒土小ブロック、燒土瓦子、炭化瓦・中骨、ローム瓦微量
14	褐 黑 色	ローム瓦子、燒土瓦子、炭化瓦・中骨
15	褐 黑 色	燒土瓦子少數、ローム小ブロック、ローム瓦子、炭化瓦・中骨

遺物 上部器及び小破片399点、須恵器片8点、土製小玉1点、砥石1点、石製紡錘車1点が出上している。第26図の35~44は土師器である。覆土上層では、40の鉢が中央部から壊れた状態で出土している。覆土中層では、37の壺、41の甕が中央部から正位の状態で、43の甕が中央部から横位の状態で出土している。覆土下層では、35の壺が甕の西側から斜位の状態で、36の壺が西横位から正位の状態で、44の甕が甕の西側から壊れた状態で、Q51の石製紡錘車がP3の覆土上層から横位の状態で出土している。床面では、39の壺が甕の北側から正位の状態で、D P3の小玉が中央部から出土している。その他にも覆土から38の壺、42の甕、Q50の砥石が出土している。須恵器片は搅乱による混入である。

所見 本跡の時期は、出土上器から古墳時代（6世紀前半）と考えられる。

第26号住居跡出土遺物観察表

固版番号	器種	高周波(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第26号	16 上 錫 器	A 13.6 B 5.0	丸底、体部は内削して立ち上がり、口縁部との間に明瞭な棱をもつ。	口縁部内・外削痕ナデ。底部・体部外削へタ削り後ラナダ。内面へラナダ。外削へタ削り後ラナダ。	良石・石英 に赤い褐色 普通	90% PL16 PH4深底
35	壺 上 錫 器	A 12.7 B 4.8	丸底、体部は内削して立ち上がり、口縁部との間に明瞭な棱をもつ。	口縁部内・外削痕ナデ。底部・体部外削へタ削り後ラナダ。内・外削出色処理。	長石・云母・赤色粒子 に赤い黄褐色 普通	100% PL16
36	壺 上 錫 器	A 13.4 B 4.1	口縁部から口縁部へ、内削して立ち上がり、口縁部との間に明瞭な棱をもつ。	口縁部内・外削痕ナデ。体部外削へタ削り後ラナダ。内面ナナデ。内・外削出色処理。	長石・石英・黄母 に赤い褐色 普通	80% PL16
37	壺 土 師 器	A 13.4 B 4.1	口縁部から口縁部へ、内削して立ち上がり、口縁部との間に明瞭な棱をもつ。口縁部は内削する。	口縁部内・外削痕ナデ。体部外削へタ削り後ラナダ。内面ナナデ。内・外削出色処理。	長石・石英・黄母 に赤い褐色 普通	80% PL16
38	壺 土 師 器	A [13.0] B 4.8	体部から口縁部へ、内削して立ち上がり、口縁部との間に明瞭な棱をもつ。底部部は内削する。	口縁部内・外削痕ナデ。体部外削へタ削り後ラナダ。内面ナナデ。	長石・石英 に赤い褐色 普通	40% PL16
39	壺 土 師 器	A 11.6 B 3.7	口縁部一部欠損。丸底。体部は外削して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外削痕ナデ。体部外削へタ削り後ラナダ。内面へラナダ。	長石・石英 に赤い褐色 普通	90% PL16
40	鉢 上 錫 器	A [15.7] B [8.7]	体部から口縁部へ、内削して立ち上がり、口縁部は内削する。	口縁部内・外削痕ナデ。内面へラナダ。	長石・石英 に赤い褐色 普通	50% PL16 PH4深底
41	碗 土 師 器	A [13.9] B 10.7 C 5.9	体部上から口縁部一部欠損。平底。体部は内削して立ち上がり。口縁部は外反する。	口縁部内・外削痕ナデ。体部外削へタ削り後ラナダ。内面へラナダ。	長石・石英 に赤い褐色 普通	60% PL16
42	瓶 土 師 器	A [11.2] B 11.6 C [3.8]	底部から口縁部へ、平底。体部は内削して立ち上がり。口縁部はわざかに外反する。	口縁部内・外削痕ナデ。体部外削へタ削り後ラナダ。	長石・石英 に赤い褐色 普通	20%
43	甕 上 錫 器	A [12.7] C 7.6	底盤から隼形部片。平底。体部は内削して立ち上がる。	底部外削へタ削り後ラナダ。内面へラナダ。	長石・石英 に赤い褐色 普通	40% PL16

図版番号	器種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴		手 法 の 特 徴		胎土・色調・焼成	備考
第26回 44	要 土 師 器	A [12.0] B [17.2] C 6.2	底部から口縁部。部欠損。体部は内側して立ち上がり。口縁部は外反する。 底部から口縁部。部欠損。体部は内側して立ち上がり。口縁部は外反する。 底部から口縁部。部欠損。体部は内側して立ち上がり。口縁部は外反する。		口縁部内・外面横ナギ。体部外面ハラ削り後ヘラナギ。 口縁部内・外面横ナギ。体部外面ハラ削り後ヘラナギ。 口縁部内・外面横ナギ。体部外面ハラ削り後ヘラナギ。		長石・石英 に赤い褐色 普通	40% PL16 内面薄層
図版番号	器種	計 測 値			材 質	特 徴	備 考	
第26回23	小 瓦	1.1	0.8	0.3	0.8	上 製 通孔部は横 外曲を近く		
図版番号	器種	計 測 値			石 質	特 徴	備 考	
第26回Q50	瓦 石	(13.7)	(4.3)	(2.5)	(130.4)	泥 岩 刻片 3面使用		
図版番号	器種	計 測 値			石 質	特 徴	備 考	
第26回Q51	鍛 鋼 事	4.1	1.3	0.7	130.4	滑 石 逆台形状		

(2) 土 坑

第60号土坑（第27図）

位置 調査A区の南部、B2i7区。

重複関係 第23号住居に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長径1.64m、確認できた短径1.49mで楕円形と推定され、深さ57cmである。

長径方向 N-7°-Eと推定される。

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 4層からなる。ロームブロックを含み、不自然な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

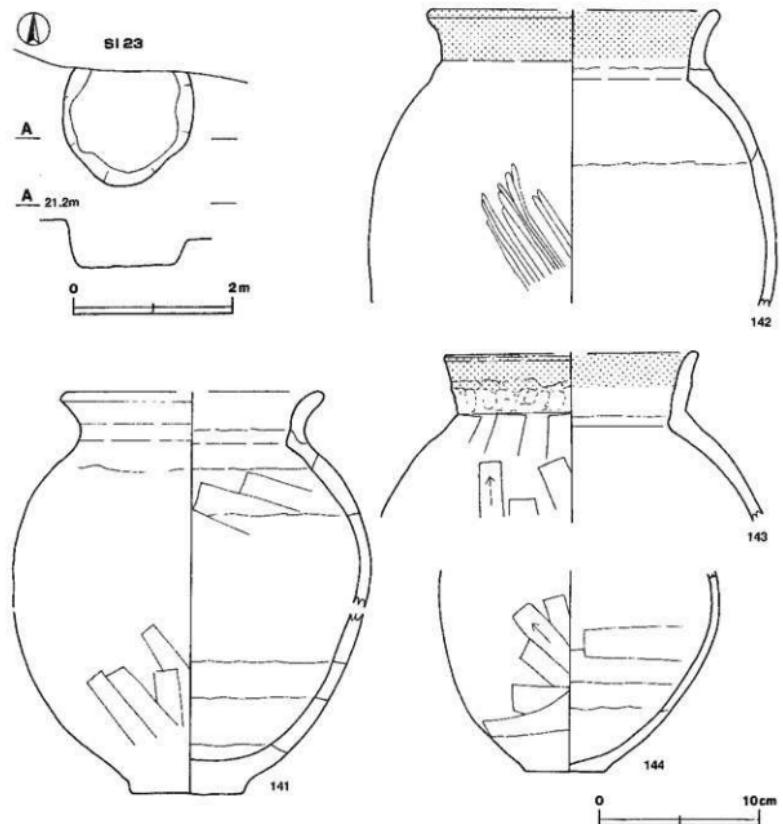
- 1 脳 鰐 内 ローム小ブロック・ローム和子少量。炭化粒子微量
- 2 滅 完 全 ハム粒子少量、ローム小ブロック少量、焼土粒、炭化粒子微量
- 3 滅 完 全 ハム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 4 烧 極 色 ローム小ブロック・ローム長子中量
- 5 烧 極 色 ハム粒子中量、ローム小ブロック少額、炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 6 烧 極 色 ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック微量

遺物 土師器及び小破片87点、繩文土器片1点、蝶4点が出土している。第27図の141~144は、土師器表である。いずれも、覆土5・6層の下層から壊れた状態で出土している。繩文土器片は流れ込みである。

所見 本跡の時期は、出土土器から古墳時代（5世紀後半）と考えられる。

第60号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第27回 141	上 部 器	A [15.8] B [25.0] C 6.9	体部から口縁部。部欠損。体部は内側して立ち上がり。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナギ。底部下位から体部上位外面ハラ削き。体部下位ハラ削り。内面ヘラナギ。	長石・赤色粒子 に赤い褐色 普通	60% PL16
142	下 部 器	A [17.8] B (18.3)	体部上部から口縁部。体部は内側して立ち上がり。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面ナギ後ヘラ削き。内面ナギ。口縁部内・外面彩画。	長石・石英 に赤い褐色 普通	30% PL17
143	要 土 師 器	A [15.8] B (10.5)	体部上位から口縁部。体部は内側して立ち上がり。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面ハラ削り。内面ナギ。口縁部内・外面彩画。	長石・石英 に赤い褐色 普通	10% PL17



第27図 第60号土坑・出土遺物実測図

14版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第27回 144	壺 土器	B (12.5) C 4.9	底部から体部片。平底。体部は内側 して立ち上がる。	体部外側へタ削り、内面へフナデ。	長石 灰青褐色 普通	30% PL16

4 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構としては、堅穴住居跡16軒、ピット群1か所が検出された。以下、検出された遺構の特徴や遺物について記載する。

(1) 穴穴住居跡

第2号住居跡（第28図）

位置 调査A区の南部、B2i3K。

規模と平面形 北壁際が調査区域外にかかる。確認できた東西軸は3.03m、南北軸は4.46mで長方形と推定される。

主軸方向 N-72°-Wと推定される。

壁 壁高は35~49cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁際及び東壁際を巡っている。断面はU字形で、上幅18~30cm、下幅7~13cm、深さ7cmである。北壁の一部は擾乱を受け不明である。

床 平坦である。竪焚口部の南側が、特に踏み固められている。

ピット 3か所（P1~P3）。P1・P2は径26~29cmの円形、深さ20~28cmで、いずれも南壁際から検出され、主柱穴と思われる。P3は長径102cm、短径78cmの楕円形、深さ18cmである。堆積土に灰が混じっていることから、灰を溜めたピットの可能性がある。

P3 土質解説

- | | |
|---------|---|
| 1 焼小粒土色 | 燒土粒子、灰中等。ローム粒子少量。燒土小ブロック、炭化物、炭化粒子微量 |
| 2 焼赤褐色 | 燒土粒子中量。ローム粒子少量。燒土小ブロック、ローム粒子、灰少量、炭化物、炭化粒子微量 |

竪 竖南東コーナー部に付設されたコーナー竪である。天井部は崩落し、両袖部が残存している。十層断面中、第3層が天井部の崩落土層と思われる。焚口部から煙道口部までの長さ146cm、両袖幅132cmで、壁外への掘り込みは41cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。十層断面図中、第7~14層は袖部の土層である。火床部は円形に7cmほど掘り込まれ、火熱を受け赤変硬化している。煙道は火床部から緩やかに立ち上がる。

竪土質解説

- | | |
|---------|---|
| 1 焼赤褐色 | 燒土粒子中量。焼土小ブロック、砂粒、粘土粒子少量。ローム粒子、炭化粒子微量 |
| 2 焼赤褐色 | ローム粒子少量。燒土小ブロック、燒土粒子、炭化粒子微量 |
| 3 焼赤褐色 | 燒土小ブロック、燒土粒子中量。燒土粒子少量。ローム粒子、炭化物微量 |
| 4 焼赤褐色 | 燒土粒子中量。燒土小ブロック少量。ローム粒子、炭化粒子少量。燒土粒子微量 |
| 5 焼赤褐色 | 燒土小ブロック中量。燒土小ブロック少量。燒土粒子、炭化粒子少量。炭化物、粘土粒子微量 |
| 6 明小粒土色 | 燒土小ブロック、燒土粒子中量。ローム粒子、炭化物微量 |
| 7 焼赤褐色 | 燒土小ブロック、燒土粒子少量。燒土小ブロック、燒土粒子、炭化粒子微量 |
| 8 黑 色 | 燒土小ブロック、燒土小ブロック、燒土粒子少量。燒土小ブロック、燒土粒子、炭化粒子微量 |
| 9 黑 色 | ローム小ブロック、ローム粒子、燒土粒子、燒土粒子少量 |
| 10 黑 色 | 燒土粒子少量。ローム粒子、炭化粒子微量 |
| 11 黑 色 | ローム小ブロック、ローム粒子、燒土粒子少量。燒土小ブロック、燒土粒子少量。燒土粒子微量 |
| 12 焼赤褐色 | 燒土小ブロック少量。燒土粒子、炭化粒子少量。燒土粒子微量 |
| 13 焼赤褐色 | 燒土小ブロック少量。燒土粒子、炭化粒子少量。燒土粒子微量 |
| 14 焼赤褐色 | ローム小ブロック、ローム粒子、燒土粒子、燒土粒子微量 |

覆土 7層からなる。ロームブロックを含み、不自然な堆積状況から人為堆積と思われる。

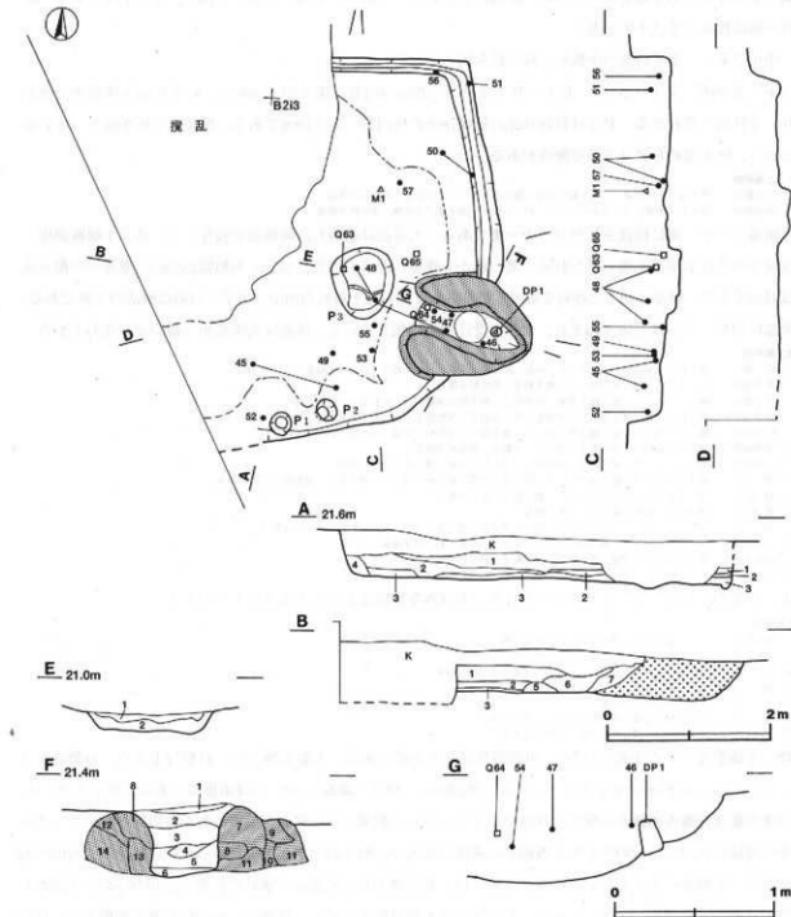
土層解説

- | | |
|---------|---------------------------|
| 1 焼 赤 色 | ローム粒子中量。燒土粒子、炭化粒子少量 |
| 2 黒 色 | ローム粒子中量。ローム小ブロック少量 |
| 3 黑 色 | ローム小ブロック中量。ローム粒子少量。燒土粒子微量 |
| 4 焼 色 | ローム粒子中量。ローム中、小ブロック少量 |
| 5 焼 色 | ローム中ブロック中量 |
| 6 焼 色 | ローム粒子少量。燒土粒子少量。炭化粒子微量 |
| 7 黒 色 | ローム粒子下。燒土粒子中量。炭化粒子少量 |

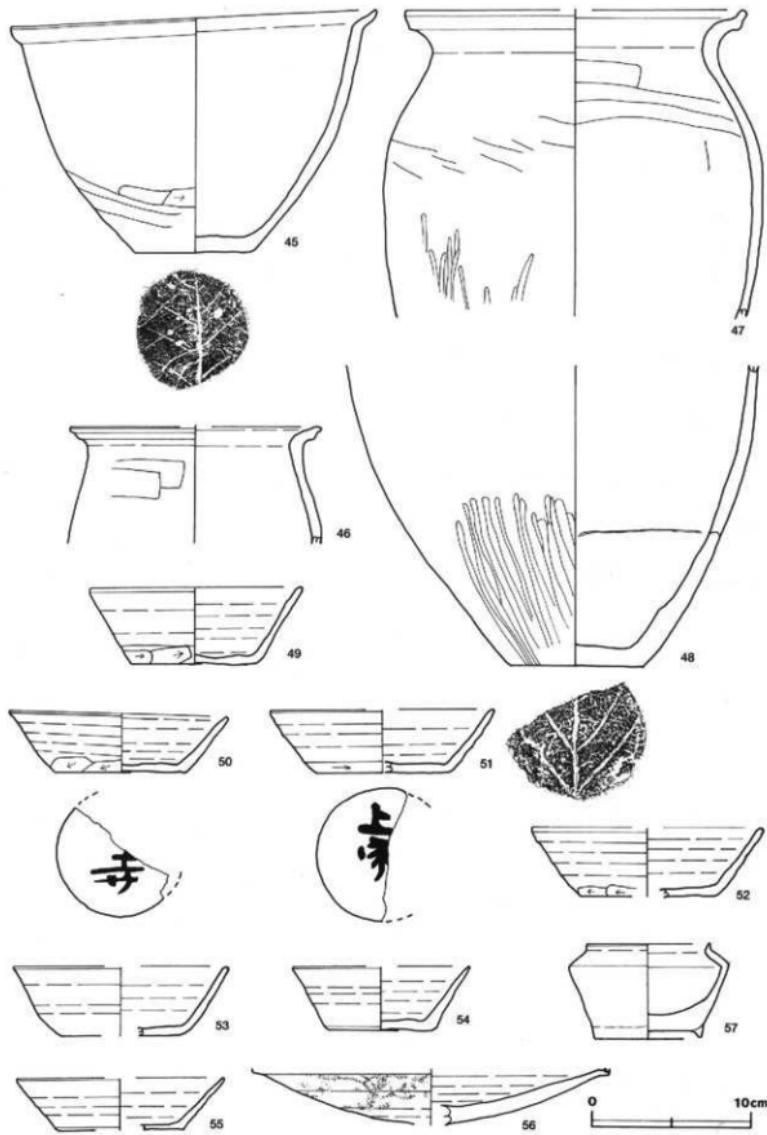
遺物 上器類及びその小破片412点、須恵器及びその小破片56点、土製支脚1点、石製勾玉2点、石製管玉1点、刀子1点、鉄滓185.4gが出土している。第29図45~48は土器器で、49~57は須恵器である。覆土中層では、48の壺が竪及び竪の西側から壊れた状態で出土している。底部に「上家」と墨書きされた51の壺が北東コーナー部から逆位の状態で、52の壺がP1西側から逆位の状態で、M1の刀子が中央部から正位の状態で、Q63の勾玉がP3の上層から出土している。覆土下層では、45の壺がP2北側から壊れた状態で、49の壺が中央部から正位の状態で、底部に「X寺」と墨書きされた50の壺が東壁際から壊れた状態で、53の壺が竪の西側から正位の状態で、56の高盤が北東コーナーから正位の状態で、57の短頭壺が中央部から正位のつぶれた状態で、Q65の

管玉が竈左袖部の西側から出土している。床面では、55の坏が竈焚き口部の南側から正位の状態で出土している。竈内では、46・47の壺が下層から、54の壺が逆位の状態で、DP1の支脚がやや斜めの状態で、Q64の勾玉が竈内焚口部の中層から出土している。その他にも覆土から鉄滓が出土している。

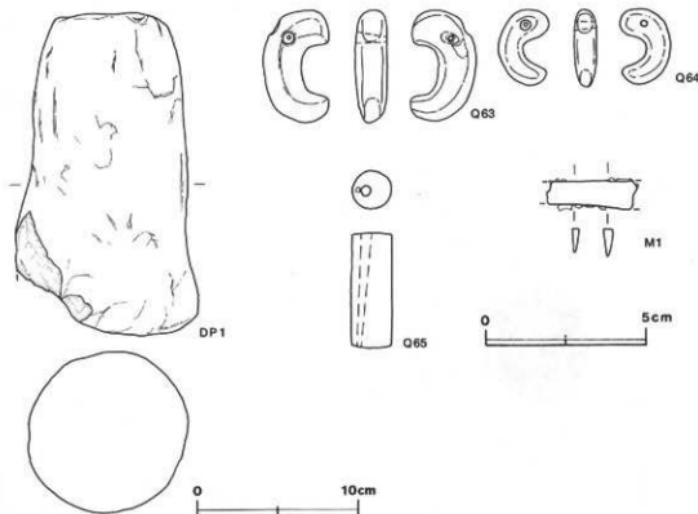
所見 中央部から刀子、竈内及び竈の西側から勾玉2点と管玉1点、異なる文字の書かれた墨書き器2点など特異な遺物が出土している。また、竈内から供膳具である壺が、二次焼成を受けずに出土していることから、住居を廃絶するにあたって、壺を竈の中に埋納するという祭祀行為等が行われた可能性が考えられる。時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第28図 第2号住居跡実測図



第29図 第2号住居跡出土遺物実測図（1）



第30図 第2号住居跡出土遺物実測図（2）

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
45	土器	A [23.0]	底部から口縁部片。平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位へラ削り。内面へラナデ。底部水素窯。	長石・雲母・赤色粒子・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	80% PL17
		B [15.3]				
		C [7.3]	口縁部は上方につまみ上げられている。			
46	土器	A [15.8]	体部上部から口縁部片。口縁部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面へラナデ。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	30% PL17
		B [7.3]				
47	土器	A [21.4]	底部から口縁部片。体部は内側して立ち上がる。口縁部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位へラ削き。内面へラナデ。	長石・石英・雲母・赤色粒子、にぶい褐色 普通	20% PL17
		B [19.3]				
48	土器	A [18.9]	底部から体部片。平底。体部は外側して立ち上がる。	体部外面下位へラ削り。内面へラナデ。底部水素窯。	長石・石英・雲母・赤色粒子、にぶい褐色 普通	30% PL17
		B [8.3]				
		C [7.8]				
49	壊頸患器	A [13.2]	口縁部一部欠損。平底。体部は外側して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへラ削り。	長石・石英 灰褐色 普通	90% PL17
		B [4.9]				
		C [7.8]				
50	壊頸患器	A [13.7]	底部から口縁部片。平底。体部は外側して立ち上がり。口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへラ削り。底部二方向のへラ削り。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	90% PL17
		B [4.0]				
		C [8.0]				
51	壊頸患器	A [14.0]	底部から口縁部片。平底。体部は外側して立ち上がり。口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転へラ削り。底部一方向のへラ削り。	長石・石英・雲母 黄灰色 普通	40% PL17 底部外面墨書き〔×〕
		B [4.0]				
		C [8.4]				
52	壊頸患器	A [14.5]	底部から口縁部片。平底。体部は外側して立ち上がり。口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへラ削り。底部一方向のへラ削り。	長石・石英・雲母 灰白色 普通	30%
		B [4.3]				
		C [8.6]				
53	壊頸患器	A [13.4]	底部から口縁部片。平底。体部は外側して立ち上がり。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部一方向のへラ削り。	長石・雲母 灰褐色 普通	30%
		B [4.4]				
		C [7.6]				

回版番号	器種	計測値(cm)	器 形 の 特 故	手 法 の 特 徴	鉛筆・色鉛・成形	備 考
第29回 54	環 頸 患 痘	A (11.2)	底部から口唇部。平底。体部は外傾して立ち上がり。口唇部はわずかに外反する。	口唇部、体部内・外面ロクロナナ。底部凹凸へ削り。	長石、雲母	30%
		B 4.0			黄緑色	
		C 6.2			普通	
55	環 頸 患 痘	A (13.0)	底部から口唇部。平底。体部は外傾して立ち上がり。口唇部にせん。	口唇部、体部内・外面ロクロナナ。体部下端斜面へ削り。底部上方角	長石・石英・赤色粒子	30%
		B 3.3			灰黃褐色	
		C 7.8			普通	
56	高 整 頸 患 痘	A (22.6)	神部欠損。兼て体部は大きく開き、口唇部に至る。口唇部欠損。	体部内・外面ロクロナナ。外面自然端。	長石	30%
		B (3.5)			褐色	
		C 7.8			普通	
57	短 頭 旗 頸 患 痘	A 7.7	前部から口唇部一部欠損。底部は平底で、両台は低くハの字形に開き、体部は外傾して立ち上がり。前頭に梗をもつ。口唇部はわずかに外反する。	底部側面へ削り後、臺台張り付け。	長石・石英・雲母	30% PL27
		B 6.0			黃灰色	
		C 6.7			普通	
		D 6.0				内・外面削減
		E 0.9				

回版番号	器種	計 測 値			材質	特 殊		備 考
第30回P1	支 腿	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm)			重量(g)	上 製		基部部の片側が欠損。成形は良好。 PL28

回版番号	器種	計 測 値				石 質	特 殊	備 考
第30回Q3	勾 矢	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 孔径(cm)				瑪瑙	二字状、一方から穿孔。	PL26
Q4	勾 矢	2.4 1.6 0.7 0.1~0.3				瑪瑙	二字状、一方から穿孔。	PL26

回版番号	器種	計 測 値				石 質	特 殊	備 考
第30回Q3	筈 矢	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重量(g)				瑪瑙	竹筒状、一方から斜めに空孔。	PL26

回版番号	器種	計 測 値				材 質	特 殊	備 考
第30回M	刀 子	刃長(cm) 刃幅(cm) 厚さ(cm) 重量(g)				鍛	身曲端及び茎欠損。身は直線的。	PL26

第3号住居跡（第31回）

位置 調査A区の南部、B2F3区。

規模と平面形 南西コーナー部が搅乱を受けている。長軸4.62m、短軸3.40mの長方形である。

主軸方向 N-18°-W

壁 高さは27~35cmで、外傾して立ち上がる。

壁 溝 壁東側及び南東コーナー部を除き巡っている。断面はU字形で、上幅25~35cm、下幅6~16cm、深さ10~14cmである。

床 半坦である。竈焚口部の南側から中央部にかけて、特に踏み固められている。

ピット 4か所（P1~P4）。P1~P3は長径46~60cm、短径40~42cmの楕円形、深さ19~28cmで、配列から主柱穴と思われる。P4は径34cmの円形、深さ17cmで、P2の南側に位置し補助柱穴と思われる。

P1土壤解説

- 1 矽 粒 色 ローム粒子・鐵土粒子・粘土粒子少々、炭化粒子微量
- 2 硅 粒 色 ローム粒子・粘土粒子中量、燒土粒子微量
- 3 粘 粒 色 ローム粘土少々、粘土粒子・炭化粒子微量
- 4 粘 粒 色 ローム粘土中量

竪 北壁中央に付設され、天井部は崩落し、両袖部が残存している。土層断面中、第2層が天井部の崩落土層と思われる。焚口部から煙道口部までの長さ108cm、両袖幅152cmで、壁外への掘り込みは52cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。土層断面図中、第6～9層は袖部の土層である。火床部はほぼ円形に8cmほど掘り込まれ、火熱を受け赤変硬化している。煙道は火床部から緩やかに立ち上がる。

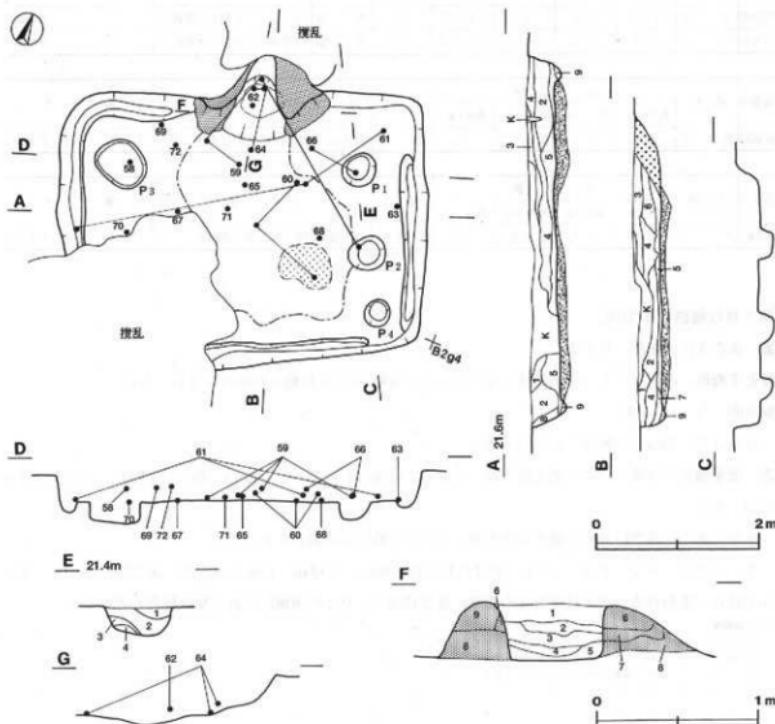
土壤解説

1 黒 色	燒土粒子中量、炭化粒子・砂粒微量	6 黄褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・燒土小ブロック・燒土粒子・砂粒少量
2 暗赤褐色	燒土粒子中量、粘土粒子・砂粒少量	7 暗褐色	燒土粒子中量、砂粒微量、燒土小ブロック・燒土粒子・炭化粒子微量
3 赤褐色	燒土粒子多量、燒土小ブロック微量、砂粒微量	8 褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子微量
4 赤褐色	焼土小ブロック・燒土粒子・炭化粒子微量	9 黄褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量
5 黑褐色	燒土小ブロック中量、燒土粒子少量		

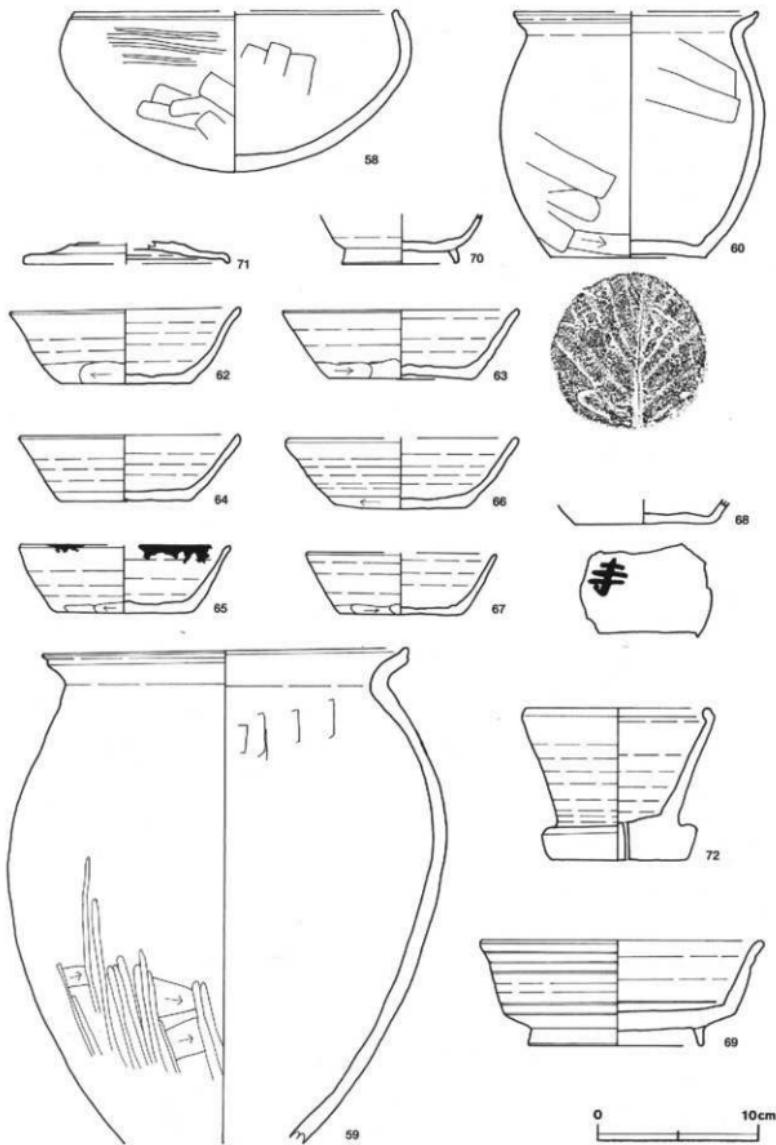
覆土 9層からなる。ローム・焼土・炭化物が含まれていること、不自然な堆積状況から人為堆積と思われる。

土壤解説

1 黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・燒土粒子中量、炭化粒子少量	5 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、燒土小ブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量	6 褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、燒土粒子少量、炭化粒子微量	7 暗褐色	ローム小ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
4 黑褐色	燒土粒子中量、炭化物・炭化粒子少量	8 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量
		9 褐色	ローム粒子多量



第31図 第3号住居跡実測図



第32図 第3号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器及びその小破片324点、須恵器及びその小破片66点、鉄滓38.7g、礫13点が出土している。第32回図58~60は土師器で、62~72は須恵器である。覆土上層では、58の鉄滓が北西コーナー部から斜位の状態で、69の高台付坏が北壁際から斜位の状態で、72のこね鉢が窓の南側から斜位の状態で出土している。覆土下層では、59の壺が窓の南側と窓内及びP2内から出土した破片が接合したものである。63の壺が東壁際から逆位の状態で、65の壺が中央部から逆位の状態で、66の壺が窓右袖部の南側から正位の状態で、中央部から70の高台付坏が正位の状態で、71の蓋が逆位の状態で出土している。床面では、60の小形甕が中央部から壊れた状態で、67の壺が中央部から正位の状態で、底部に「×寺」と墨書きされた68の壺が中央部から出土している。窓内では、62の壺が覆土下層から斜位の状態で、64の壺が覆土下層及び南側から壊れた状態で出土している。

所見 本跡からは、土師器の鉄滓と底部に「×寺」と書かれた墨書き器が出土しており、付近に仏堂的な建物があった可能性が考えられる。時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表

回版番号	器種	当量(gm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第32回 58 上 騒 器	A [20.0] B 16.0	体部から窓袖部。丸窓。体部は大きめで内側して立ち上がり。口縁部は内張りしている。	口縁部内・外面凹ナデ。外側に「×」の波溝が並ぶ。体部外側上部へラジカミ。ド笠ナデ。内凹ナデ。	長石・青母・赤色粒子 にぶい黄褐色	30% PL17	
59 上 騒 器	A 22.4 B (31.2)	体部下部から窓袖部。体部は内側して立ち上がる。口縁部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面波ナデ。体部外側上部へラジカミ。波溝や削り、ハラ削き。内面へラナデ。	長石・石英・云母・赤色粒子 にぶい褐色	30% PL17	二輪部焼造付着 普通
60 小 形 甕 土 騒 器	A [15.3] B 15.3 C 9.7	窓部から窓袖部。平底。体部は内側して立ち上がる。口縁部は外方につまみ上げられている。	口縁部・体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへラジカミ。底部へラナデ。	長石・石英・云母・赤色粒子 根毛 普通	40% PL17	
62 壺 黒 磁	A 14.2 B 4.7 C 8.0	平底。体部は外側して立ち上がり。口縁部はわざかに外反する。	口縁部・体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへラジカミ。底部へラナデ。	長石・石英・云母 灰黄色 普通	100% PL17	
63 坏 須 恵 器	A 14.6 B 4.3 C 9.0	平底。体部は外側して立ち上がり。口縁部に凹る。	口縁部。体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへラジカミ。底部へラナデ。	長石・石英・云母 灰黄色 普通	100% PL17	
64 坏 須 恵 器	A 13.5 B 4.1 C 8.1	底部から窓袖部。平底。体部は外側して立ち上がり。口縁部に凹る。	口縁部・体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへラジカミ。底部へラナデ。	長石・石英・云母 灰黄色 普通	70% PL17	
65 坏 須 恵 器	A [13.2] B 4.2 C 8.4	底部から窓袖部。平底。体部は外側して立ち上がり。口縁部はわざかに外反する。	口縁部・体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへラジカミ。底部へラナデ。	長石・石英・云母 灰黄色 普通	20% PL17	二輪部焼造付着
66 坏 須 恵 器	A [11.3] B 4.1 C 8.1	底部から窓袖部。平底。体部は外側して立ち上がり。口縁部はわざかに外反する。	口縁部・体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへラジカミ。底部へラナデ。	長石・石英・云母 色粒子、灰黄色 普通	50% PL18	
67 坏 須 恵 器	A [12.0] B 3.8 C [7.6]	底部から窓袖部。平底。体部は外側して立ち上がり。口縁部に至る。	口縁部・体部内・外面ロクロナデ。底部へラジカミ。底部へラナデ。	長石・石英・云母 灰黄色 普通	30% PL18	
68 坏 須 恵 器	B [1.5] C [8.6]	底部から窓袖部。平底。体部下端は外側して立ち上がる。	口縁部・体部内・外面ロクロナデ。底部へラジカミ。底部へラナデ。	長石・石英・云母 灰オーリーブ 普通	20% PL18	底部外周露呈「×寺」
69 高台付坏 須 恵 器	A 17.6 B 6.6 D 11.2 E 1.1	体部から窓袖部へ一部欠損。底部と体部の接合部をもじる。体部は外側して立ち上がり。口縁部に凹る。口縁部はハの字状に崩く。	口縁部。体部内・外面ロクロナデ。底部へラジカミ。底部へラナデ。	長石・石英・云母 灰色 普通	90% PL18	
70 高台付坏 須 恵 器	B (3.1) D 7.2 E 1.0	高台部から体部下端。高台はハの字状に凹む。	体部内・外面ロクロナデ。底部へラジカミ。底部へラナデ。	長石・石英 灰色 普通	30% PL18	
71 盖 須 恵 器	A [12.9] B [1.4]	つまみ盛り付。大丸蓋はほぼ平底。口縁部が強く舌り返している。	口縁部・内面・外面ロクロナデ。天井部削り軽く。	長石・石英 灰色 普通	0%	

回収番号	器 様	計測値(cm)	容 積 の 特 徴	手 法 の 特 徴	船主・色調・底成	備 考
第33回 72	A	11.2	体部から口端部一部欠損。形状異常	口縁部内・外壁様ナダ。体部内・外	良石・石英・空隙	89% PL18
	B	9.5	盤状の駆出平底。体部は直線的外	面クロナダ。底部二方向のヘラ削	灰白色	
	C	8.6	側面に縫合部あり。口縁部は内側す	り。底面に縫合部の穿孔有。	骨頭	

第5号住居跡（第33回）

位置 洞査A区の南西部、B 2d1区。

規模と平面形 長軸3.76m、短軸3.17mの長方形である。

主軸方向 N - 52° - W

壁 壁高は16~40cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 壁右袖部から北壁際を除き巡っている。断面はU字形で、上幅14~20cm、下幅5~10cm、深さ6~10cmである。

床 平坦である。中央部が、特に踏み固められている。

ピット 7か所（P 1 ~ P 7）。P 1 ~ P 2 は長径36~44cm、短径30cmの楕円形で、深さ11~17cmである。P 3 ~ P 4 は径31cmの円形、深さ10~28cmで、配列から主柱穴と思われる。P 5 は一段掘り込みになっており、上段は長径32cm、短径27cmの楕円形で、深さ10cmである。下段は長径20cm、短径14cmの楕円形で、深さ20cmである。P 6 は径17cmの円形で、深さ20cmである。P 5 はP 1 とP 4 の間に位置し、P 6 はP 1 の北側に位置し補助柱穴と思われる。P 7 は長径98cm、短径75cmの不整形で、深さ10cmである。堆積土に焼土及び灰が混じっていることから、灰を溜めたピットの可能性がある。

P 3 土層解説

- 1 寸 比 例 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 色 色 ローム粒子中量、ローム小ソロマツ少量

P 7 土層解説

- 1 土層解説 焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子、炭化粒子少量、灰微量
- 2 土層解説 烧土小ブロック・焼土粒子、炭化粒子中量、灰微量
- 3 土層解説 烧土粒子中量、燒土小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量

電 北西コーナー部に付設されたコーナー竈である。天井部は崩落し、肉袖部が残存している。土層断面中、第2層が天井部の崩落土層と思われる。焼口部から煙道口部までの長さ72cm、両袖幅84cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。土層断面図中、第5~8層は袖部の上層で、9~10層は掘り方内の上層である。火床部は、楕円形に10cmほど掘り込まれ、火熱を受け変形化している。煙道は火床部から緩やかに立ち上がる。

電土層解説

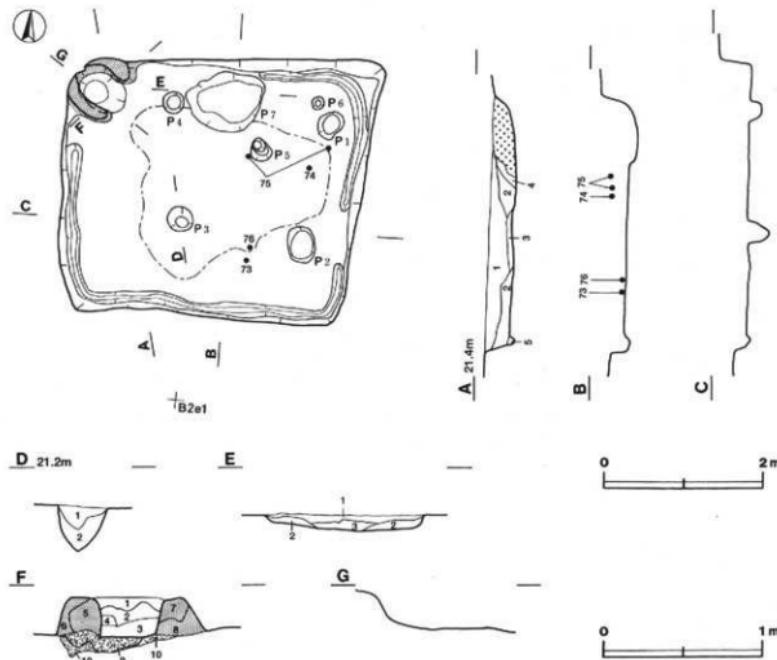
- 1 土層解説 ローム粒子、焼土小ブロック・焼土粒子、焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 土層解説 烧土小ブロック・焼土粒子中量、焼土中ブロック、炭化粒子少量、焼土粒子少量、砂利微量
- 3 土層解説 烧土小ブロック中量、焼土粒子、炭化粒子少量、焼土粒子中量
- 4 土層解説 烧土小ブロック中量、ローム粒子、炭化粒子少量、焼土粒子中量
- 5 土層解説 烧土粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 6 土層解説 烧土粒子中量、焼土粒子、炭化粒子少量、ローム小ブロック微量
- 7 土層解説 烧土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量、砂利微量
- 8 土層解説 烧土粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子、炭化粒子、砂利微量
- 9 土層解説 ローム小ブロック・ローム粒子、焼土小ブロック、焼土粒子、炭化粒子、焼土粒子少量
- 10 土層解説 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量

電土 5層からなる。ローム・焼土・炭化物が含まれていることから、人為堆積と思われる。

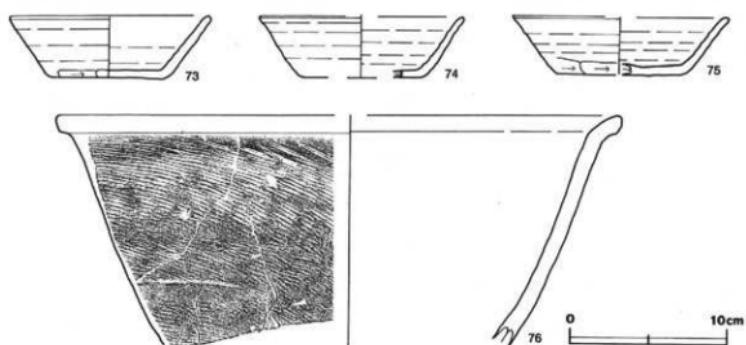
電土層解説

- 1 土層解説 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 土層解説 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化物炭化粒子微量
- 3 土層解説 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量
- 4 土層解説 烧土粒子中量、焼土粒子少量、ローム小ブロック、炭化物、炭化粒子微量
- 5 土層解説 ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 土師器及びその小破片159点、須恵器及びその小破片19点、羽口小片1点、鉄滓165gが出土している。第34図73~76は須恵器である。覆土中層では、74の壺が東壁際から横位の状態で、75の壺はP1の南側とP5の西側から出土した破片が接合したものである。床面では、73の壺が南側から正位の壊れた状態で、76の鉢が南側から横位の状態で出土している。その他にも覆土上から、羽口片、鉄滓が出土している。



第33図 第5号住居跡実測図



第34図 第5号住居跡出土遺物実測図

所見 覆上から鉄滓が出土している。第2・3・7・8・12・16号住居跡からも鉄滓が出土しており、これらがいずれも本跡をとりまく位置にあることから、付近に鍛冶工房が存在した可能性が考えられる。時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。

第5号住居跡出土遺物観察表

四版番号	器種	直測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
73	环 埴 惠 器	A 12.6 B 4.0 C 7.3	底部から口縁部分。体部は外側して立ち上がり。口縁部に墨。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。 体部下端手持ちヘラ削り。底部二方向のヘラ削り。	長石・雲母 黄灰色 普通	80% PL18
		A [13.0] H 3.9 C [7.8]	底部から口縁部分。体部は外側して立ち上がり。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。 底部一方向のヘラ削り。	長石・石英 灰褐色 普通	20%
		A [13.8] H 3.8 C [8.2]	底部から口縁部分。体部は外側して立ち上がり。口縁部に墨。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。 体部下端手持ちヘラ削り。底部二方向のヘラ削り。	長石・石英 灰褐色 普通	30%
76	环 埴 惠 器	A [35.5] B [14.7]	底部から口縁部分。体部は外側して立ち上がり。口縁部は外反する。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外表面の突起部、内面ナデ。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	10% PL18

第6号住居跡(第35図)

位置 調査A区の西部、B1b9区。

規模と平面形 上部が削平されているため、壁の立ち上がりをとらえることができなかった。床面の範囲は長軸3.58m、短軸2.80mで長方形と推定される。

主軸方向 N-63°-Eと推定される。

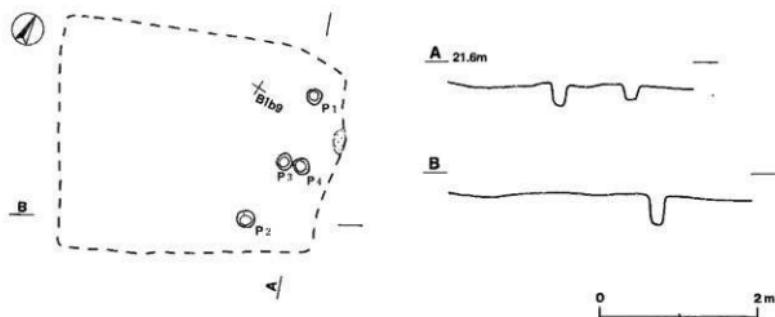
床 平坦である。特に踏み固められた部分は認められない。

ピット 4か所(P1~P4)。P1・P2は径20~23cmの円形、深さ16~34cmで、竈を挟む両側に位置し主柱穴と思われる。P3・P4は径20~21cmの円形、深さ12~25cmで、いずれも竈の南側に位置しており性格は不明である。

竈 推定される東壁の中央部から、少量の焼上及び粘土が検出され、竈の痕跡と思われる。

遺物 土師器片4点、須恵器片1点が出土している。図示できるものはない。

所見 本跡は、竈の痕跡とピットから住居跡と判断した。時期は、東竈であることと出土土器から平安時代と推定される。



第35図 第6号住居跡実測図

第7号住居跡（第36図）

位置 調査A区の西部、B2c1区。

規模と平面形 第2竈煙道部及び中央部の覆土上層から下層にかけてが搅乱を受け壊されている。長軸3.68m、短軸3.62mの方形である。

主軸方向 N-70°-E

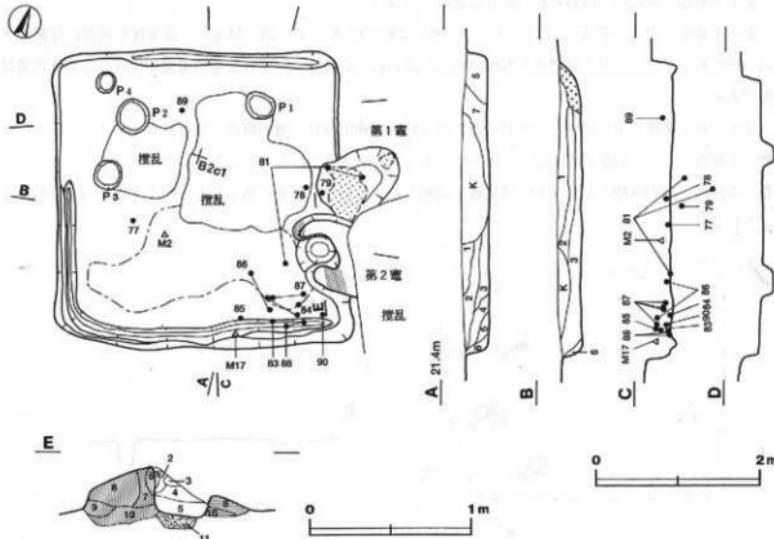
壁 壁高は24~30cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 竈北側及び西コーナー部を除き巡っている。断面はU字形で、上幅15~26cm、下幅5~10cm、深さ6cmである。

床 平坦である。特に踏み固められた部分は認められない。

ピット 4か所（P1~P4）。P1は長径40cm、短径30cmの円形で、深さ17cmである。P2は径42cmの円形、深さ16cmで、いずれも規模や配列から主柱穴と思われる。P3は径35cmの円形、深さ11cmで、竈反対側の西壁際に位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P4は径24cmの円形、深さ10cmで、P2に付随する補助柱穴と思われる。

竈 東壁から2か所の竈が確認されている。第1竈は、東壁外へ40cmほど掘り込んでおり、焼土及び粘土が検出され、火床部と思われる掘り込みは4cmである。第2竈は、第1竈を壊し付設されている。煙道口部と燃焼部と右袖部の上層は搅乱を受け壊されている。焚口部から煙道口部までの確認できた長さは65cm、両袖幅は104cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。土層断面図中、第6~10層は袖部の上層で、11層は掘り方内の土層である。火床部は、円形に6cmほど掘り込まれ、火熱を受け赤変硬化している。煙道は火床部から緩やかに立ち上がる。



第36図 第7号住居跡実測図

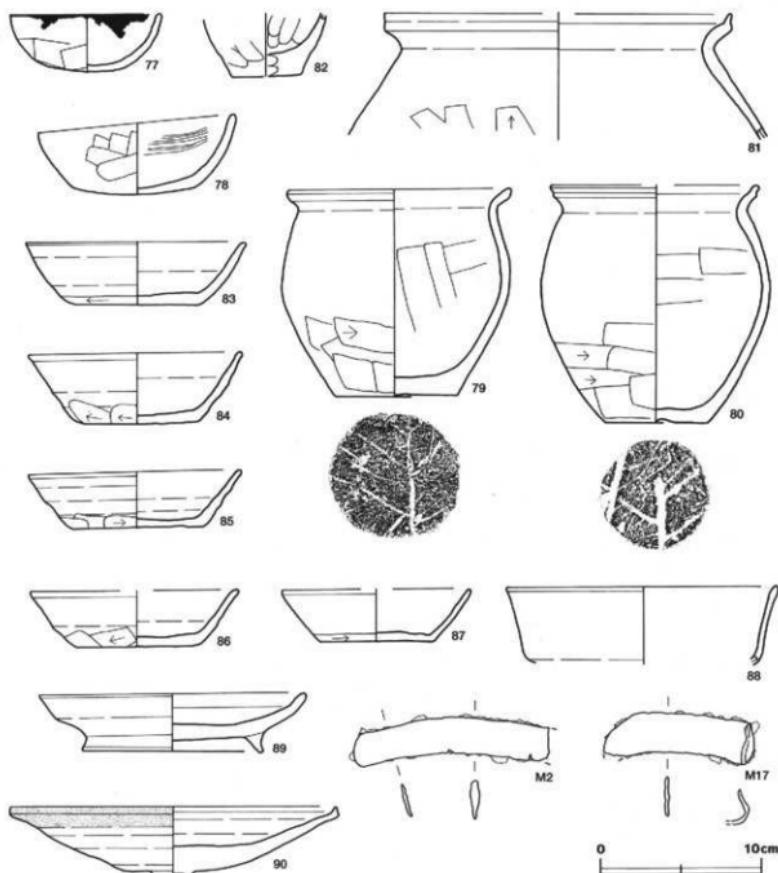
遺土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------------|--------|-----------------------------------|
| 1 仁木褐色 | 燒土粒子中量、ローム粒子少量、燒土小ブロック微量 | 6 灰褐色 | 粘土粒子少量、燒土粒子少量、炭化物微量 |
| 2 淡褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・燒土粒子少量、燒土粒子微量 | 7 岩白色 | 燒土粒子多量、ローム粒子・燒土粒子・炭化物微量 |
| 3 赤褐色 | 燒土粒子多量、燒土小ブロック中量、炭化粒子微量 | 8 草褐色 | 燒土粒子多量、燒土小ブロック・炭化物微量 |
| 4 暗赤褐色 | 燒土粒子多量、燒土中・小ブロック中量、炭化粒子微量 | 9 墓褐色 | 燒土粒子・炭化粒子・燒土粒子少量 |
| 5 赤褐色 | 燒土小ブロック・燒土粒子多量、炭化粒子中量 | 10 暗褐色 | ローム粒子・燒土粒子・炭化物・灰化物・燒土粒子少量 |
| | | 11 墓褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子少量、燒土小ブロック・燒土粒子微量 |

覆土 7層からなる。4層から7層はローム・焼土・炭化物が含まれていることから人為堆積と思われる。1~3層は自然堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化物微量 | 5 墓褐色 | ローム粒子中量、炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子、炭化物微量 | 6 墓褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子微量 | 7 墓褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子・燒土粒子中量、燒土小ブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化物微量 | | |



第37図 第7号住居跡出土遺物実測図

遺物 士師器及びその小破片280点、須恵器及びその小破片60点、羽口小片1点、鉄鏃2点、鉄滓110.2gが出土している。第37図77~82は上師器で、83~90は須恵器である。覆土上層では、85の坏が南壁際から正位の状態で、M2の鉄鏃が中央部から、M17の鉄鏃が南壁際から出土している。覆土上層では、78の坏が第1窓の西側から正位の状態で、83の坏が南壁際から逆位の状態で、86の坏が第2窓の西側から壊れた状態で、87の坏が第2窓右袖部の西側から壊れた状態で、89の盤が中央部から逆位の壊れた状態で、90の蓋が南東コーナー部から正位の壊れた状態で、88の高台付坏が南東コーナー部から逆位の壊れた状態で出土している。窓内では、79・80の小形甕が第1窓跡から壊れた状態で出土している。81の甕は、第1窓の覆土上層と第2窓の西側から出土した破片が接合したものである。その他にも覆土から82の手握土器が出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。本跡は、9世紀前葉の第5号住居跡と近接しており、羽口小片及び鉄滓と出土遺物が類似している。ほぼ同時期の住居跡であり、付近に鐵治工房が存在した可能性が考えられる。

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	基 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	駆上・色調・焼成	備考
第37図 77	坏 上師器	A 9.5 B 3.6	丸底、体部は外側して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面削ナダ。体部外側ハラナダ、内面ナダ。	長石・石英 にぶい橙色 普通	100% PLIS 1層構内・外灰幕付 丸四印
78 土 節 置	坏	A 12.0 B 5.0 C 7.1	体部から口縁部片。体部は外側して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面削ナダ。体部外側ハラナダ、内面ハラ削き。	長石・石英 橙色 普通	60% PLIS
79 上師器	小形甕	A 13.7 B 12.9 C 7.7	底部から口縁部片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面削ナダ。体部外側ハラ削り、内面ハラナダ。底部木製足。	長石・石英 明赤褐色 普通	80% PLIS
80 上師器	小形甕	A [12.8] B 11.8 C 6.6	底部から口縁部片。平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は外方につまみ上げられている。	口縁部内・外面削ナダ。体部外側ハラ削り、内面ハラナダ。底部木製足。	長石・石英 にぶい橙色 普通	40% PLIS
81 上師器	甕	A [21.6] B [7.8]	体部上部から口縁部片。体部は内側して立ち上がる。口縁部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面削ナダ。体部外側ハラ削り、内面ハラナダ。	長石・石英・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	10% PLIS
82 土師器	手握土器	B [3.9] C [4.2]	平底。体部は外側して立ち上がる。	体部内・外面削ナダ。	長石・赤色粒子 にぶい橙色 普通	PLIS
83 壞 須恵器	坏	A 13.5 B 4.0 C 7.8	平底。体部は外側して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナダ。体部下端回転ハラ削り。底部皿払ハラ削り。	長石・雲母 赤灰色 普通	100% PLIS
84 坏 須恵器	坏	A 13.1 B 4.1 C 7.8	口縁部・須恵器、平底。体部は外側して立ち上がり、口縁部はわずかに外側する。	口縁部、体部内・外面ロクロナダ。体部上端手持ハラ削り。底部底盤ハラ削り後、ハラ削り。	長石・雲母・赤色粒子 灰黒色 普通	90% PLIS
85 坏 須恵器	坏	A 13.2 B 3.5 C 8.1	口縁部第一脚欠損。平底。体部は外側して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナダ。底盤下端手持ハラ削り。底盤底盤ハラ削り後、ハラ削り。	長石 黄灰色 普通	80% PLIS
86 坏 須恵器	坏	A [12.8] B 3.5 C 7.8	底部から口縁部片。平底。体部は外側して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナダ。底盤下端手持ハラ削り。底盤一方のハラ削り。	長石 灰黑色 普通	50% PLIS
87 坏 須恵器	坏	A [11.7] B 3.3 C [7.0]	底部から口縁部片。平底。体部は外側して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナダ。底盤下端手持ハラ削り。底盤内側ハラ削り後、ハラ削り。	長石・石英・雲母 灰黑色 普通	30% PLIS
88 高台付坏 須恵器	坏	A 16.8 B [4.9]	底盤片。体部は外側して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面ロクロナダ。	長石・石英・雲母 灰黑色 普通	30%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
89	頸部忠器	A 16.5 B 3.7 D 11.1 E 1.3	口縁部一部欠損。底部は平底で、高台はハの字状に開く。体部は大きくなき、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は外反する。	口縁部・体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	長石・石英・雲母 灰色 普通	90% PL19	
		A 20.4 B (4.3)	脚部欠損。体部は大きくなき、口縁部に至る。口縁部は短く上方につまみ上げられている。	口縁部・体部内・外面ロクロナデ。 口縁部外面自然釉。	長石 灰黄色 普通	60% PL19	
90	高頸部忠器						
図版番号 器種 計測値 材質 特徴 備考							
都37KM2	鍾	(12.1)	2.3	0.3 (29.3)	鉄	基部欠損。片刃の曲刀鍾。	PL26
M17	鍾	(9.5)	2.8	0.2 (23.3)	鉄	曲刀鍾。基部を折り返す。	PL26

第8号住居跡（第38図）

位置 調査A区の中央部、B2c2区。

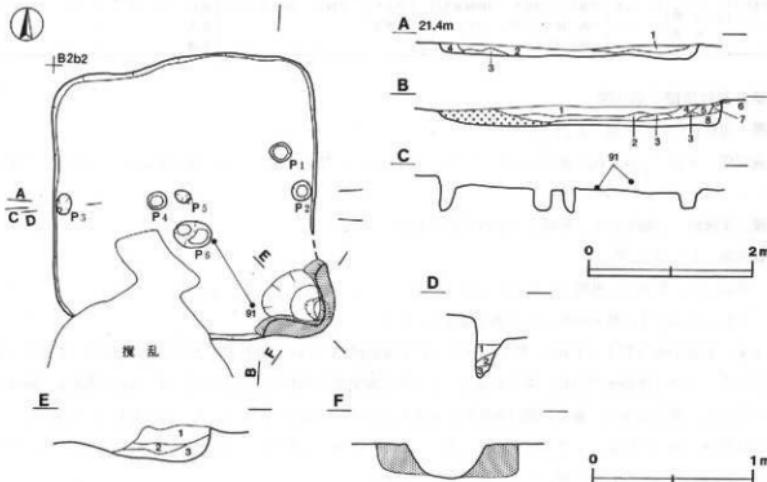
規模と平面形 南壁際から中央部にかけて搅乱を受け壊されている。長軸3.54m、短軸3.26mの方形である。

主軸方向 N-45°-W

壁 壁高は12~15cmで、外傾して立ち上がる。

床 出入り口部から東壁際にかけてはなだらかに下がり、比高は10cmである。

ピット 6か所（P1~P6）。P1・P2は径24cmの円形、深さ18~20cmで、いずれも東壁際から検出され、規模から主柱穴と思われる。P3は長径25cm、短径19cmの楕円形、深さ30cmで、竈反対側の西壁際位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P4は径23cmの円形で、深さ24cmである。P5は長径22cm、短径13cmの楕円形、深さ27cmで、いずれも中央部に位置し補助柱穴と思われる。P6は長径45cm、短径31cmの楕円形、深さ48cmで、他のピットに比べ規模が大きく性格は不明である。

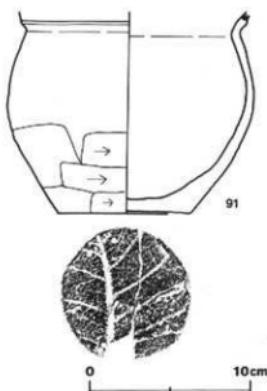


第38図 第8号住居跡実測図

P 3 土層解説

- 1 焼 卵色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量
- 2 焼 卵色 ローム小ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 焼 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化物微量

竈 南東コーナー部に付設されたコーナー竈である。焚口部から煙道口部までの長さ88cm、両袖幅122cmで、壁



第39図 第8号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡の時期は、出土遺物が少なく限定は難しいが、口縁端部を上方につまみ上げた小形甕が出土したことから8世紀後葉と考えられる。

第8号住居跡出土遺物観察表

国版番号	器種	計測値(cm)	器 形 の 特 樹	手 法 の 特 樹	胎土・色調・焼成	備 考
第39図 91	小 形 甕 土 師 器	B (12.6) C 8.2	底部から口縁部。口縁部欠損。 平底。体部は内側に立ち上がり、 口縁部に至る。	体部外面へり削り、内面ナデ。底部 木葉痕。	長石・石英・雲母 橙色 普通	50% PL18

第9号住居跡（第40図）

位置 調査A区の中央部、A 24j4区。

重複関係 第51・52号土坑に掘り込まれており、本跡が古い。また、第15号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.12m、短軸3.08mの方形である。

主軸方向 N-17°-E

壁 壁高は35~40cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。特に踏み固められた部分は認められない。

ピット P 10か所（P 1~P 10）。P 1・P 3・P 4は長径25~33cm、短径18~27cmの楕円形で、深さ17~32cmである。P 2は径29cmの円形、深さ30cmで、いずれも配列から主柱穴と思われる。P 5は長径26cm、短径19cmの楕円形、深さ21cmで、竈反対側の南壁際に位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6・P 9・P 10は径18~26cmの円形で、深さ15~21cmである。P 7・P 8は長径25~30cm、短径18~24cmの楕円形、深さ20cmで、いずれも主柱穴の内側に位置し補助柱穴と思われる。

竈 北壁中央に付設されている。焚口部から煙道口部までの長さ90cm、両袖幅102cmで、壁外への掘り込みは36cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。土層断面図中、第5～7層は袖部の土層である。火床部は、円形に6cmほど掘り込まれている。煙道は火床部から緩やかに湾曲しながら立ち上がる。

竈土解説

- 1 焙赤褐色 ローム小ブロック・ローム粘子少量、焼土粘子・炭化粘子微量
- 2 焙赤褐色 ローム粘子・焼土粘子少量、炭化粘子・粘土粘子微量
- 3 焙赤褐色 焼土粘子・炭化物・炭化粘子少量、ローム粘子・焼土小ブロック・粘土粘子微量
- 4 焙赤褐色 焼土小ブロック・焼土粘子・炭化物・炭化粘子少量
- 5 焙赤褐色 ローム粘子中量、焼土小ブロック・焼土粘子・粘土粘子・砂粒少量
- 6 焙 色 烧土粘子・砂粒微量、ローム小ブロック・ローム粘子少量、焼土小ブロック微量
- 7 焙 色 ローム粘子中量、ローム小ブロック少量、粘土粘子・砂粒微量

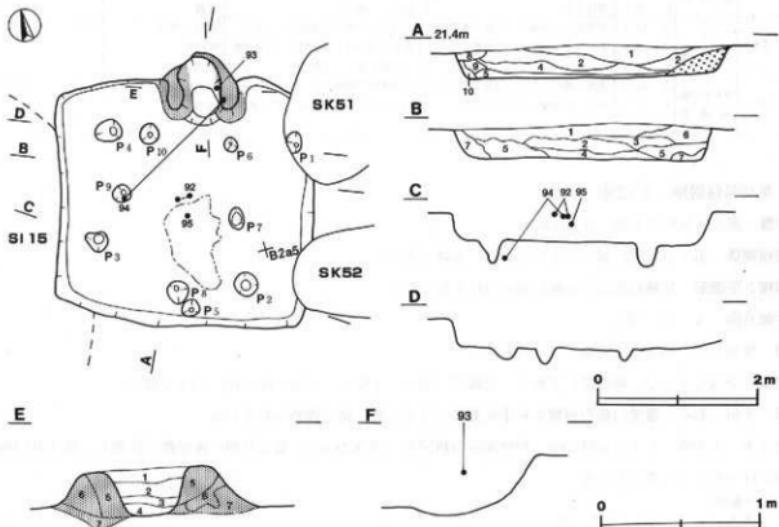
覆土 10層からなる。ローム・炭化物が含まれていることと、不自然な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

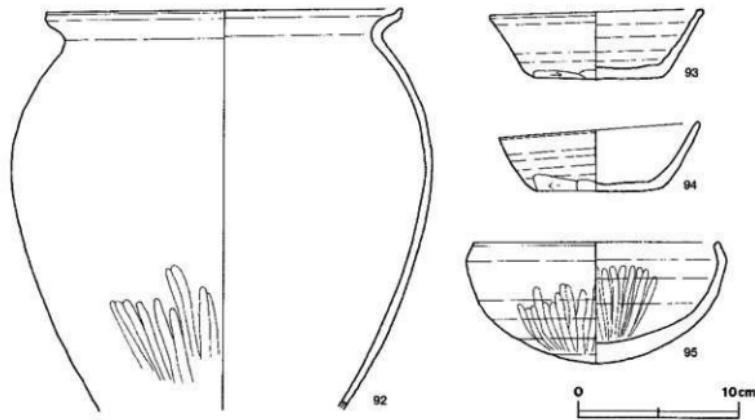
- 1 焙 色 ローム小ブロック・ローム粘子少量、炭化粘子微量
- 2 焙 色 ローム小ブロック中量、ローム粘子少量、炭化粘子微量
- 3 焙 色 ローム小ブロック中量、ローム粘子少量、炭化粘子微量
- 4 焙 色 ローム粘子中量、ローム小ブロック少量、炭化粘子微量
- 5 焙 色 ローム小ブロック・ローム粘子中量、炭化粘子微量
- 6 焙 色 ローム小ブロック・ローム粘子中量、炭化粘子微量
- 7 焙 色 ローム小ブロック・ローム粘子中量
- 8 焙 色 ローム粘子中量、ローム小ブロック少量、炭化粘子微量
- 9 焙 色 ローム小ブロック・ローム粘子少量、炭化粘子微量
- 10 焙 色 ローム粘子中量、ローム小ブロック少量

遺物 土師器及びその小破片68点、須恵器とその小破片点8点が出土している。第41図92は土師器壺で、93～95は須恵器である。覆土上層では、92の壺が中央部から壊れた状態で、95の鉄鉢が中央部から逆位の状態で出土している。竈内では、93の壺が燃焼部から斜位の状態で出土している。94の壺は右袖部とP 9内中層から出土した破片が接合したものである。

所見 竈内から供膳具である壺が二次焼成を受けずに出土していることから、住居を廃棄するにあたって、竈の中に壺を埋納するという祭祀行為が行われた可能性がある。時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第40図 第9号住居跡実測図



第41図 第9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表

出土地番	器種	主測径(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第41図 92 上層器		A: 21.9 B: (25.1)	体部下段からU縁部。底部は内側して立ち上がる。口縁端部は上方につまみ上げられている。	U縁部・外側磨ナダ。体部外側へラ磨き、内面ハラ磨ナダ。	長石・石英・雲母・赤色粒子、に赤い褐色普通	40% PL19
93 環状器	环	A: 13.2 H: 4.4 C: 8.1	U縁部一部欠損。底部は外傾して立ち上がり、U縁部はわずかに外反する。	U縁部・体部内・外面ロクロナナ。体部下端手持ちヘラ削り。底部三方向のヘラ削り。	長石・石英 黄褐色 普通	90% PL18
94 環状器	环	A: 12.4 B: 4.4 C: 8.0	底部からU縁部。平底。体部は外傾して立ち上がり。口縁部に朱る。	U縁部・体部内・外面ロクロナナ。体部下端手持ちヘラ削り。底部斜部ヘラ削り後、ヘラ削り。	長石・云母 灰白色 普通	30% PL19
95 鍵鉢形上器 環状器		A: 15.3 B: 7.5	丸底。体部は大きく内擣して立ち上がり、U縁部は内傾している。	口縁部内・外面ロクロナナ。体部内・外面ロクロナナ後、瓶底のヘラ磨き。	長石・石英・雲母 灰色 普通	100% PL19

第10号住居跡（第42図）

位置 椰査A1区の中央部、B2a4d区。

重複関係 第4号土坑に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長軸4.28m、短軸3.39mの長方形である。

主軸方向 N-5°-W

壁 壁高は22~35cmで、外傾して立ち上がる。

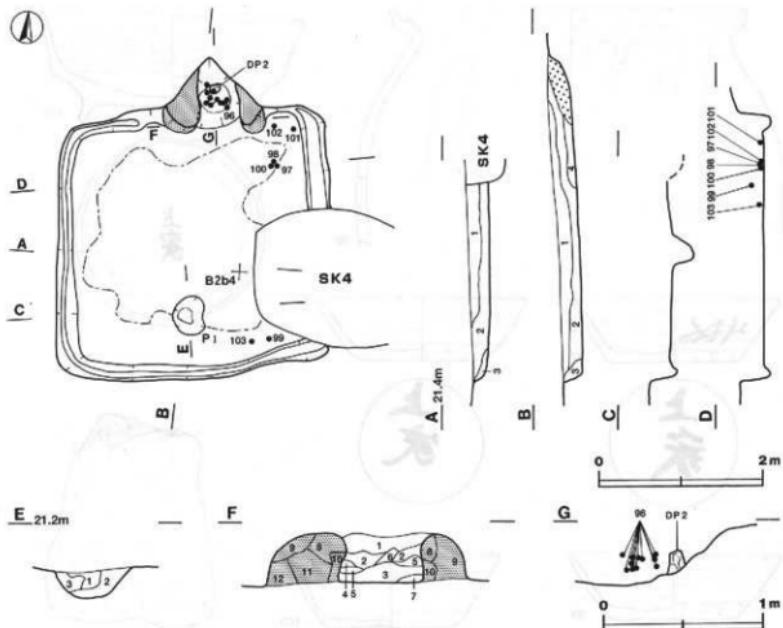
壁溝 金剛している。断面はU字形で、上幅17~30cm、下幅7~13cm、深さ10~13cmである。

床 平坦である。竈焚口部の南側から中央部にかけて、特に踏み固められている。

ピット 1か所。P1は長径45cm、短径36cmの楕円形、深さ29cmで、竈反対側の南壁際に位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

P1土壤解説

- 1 砂褐色 ローム粒子・炭化板子微量
- 2 黒褐色 ローム小プロック・ローム粒子・炭化板子微量
- 3 灰色 ワーム小プロック・ローム粒子少量



第42図 第10号住居跡実測図

竈 北壁中央に付設されている。焚口部から煙道口部までの長さ87cm、両袖幅124cmで、壁外への掘り込みは62cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。土層断面図中、第8～12層は袖部の土層である。火床部は、ほぼ平坦で掘りくぼめられた様子は見られない。煙道は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

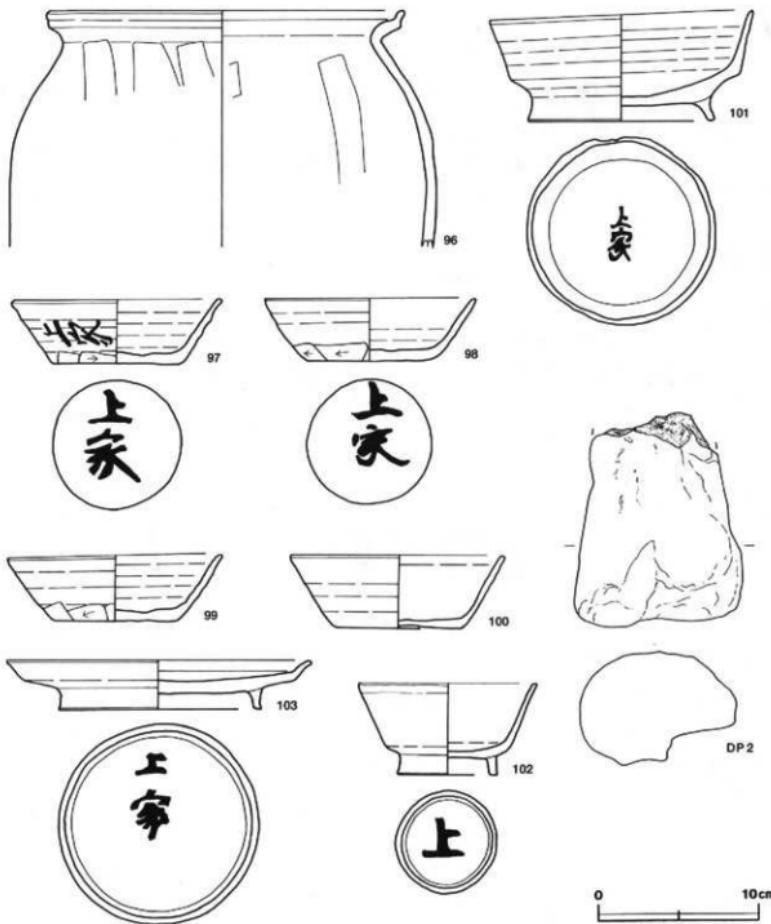
- | | |
|----------|---------------------------|
| 1 黄褐色 | ローム粒子中量、焼土小ブロック・粘土粒子少量 |
| 2 深赤褐色 | 焼土粒子・粘土粒子少量、焼土小ブロック・炭化物微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土小ブロック中量、灰少量、炭化物微量 |
| 4 深赤褐色 | 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量 |
| 5 深赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 6 黄褐色 | 粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 7 暗赤褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・焼土小ブロック微量 |
| 8 深赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子・砂粒微量 |
| 9 黄褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、粘土粒子微量 |
| 10 黄褐色 | 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 11 にがい褐色 | ローム粒子・粘土粒子中量、ローム小ブロック少量 |
| 12 黄褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量 |

覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------|--|
| 1 黄褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 黄褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 黄褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量 |
| 4 黄褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量 |

遺物 土師器とその小破片37点、須恵器とその小破片5点、土製支脚1点が出土している。第43図96は土師器、97～103は須恵器である。覆土中層では、99の坏が南東コーナー部壁際から逆位の状態で出土している。床面



第43図 第10号住居跡出土遺物実測図

では、壺が竈右袖部の南側から床面直上に100・97・98の順に正位の状態で3枚重なって出土している。97と98の壺は、底部に「上家」と墨書きされている。101・102の高台付壺は北東コーナー部から、101が斜位の状態で、102が横位の状態で出土している。いずれも底部に101は「上家」、102は「上」と墨書きされている。103の盤は南壁際から斜位の状態で出土している。窓内では、96の壺が壊れた状態で、D P 2の支脚が中央部から直立した状態で出土している。

所見 本跡からは、底部に「上家」と墨書きされた土器が4点、「上」が1点の合計5点の墨書き土器が出土している。「上家」と墨書きされた土器の3点の内2点は重なった状態で出土している。出土位置は4点が、北東コー

ナと右肩部南側と集中している。第2号住居跡からも須恵器の底部に「上家」と墨書きされた上器が出土している。時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備考
第43図 96	壺 土師器	A [22.4] B (14.8)	体部一辺から口縁部。体部は内側して立ち上がり、口縁部は上方につまむり付されている。	口縁部内・外面横ナギ。体部内・外向ヘラナギ。	良石・石英・赤色粒子 に赤い橙色	30% PL19
97	壺 須恵器	A 12.8 B 4.1 C 8.0	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナギ。 体部下端手持ちヘラ削り。底部内輪ヘラ削り先、ヘラ削り。	長石・石英・雲母 灰白色 普通	100% PL19 底部外側・体部外に 横位の墨書き「上家」
98	壺 須恵器	A 13.2 B 4.0 C 7.8	口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナギ。 体部下端手持ちヘラ削り。底第一部向のヘラ削り。	長石・石英・雲母 黄褐色 普通	90% PL19 底部外側墨書き「上家」
99	壺 須恵器	A 13.3 B 4.2 C 7.7	体部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナギ。 体部下端手持ちヘラ削り。底部一方向のヘラ削り。	長石・雲母・白色粒子 灰色 普通	90% PL19
100	壺 須恵器	A 13.1 B 4.6 C 7.9	口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナギ。 底部内輪ヘラ削り。	長石・石英・雲母・白 色粒子 普通	95% PL19
101	高台付壺 須恵器	A 16.4 B 6.9 C 11.6 E 1.6	体部から口縁部一部欠損。底盤と体部の境は明瞭な棱をもつて屈曲する。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。高台はハの字状に聞く。	口縁部、体部内・外面ロクロナギ。 底盤回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	長石・石英・雲母 灰色 普通	90% PL19 底盤外側墨書き「上家」
102	高台付壺 須恵器	A [11.0] B 5.7 D 6.3 E 1.2	体部から口縁部一部欠損。底盤と体部の境は棱をもつて屈曲する。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。高台はハの字状に聞く。	口縁部、体部内・外面ロクロナギ。 底盤回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	長石 黄褐色 普通	80% PL19 底盤外側墨書き「上」
103	蓋 須恵器	A 18.8 B 3.1 D 12.5 E 1.4	口縁部一部欠損。底盤は平底で、高台はハの字状に聞く。体部は大きくなつき、口縁部の境に後をもつ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部。体部内・外面ロクロナギ。 底盤回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	長石・石英・雲母・赤 色粒子 灰色 普通	90% PL19 底盤外側墨書き「上家」

図版番号	器種	計 測 値	材 質	特 徴	備 考
第43図P2 支脚	(13.4)	(10.5) (6.3) (799.2)	上	上平欠損、焼成は普通。	PL24

第11号住居跡（第44図）

位置 調査区の中央部、A 2j6区。

規模と平面形 長軸3.52m、短軸3.42mの方形である。

主軸方向 N-4°-W

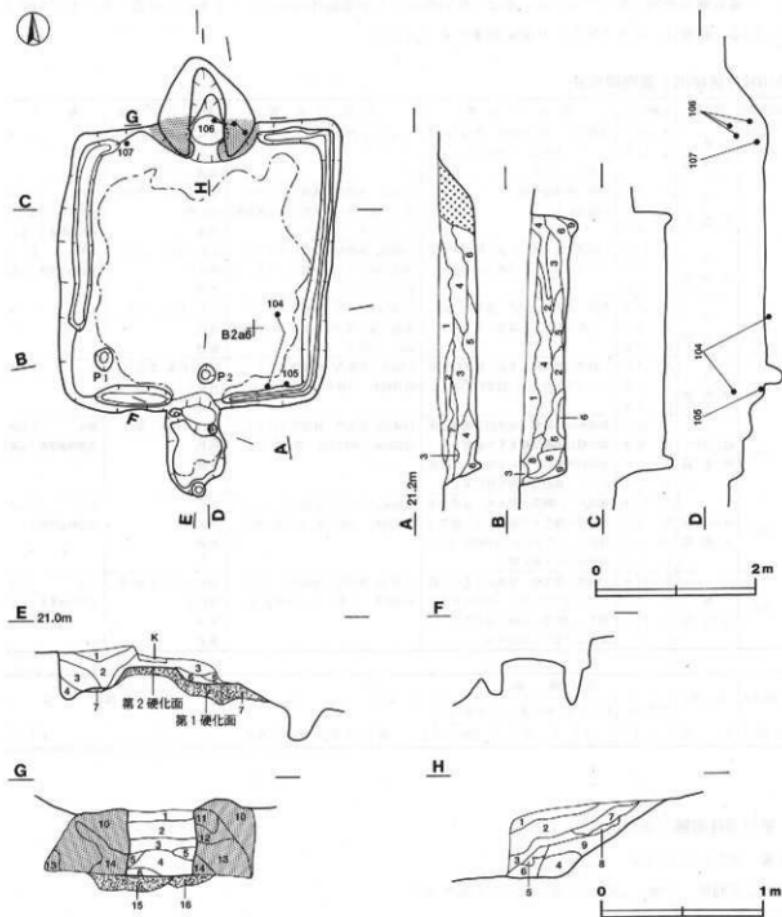
壁 壁高は40~55cm、外傾して立ち上がる。

壁溝 南西コーナー部を除き巡っている。断面はU字形で、上幅15~23cm、下幅5~13cm、深さ10~15cmである。

床 平坦である。特に、中央部が踏み固められている。

ピット 2か所（P 1・P 2）。P 1は径25cmの円形、深さ16cmで、位置から主柱穴と思われる。P 2は径23cmの円形、深さ24cmで、出入り口施設に作るピットと考えられる。

竈 北壁中央に付設されている。天井部は崩落し、両袖部が残存している。上層断面中、第7層が天井部の上層と思われる。焚口部から煙道口部までの長さ132cm、両袖幅138cmで、壁外への掘り込みは84cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。土層断面図中、第10~14層は袖部の土層で、15~16層は掘り方内の土



第44図 第11号住居跡実測図

層である。火床部は、ほぼ平坦で掘りくぼめられた様子は見られない。煙道は火床部から緩やかに立ち上がる。

地質解説

- 1 暗赤褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量・焼土小ブロック・炭化物微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子・粘土粒子少量・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 烧土粒子中量・焼土小ブロック・粘土粒子少量・焼土中ブロック・炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 烧土粒子中量・焼土小ブロック少量・炭化粒子・粘土粒子微量
- 6 暗赤褐色 烧土粒子・炭化物・炭化粒子少量・焼土小ブロック微量
- 7 暗赤褐色 烧土粒子中量・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 暗赤褐色 烧土粒子・粘土粒子中量・焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 9 暗赤褐色 烧土中ブロック・焼土粒子中量・焼土小ブロック・炭化粒子少量・炭化物微量
- 10 黄褐色 粘土粒子・砂粒中量・ローム小ブロック・ローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子微量
- 11 仁井頭蛇 粘土粒子・砂粒・焼土粒子中量・ローム粒子少量・炭化粒子微量

- 12 黄褐色 粘土粒子少量、ローム粒子・燒土粒子少量
 13 黄褐色 ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
 14 呈色 ローム粒子中量、燒土小ブロック、燒土粒子少量、ローム小ブロック、炭化粒子微量
 15 呈褐色 ローム小ブロック、燒土小ブロック、燒土粒子少量、ローム粒子微量
 16 呈褐色 烧土小ブロック、燒土粒子、炭化粒子少量、ローム小ブロック、ローム和子微量

出入り口施設 南壁中央部から、壁外へ張り出した階段が検出された。構築方法は、南壁外へ130cmほど掘り込み、ローム小ブロック及びローム粒子混じりの暗褐色土を盛上し、テラス状の硬化面を2段有している。住居床面から硬化面までの高さは、第1硬化面までは18cmで、第2硬化面までは30cmである。また、第1硬化面には2か所のビットがあり、第2硬化面には1か所のビットがあるが性格は不明である。住店内から検出された出入り口施設に伴うビットと階段との関係は、第1硬化面から床面にかけてはスロープ状になっており、張り出し部の幅54cmには壁溝が巡らず、ビットにかけては硬化しており、ビットを埋めて踏み固めた様子も見られないことから、階段に付随するものなのかなは不明である。上層断面中、第7層は構築土である。

土解説

- 1 呈褐色 ローム粒子少量
 2 呈褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック、炭化粒子少量
 3 呈色 ローム小ブロック、ローム粒子中量、燒土粒子、炭化粒子微量
 4 呈褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
 5 呈褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
 6 呈褐色 ローム粒子少量、炭化物・炭化粒子微量
 7 呈褐色 ローム小ブロック、ローム粒子中量、炭化粒子微量

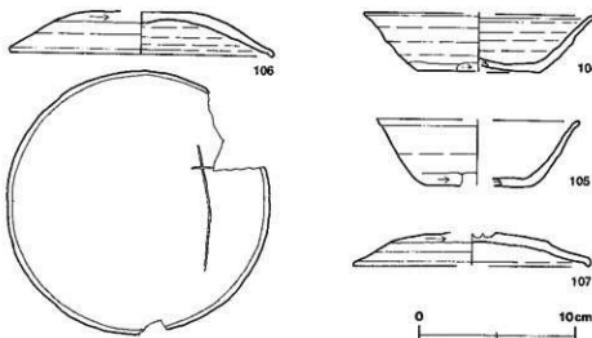
覆土 9層からなる。ローム・焼土・炭化物が含まれていることと、不自然な堆積状況から人為堆積と思われる。

土解説

- 1 呈褐色 ローム粒子少量、炭化物微量
 2 呈褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック、炭化粒子少量、炭化物微量
 3 呈褐色 ローム小ブロック、ローム粒子中量、燒土粒子微量
 4 呈褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック、燒土粒子、炭化物少量、炭化粒子微量
 5 呈褐色 ローム小ブロック、ローム粒子中量、燒土粒子少量、炭化物微量
 6 呈褐色 ローム粒子中量、燒土粒子・炭化物・炭化粒子微量
 7 呈褐色 ローム小ブロック、ローム粒子中量
 8 呈褐色 ローム小ブロック、ローム粒子中量、炭化物微量
 9 呈褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量、ローム小ブロック微量

遺物 上層器片93点、須恵器及びその小破片17点が出土している。第45図104～107は須恵器である。覆土下層では、107の蓋が北壁際から逆位の状態で出土している。床面では、105の坏が南東コーナー部から逆位の状態で出土している。104の坏は南壁際から東壁際から出土した破片が接合したものである。竈内では、106の蓋が中層から斜位のつぶれた状態で出土している。

所見 本跡からは、壁外へ張り出した階段が検出された。当遺跡においては本跡の1軒のみであり、注目される。時期は、出土上器から8世紀後葉と考えられる。



第45図 第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表

開拓番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	釉上・色調・焼成	備考
第45回 104 頃 須 恵 器	杯	A [14.6] B 3.7 C [4.0]	底部から口縁部片。平底。底部は外傾して立ち上がり。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、底部内・外面ロクロナデ。底部下端手持ちへラ削り。底部周輪へラ削り種。ヘラ削り。	長石 灰色 普通	40%
105	杯	A [13.0] B 4.2 C [7.0]	底部から口縁部片。平底。底部は外傾して立ち上がり。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、底部内・外面ロクロナデ。底部下端手持ちへラ削り。	石英・雲母・赤色粒子 灰白色 普通	30%
106	蓋 須 恵 器	B (2.7) C 16.6	つまみ部欠損。火井部はほぼ平坦。口縁部は粗く折り返している。	口縁部、外側内・外面ロクロナデ。火井部内板へラ削り。ヘラ記号。	長石・石英・雲母 灰色 普通	90% PL19
107	蓋 須 恵 器	B (2.1) C [15.2]	つまみ部欠損。火井部は平底。口縁部は強く折り返している。	口縁部、外側内・外面ロクロナデ。火井部周輪へラ削り。	長石・石英・雲母 灰色 普通	60% PL19

第12号住居跡（第46回）

位置 調査A区の南西部、B 2e2区。

重複関係 第13・14号住居に掘り込まれておる、本跡が古い。また、第16号住居跡を掘り込んでおる、本跡が新しい。

規模と平面形 西壁と東壁の一部が搅乱を受けている。確認できた長軸4.32m、短軸1.08mで、方形と推定される。

主軸方向 N-22°-Wと推定される。

壁 壁高は10~18cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 西壁際と北東コーナー部の一部に巡っている。断面はU字形で、上幅13~18cm、下幅5~9cm、深さ8~10cmである。

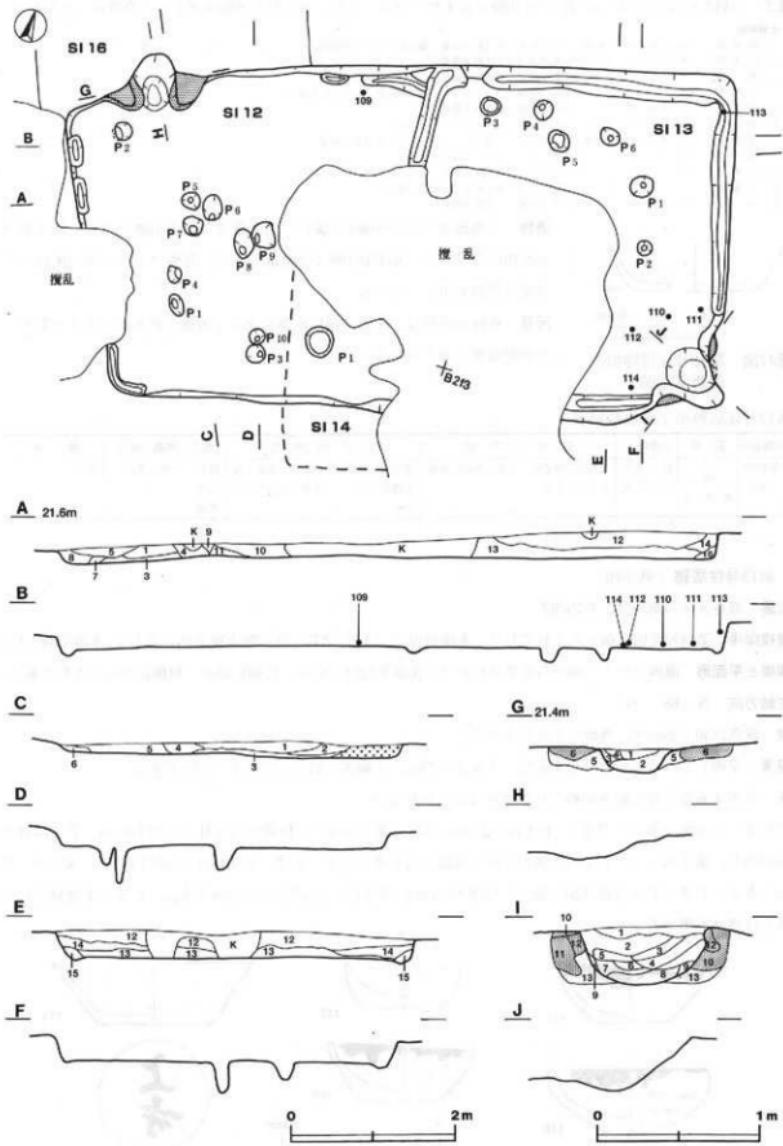
床 平坦である。特に踏み固められた部分は認められない。

ピット 10か所 (P 1~P 10)。P 1は長径27cm、短径18cmの楕円形で、深さ26cmである。P 2は径24cmの円形、深さ24cmで、いずれも位置及び配列から主柱穴と思われる。P 3は径26cmの円形、深さ25cmで、竈反対側の南壁際に位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 4は径21cmの円形、深さ26cmで、P 1の北側に位置し補助柱穴と思われる。P 5・P 7・P 10は径21~24cmの円形で、深さ15~45cmである。P 6・P 8・P 9は長径31~37cm、短径24~27cmの楕円形及び不整形、深さ11~30cmで、いずれも中央部に位置し性格は不明である。

竈 北壁中央西寄りに付設されている。焚口部から煙道口部までの長さ72cm、両袖幅118cmで、壁外への掘り込みは42cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。土層断面中、第5・6層は袖部の土層である。火床部は円形に10cmほど掘り込まれ、火熱を受け変化している。煙道は火床部から緩やかに立ち上がる。

遺土層解説

- 赤玉褐色 燐上粒子・炭化粒子少量。砂粒微量
- 暗赤褐色 燐上粒子中量。底上小ワック少見。砂粒微量
- 暗赤褐色 機十小ブロック・機十灰・中量。ローム粒子少量。砂粒微量
- 暗赤褐色 ローム粒子中量。機十小ブロック・機十灰少量
- 暗赤褐色 機十小ブロック・底上粒子中量。ローム小ブロック・ローム粒子・硝子粒子少量
- 暗褐色 燐上粒子中量。ローム小ブロック・ローム粒子・砂粒少量。炭化物微量

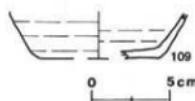


第46図 第12・13・14号住居跡実測図

覆土 11層からなる。ローム・焼土・炭化物が含まれていることと、不自然な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 級 色 ローム小ブロック中量。ローム粒子・炭化粒子少量。燒土粒子・炭化物微量
- 2 級 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量。炭化粒子微量
- 3 級 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量。炭化粒子微量
- 4 級 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量。ローム中ブロック・燒土粒子・炭化粒子微量
- 5 級 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量。炭化粒子微量
- 6 級 色 ローム中ブロック・ローム粒子中量。ローム中ブロック少量
- 7 級 色 ローム小ブロック多量。ローム中ブロック・ローム粒子中量。炭化粒子微量
- 8 級 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 9 級 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量。炭化粒子微量
- 10 級 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量。燒土粒子・炭化粒子微量
- 11 級 色 ローム中ブロック・ローム粒子中量。炭化粒子微量



第47図 第12号住居跡出土
遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表

回収番号	器種	直面幅(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 109 須恵器	壺	B (2.9) C [7.6]	底落から体部片。平底。体部は外輪して立ち上がる。	体部内・外面クロコナデ。底部下端手持ちへら削り。底部一方向のヘラ削り。	長石・石英・雲母 灰色 普通	20%

第13号住居跡（第46図）

位置 調査A区の南西部、B2e3区。

重複関係 第14号住居に掘り込まれており、本跡が古い。また、第12号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 南西コーナー部から中央部にかけて擾乱を受けている。長軸4.43m、短軸4.02mの方形である。

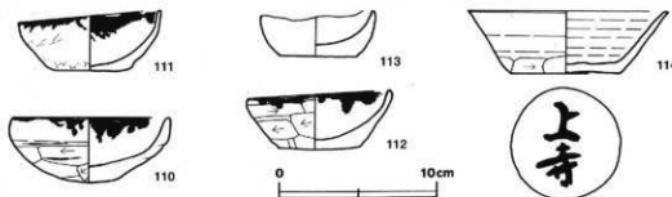
主軸方向 N-68°-W

壁 壁高は30~35cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。断面はU字形で、上幅25~30cm、下幅8~14cm、深さ8~10cmである。

床 平坦である。特に踏み固められた部分は認められない。

ピット 6か所（P1~P6）。P1は径27cmの円形、深さ25cmで、位置から主柱穴と思われる。P2は径20cmの円形、深さ44cmで、P1の南側に位置し補助柱穴と思われる。P3・P4は径22cmの円形で、深さ9~21cmである。P5・P6は長径26~30cm、短径20~24cmの楕円形で、深さ19~24cmである。いずれも北壁際に位置し性格は不明である。



第48図 第13号 住居跡出土遺物実測図

竈 南東コーナー部に付設されたコーナー竈である。天井部は崩落し、両袖部が残存している。土層断面中、第2層が天井部の崩落層と思われる。焚口部から煙道口部までの長さ88cm、両袖幅108cmで、壁外への掘り込みは38cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。土層断面中、第10~13層は袖部の土層である。火床部は円形に9cmほど掘り込まれ、火熱を受け赤変化している。煙道は火床部から緩やかに立ち上がる。

遺土層解説

- 1 黄 色 ローム粒子少量、焼上粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 3 黑褐色 焼土粒子少量、砂粒微量
- 4 黑褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量、砂粒微量
- 5 黑褐色 焼土中ブロック・焼土粒子中量、炭化物・砂粒微量
- 6 黑褐色 焼土粒子中量、砂粒微量
- 7 黑褐色 焼土粒子少量、焼土中ブロック少量
- 8 黑褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 9 黑褐色 烧土粒子中量、ローム粒子・粘土粒子少量
- 10 黑 色 烧土粒子多量、ローム小ブロック・ローム粒子・粘土小ブロック中量
- 11 黑 色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土小ブロック・焼土粒子中量
- 12 黑 色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子中量、燒土粒子少量
- 13 黑 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

土層解説

- 12 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 13 黑褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 14 黑褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量
- 15 黑 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量

遺物 土師器及びその小破片221点、須恵器及びその小破片12点が出上している。第48岡110~113は上師器で、114は須恵器である。覆土上層では、113の手握土器が北東コーナー部壁に貼りついた状態で出土している。覆土下層では、110~112の壺が竈の北側から正位の状態で、底部に「上寺」と墨書きされた114の壺が竈右袖部の西側から斜位の状態で出土している。

所見 本跡からは、底部に「上寺」と墨書きされた須恵器の壺が1点出土している。当住居近くに位置する第2・3号住居からも底部に「×寺」と墨書きされた土器が出土しており、いずれも「寺」と墨書きされていることから、付近に仏堂的な建物があった可能性が考えられる。時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。

第13号住居跡出土遺物観察表

出土地番	器種	計測値(cm)	器 形 の 特徴	手 法 の 特徴	胎土・色調・焼成	備考
第48岡 110 土 師 器	A	10.0	丸底。体部は内厚して立ち上がり、口縁部に直る。	口縁部外側削りナダ。体部外側へラ削り、内腹ナダ。	長石・石英・赤色粘土 に赤い橙色 普通	100% P L20
	B	4.2	口縁部に直る。			1層部内・外黏膜付着 有明月
111 土 師 器	A	9.1	平底。体部は内厚して立ち上がり、口縁部に直る。	口縁部内・外側クロナダ、体部外 面相いナダ、内腹ナダ。底部重いハ ラ削り。	石英・赤色粘土 に赤い橙色 普通	100% P L20
	B	3.9	口縁部に直る。			1層部内・外黏膜付着 有明月
	C	5.0				
112 土 師 器	A	8.9	口縁部一部欠損。平底。体部は内厚 して立ち上がり、口縁部に直る。	口縁部内・外側削りナダ。体部外側へ ラ削り、内腹ナダ。底部重いハラ削 り。	長石・石英・赤色粘土 に赤い橙色 普通	95% P L20
	B	3.8				口縁部内・外側削りナ ダ有明月
	C	5.1				
113 手握土器 上 師 器	A	7.1	口縁部一部欠損。平底。体部は内厚 して立ち上がる。	口縁部。体部内・外側ナダ。	長石 に赤い橙色 普通	90% P L20
	B	3.0				口縁部内・外側削りナ ダ有明月
	C	5.0				
114 須 恵 器	A	12.9	容器。器内欠損。平底。体部は外傾し て立ち上がり、口縁部はわずかに外 反する。	口縁部。体部内・外側ロクロナダ。 体部下端手持ちハラ削り。底部向左 ハラ削り後、ハラ削り。	長石・石英・漂母 灰色 普通	80% P L20 底部外側墨書き「上寺」
	B	4.0				
	C	7.0				

第14号住居跡（第46図）

位置 調査A区の南西部、B 2e2区。

重複関係 第12・13号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 捜査を受け、南西コーナー部を含む西壁から南壁の一部が残存しているだけで、不明である。
主軸方向 不明である。

壁 上部が削平されているため、壁の立ち上がりをとらえることができなかつた。

床 平坦である。

ピット 1か所。P 1は径36cmの円形、深さ11cmで、性格は不明である。

遺物 土器小破片34点、須恵器小破片2点が出上している。図示できるものはない。

所見 本跡は、住居の一部のみの確認であった。時期は、9世紀中葉と思われる第13号住居の上から検出されていること、出土土器からそれ以降の平安時代と推定される。

第16号住居跡（第49図）

位置 調査A区の南西部、B 2e1区。

重複関係 第12号住居に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.38m、確認できた短軸2.01mで長方形と推定される。

主軸方向 N-25°Wと推定される。

壁 壁高は14~20cmで、外傾して立ち上がる。

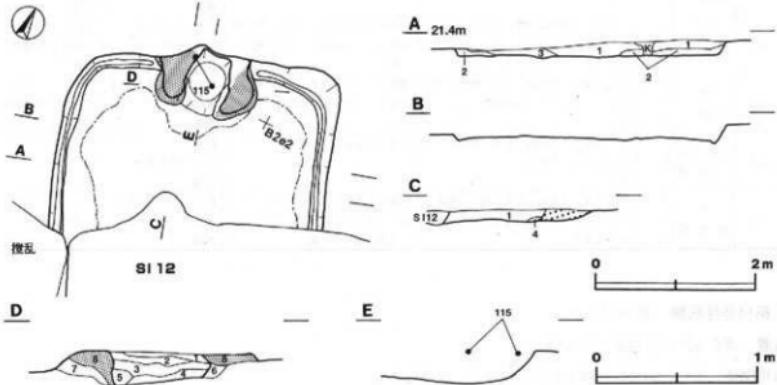
壁溝 確認できた壁下を周囲している。断面はU字形で、上幅17~25cm、下幅5~10cm、深さ6~10cmである。

床 平坦である。竈焚口部の南側から中央部にかけて、特に踏み固められている。

竈 北壁中央に付設されている。焚口部から煙道口部までの長さ86cm、両袖幅126cmで、壁外への掘り込みは18cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。土層断面中、第6~8層は袖部の土層である。火床部は円形に8cmほど掘り込まれ、火熱を受け赤変硬化している。煙道は火床部から緩やかに立ち上がる。

遺土層解説

- | | | |
|---|------|------------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 | C灰小粒 | 焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量 |
| 3 | 赤褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック中量、焼土中少ブロック・炭化粒子・砂粒微量 |
| 4 | 赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 5 | 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 | 暗赤褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 7 | 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 8 | 褐色 | 粘土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・砂粒微量 |



第49図 第16号住居跡実測図

覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土器解説

- 1 緑褐色 ローム粒子中量、幾十枚子少量、炭化粒子微量
- 2 黄褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、燒土粒子微量
- 3 灰褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量、燒土粒子微量
- 4 防水褐色 ローム粒子、幾十枚子少量、漆液微量

遺物 土師器及びその小破片125点、須恵器及びその小破片7点、鉄滓39.8gが出土している。第50図115は底部に「馬方」と墨書きされた須恵器の杯で、龜焼窯部の中層から逆位の状態で出土している。

所見 窯内から供膳具である杯が二次焼成を受けずに出土していることから、住居を廃棄するにあたって、窯の中に杯を埋納するという祭祀行為が行われた可能性がある。時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	直従径(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 115	杯 須恵器	A [14.2] B 4.5 C 8.8	底部から口絆部。平底。体部は外彌して立ち上がり、口絆部に溝。	口縁部、体内部・外周部クロナデ。 体部下端斜板ハラ削り。底部多方向 のハラ削り。	長石・雲母 黄灰色 普通	30% PL39 底面墨書き「馬方」

第19号住居跡 (第51図)

位置 調査A区の中央部、B2b7区。

重複関係 第49号上坑に掘り込まれておる、本跡が占い。

規模と平面形 長軸4.57m、短軸4.39mの方形である。

主軸方向 N-4°-W

壁 壁高は30~45cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南壁及び東壁下を除き巡っている。断面はU字形で、上幅20~28cm、下幅4~10cm、深さ5~12cmである。

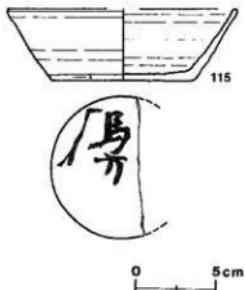
床 平坦である。窯焚口部の南側から中央部にかけて、特に踏み固められている。

ピット 4か所 (P1~P4)。P1は径34cmの円形で、深さ18cmである。P2は径35cmの円形で、深さ14cmである。いずれも位置から土柱穴と思われる。P3は長径30cm、短径25cmの不整形で、深さ20cmである。P4は一段掘り込みになっており、上段は長径40cm、短径34cmの不整形で、深さ15cmである。下段は径20cmの円形で、深さ28cmである。いずれも中央部に位置し、性格は不明である。

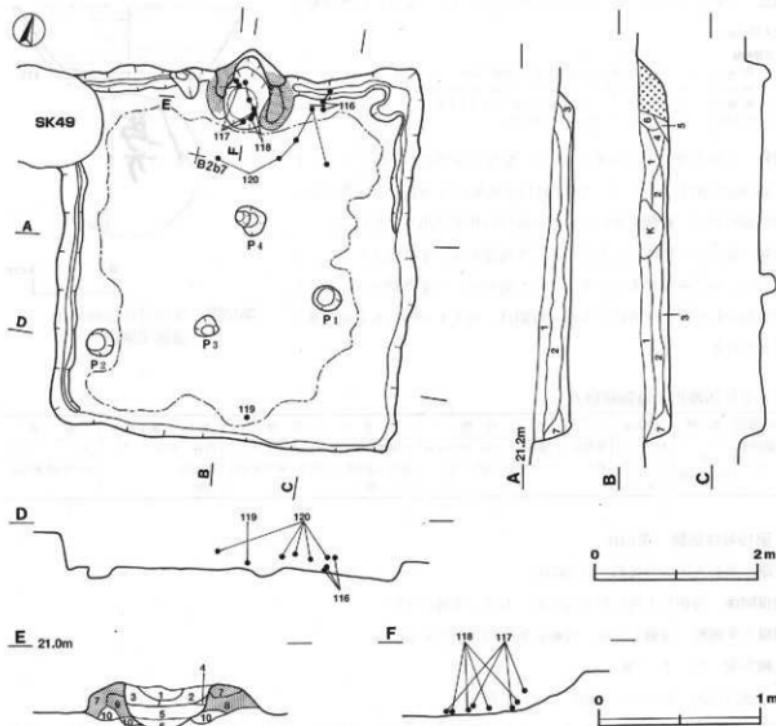
窯 北壁中央に付設されている。焚口部から煙道口部までの長さ98cm、両袖幅108cmで、壁外への掘り込みは27cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。上層断面中、第7~10層は袖部の上層である。火床部は円形に4cmほど掘り込まれ、火熱を受け赤変硬化している。煙道は火床部から緩やかに立ち上がる。

土器解説

- 1 緑褐色 ローム粒子、燒土小ブロック、燒土粒子、炭化物微量
- 2 防水褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム小ブロック、炭化粒子微量
- 3 灰褐色 燃土小ブロック、燒土粒子中量、燒土中ブロック、炭化粒子、燒土粒子少量、炭化物微量
- 4 防水褐色 燃土小ブロック中量、燒土中ブロック、燒土粒子少量、炭化粒子微量
- 5 灰褐色 燃土小ブロック、燒土粒子中量、燒土中ブロック、炭化粒子少量、燒土小ブロック、ローム中ブロック微量
- 6 防水褐色 燃土中粒子、燒土粒子少量、ローム粒子、燒土中ブロック、燒土小ブロック、炭化粒子微量
- 7 灰褐色 燃土中粒子、燒土粒子少量、燒土中ブロック、燒土小ブロック、燒土中ブロック、炭化粒子微量
- 8 灰褐色 ローム粒子、燒土粒子、燒土中ブロック中量、燒土粒子、炭化物、炭化粒子、燒土中ブロック微量
- 9 防水褐色 燃土中粒子、燒土中ブロック、燒土粒子少量、燒土中ブロック微量
- 10 防水褐色 ローム小ブロック、燒土粒子中量、ローム粒子少量



第50図 第16号住居跡出土
遺物実測図



第51図 第19号住居跡実測図

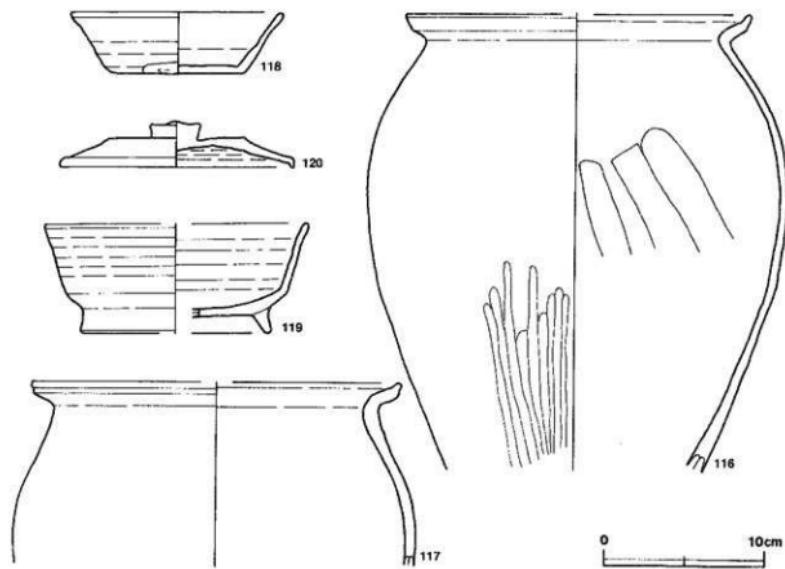
覆土 7層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 砂褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 砂褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 砂褐色 ローム粒子中量、炭化物・炭化粒子微量
- 4 砂褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 5 黄褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 6 黄褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 7 黄褐色 ローム粒子少量

遺物 土師器及び小破片128点、須恵器及びその小破片19点が出土している。第52図第116・117は土師器で、118~120は須恵器である。覆土下層では、119の高台付壺が南壁際から斜位の状態で出土している。120の蓋は、竈の南側と右袖部の壁際から出土した破片が接合したものである。床面では、116の壺が竈右袖部の壁際から壊れた状態で出土している。竈内では、117の壺と118の壺が覆土下層から壊れた状態で出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第52図 第19号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表

回収番号	器種	計量値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第52図 116	壺 十脚器	A [21.3] B [28.7]	体部下底から口縁部分。体部は内側して立ち上がる。口縁部分は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナギ。体部外側へクソリ後、ヘラ削り、内面ヘタナギ。普通	長石・石英・雲母・赤 色較了、褐色	20% PL20
117	壺 十脚器	A [22.9] B [11.3]	体部下底から口縁部分。体部は内側して立ち上がる。口縁部分は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナギ。	長石・石英・雲母・赤 色較了、褐色	10%
118	壺 須恵器	A 13.1 B 3.8 C 8.3	体部一部欠損。体部は外傾して立ち上がり。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面クロロナギ。 体部下端手持ちヘラ削り。底部一方のヘラ削り。	灰岩・石英・雲母 灰褐色 普通	80% PL20
119	高台付耳 須恵器	A [16.2] B 6.9 C [11.7] D 1.7	高台部から口縁部分。底部と体部の縁は柱をもじ彎曲する。体部は外傾して立ち上がり。口縁部に重る。高台はハの字状に曲く。	口縁部、体部内・外面クロロナギ。 底盤同軸へクソリ後、高台貼り付け。	長石・雲母 灰色 普通	45% PL20
120	壺 須恵器	A 14.7 B 2.9 C 3.1 D 1.2	天井部は平底で、腹部跡のつまみが付く。口縁部は折く彎曲していいる。	口縁部、外周内・外面クロロナギ。 天井部細軸ヘラ削り後、つまみ接合。	長石・石英 灰色 良好	100% PL20

第27号住居跡（第53図）

位置 調査A区の南東部、B 2c8区。

規模と平面形 長軸4.62m、短軸3.98mの長方形である。

主軸方向 N-7°-E

壁 壁高は45~60cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁の竈脇及び東壁下を除き巡っている。断面はU字形で、上幅15~25cm、下幅4~10cm、深さ7~10cmである。

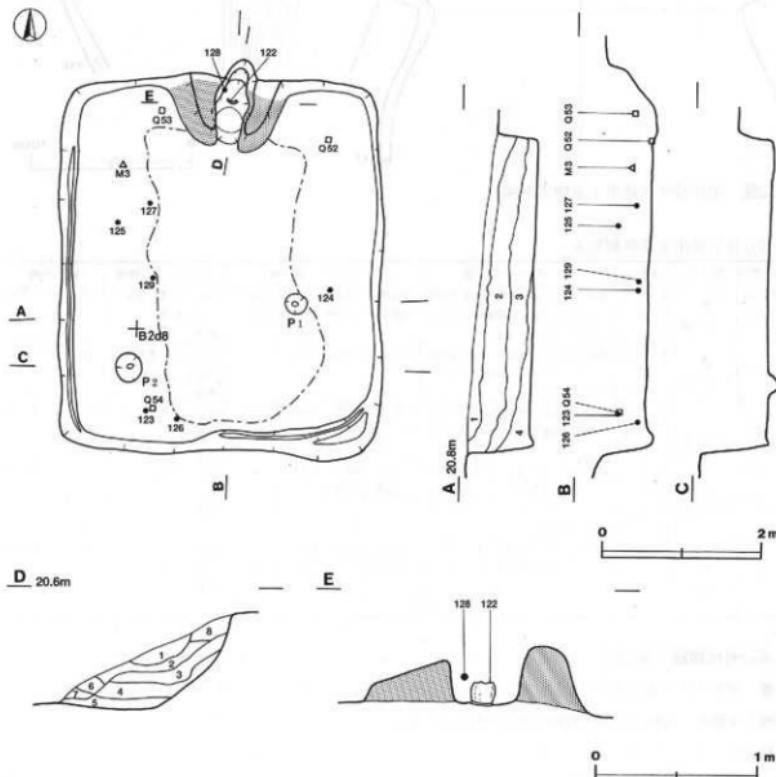
床 平坦である。竪菱口部の南側から中央部にかけて、特に踏み固められている。

ピット 2か所。(P 1・P 2)。P 1は径26cmの円形で、深さ15cmである。P 2は長径35cm、短径30cmの楕円形で、深さ16cmである。いずれも位置から主柱穴と思われる。

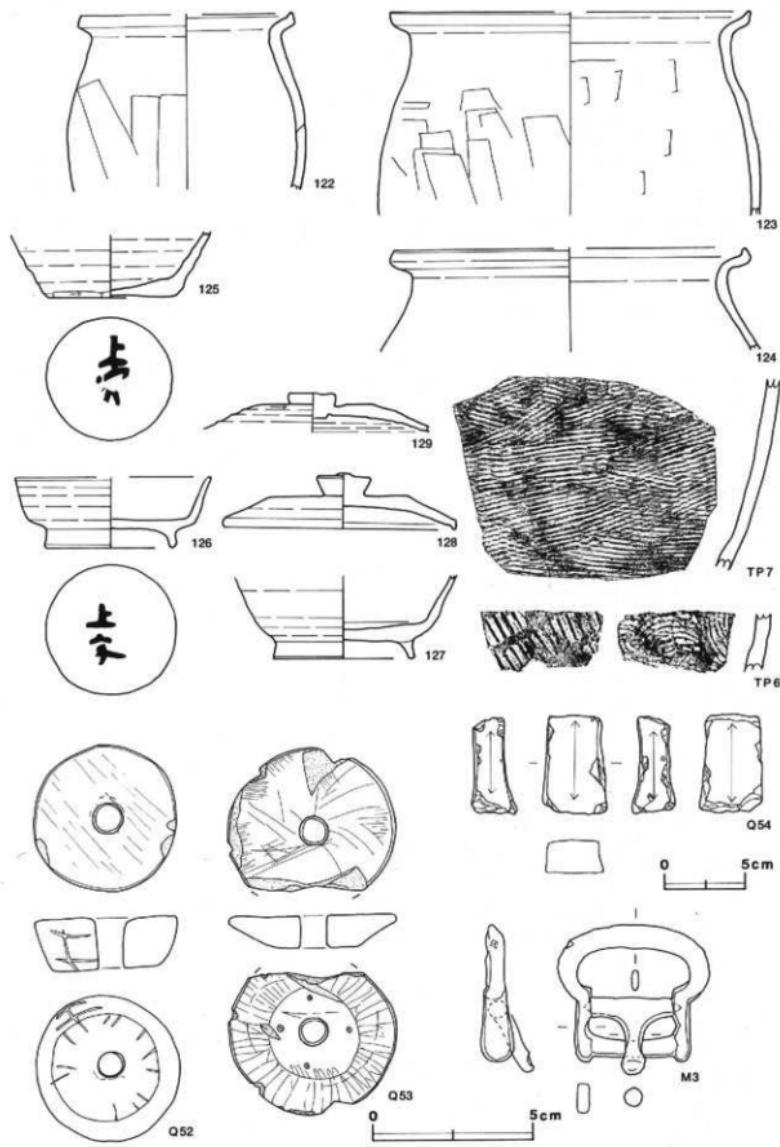
竈 北壁中央に付設されている。焚口部から煙道口部までの長さ108cm、両袖幅130cmで、壁外への掘り込みは24cmである。袖部は粘土と砂粒を混ぜて構築されている。火床部は、楕円形に6cmほど掘り込まれている。煙道は火床部から緩やかに立ち上がる。

道士解說

- | | |
|---------|------------------------------------|
| 1 こいひき色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 ぬい地色 | 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量、ローム小ブロック微量 |
| 3 赤茶地色 | 焼土小ブロック、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗赤茶色 | 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量、焼土中ブロック微量 |
| 5 暗赤茶色 | 焼土粒子少量、焼土小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量 |
| 6 こまき地色 | 焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量 |
| 7 暗赤茶色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、焼土中ブロック・炭化粒子微量 |
| 8 茶赤地色 | 焼土粒子・炭化粒子・炭化粒子微量、ローム粒子微量 |



第53図 第27号住居跡実測図



第54図 第27号住居跡出土遺物実測図

覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土器解説

- 1 赤褐色 ローム小プロック・ローム粒子・灰化粒子混在
- 2 灰褐色 ローム小プロック・ローム粒子・焼土粒子・灰化粒子混在
- 3 墓褐色 ローム小プロック・ローム小プロック・焼土粒子混在
- 4 青褐色 ローム小プロック・ローム粒子・焼土粒子混在

遺物 士師及び小破片654点、須恵器及び小破片154点、石製鍛錘車2点、鐵石1点、鉄具1点が出土している。第54回122~124は上師器で、125~129は須恵器である。覆土中層では、123の蓋が南西コーナー部から壊れた状態で、125の坏が中央部から正位の状態で、Q54の低石が南西コーナー部から出土している。覆土下層では、124の蓋が中央部から横位の状態で、126の高台付坏が南壁際から正位の状態で、127の高台付坏が中央部から正位の状態で、129の蓋が中央部から壊れた状態で、Q53の鍛錘車が窓孔袖部の西側から正位の状態で、M.3の鉄具が中央部から斜位の状態で出土している。床面では、Q52の鍛錘車が窓孔袖部の東側から正位の状態で出土している。室内では、122の小形甕が火床部の中央から逆位の状態で、128の蓋が火床面から壊れた状態で出土している。

所見 本跡からは、底部に「上家」と墨書きされた土器が2点出土しており、第2・10号住居からも同様の墨書き土器が出土している。器種は、須恵器の坏と高台付坏で類似している。時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。

第27号住跡出土遺物観察表

回収番号	器種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	備 考
第54回 122	小形甕 土師器	A [13.2]	体部上段から口縁部断片。体部は内唇して立ち上がる。口縁端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外周ヘラナデ。内面ナデ。	長石・雲母・赤色粒子 に赤い褐色	40% PL29
		B [10.9]			普通	
123	甕 上師器	A [22.6]	体部上段から口縁部断片。体部は内唇して立ち上がる。口縁端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	長石・雲母・赤色粒子 に赤い褐色	20% PL29
		H [12.7]			普通	
124	甕 上師器	A [22.0]	口縁部断片。口縁端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・赤色粒子 に赤い褐色	5%
		B [6.4]			普通	
125	坏 須恵器	B [4.0]	口縁部欠損。底部は外傾して立ち上がる。	口縁部。体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちウラ削り。底部多方向のヘラ削り。	長石・石英・雲母 暗灰褐色	60% PL29 底部外側墨書き上家
		C 7.9			普通	
126	高台付坏 須恵器	A [12.4]	口縁部一部欠損。底部と体部の境は縦をもち、屈曲する。体部は外傾して立ち上がる。高台はハの字形に聞く。	口縁部。体部内・外面ロクロナデ。底盤回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	長石・石英・雲母 灰色	60% PL29 底部外側墨書き上家
		B 4.5			普通	
127	高台付坏 須恵器	D 8.2				
		E 1.0				
128	盖 須恵器	F [5.2]	口縁部欠損。底部と体部の境は縦をもち、屈曲する。体部は外傾して立ち上がる。高台はハの字形に聞く。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	長石・雲母 黄褐色	60% PL29
		G 3.4			普通	
129	蓋 須恵器	H 3.3	口縁部は半円形で、蓋部は窓形で、蓋部は窓状のつまみが付く。	口縁部。外周内・外面ロクロナデ。天井部回転ヘラ削り後、つまみ板合。	長石・雲母・赤色粒子 暗灰褐色	70% PL29
		I 1.4			普通	
第54回 TP 6	蓋 須恵器	J [2.5]	口縁部欠損。天井部は笠形で、蓋部は窓状のつまみが付く。	外周内・外面ロクロナデ。天井部回転ヘラ削り後、つまみ板合。	長石・雲母 黄褐色	60% PL29
		K 0.9			普通	

回収番号	器種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 標 の 特 徴	胎 土	備 考
第54回 TP 6	蓋 須恵器	B [3.5]	体部片。外周腹位の平行叩き、内面に同心円の当て具痕。	長石・白色粒子 灰色 普通	5% PL29

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴				胎土・色調・焼成	備考
			長径	短径	厚さ	底		
第54回 TP7	壺 須恵器	D (11.9)	壺部。外曲線位の平行母線。				長石・白色粒子 灰色 普通	10% PL23

図版番号	器種	計 測 値				石 質	特 殊	備 考
		徑 (cm)	厚さ (cm)	孔徑 (cm)	重量 (g)			
第54回Q33 Q34	結 鍋 重	4.4	1.6	0.9	45.6	滑 石	邊台形状 横面に「メ」の線刻	100% PL26
	結 鍋 平	5.2	1.0	0.8	(36.2)	滑 石	邊台形状 上面に放射状の線刻	80% PL26

図版番号	器種	計 測 値				石 質	特 殊	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第54回Q34	瓦 石	(6.2)	4.0	2.7	(81.6)	凝灰岩	剝片 4向使用	PL26

図版番号	器種	計 測 値				材 質	特 殊	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第54回3	鍛 具	4.6	4.7	1.0	36.2	鍛 鋼	鉄造鋼張り 横状にT字状の割鉄が付く	馬具か PL26

第28号住居跡（第55回）

位置 調査A区の南東部、B2e8区。

重複関係 第26号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸4.80m、短軸4.66mの方形である。

主軸方向 N-10°-E

壁 壁高は45~50cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 離左袖部の西側から南壁中央にかけて巡っている。断面はU字形で、上幅21~30cm、下幅7~15cm、深さ7~10cmである。

床 平坦である。竈焚口部の南側から中央部にかけて、特に踏み固められている。

ピット 4か所（P1~P4）。P1は二段掘り込みになっており、上段は長径72cm、短径49cmの楕円形で、深さ20cmである。下段は長径48cm、短径37cmの楕円形で、深さ48cmである。P2は長径57cm、短径45cmの楕円形で、深さ45cmである。いずれも位置及び配列から主柱穴と思われる。P3は長径50cm、短径40cmの楕円形、深さ48cmで、竈反対側の南壁際に位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P4は長径60cm、短径48cmの楕円形、深さ23cmで、竈前に位置し性格は不明である。

竈 北壁中央に付設されている。焚口部から煙道口部までの長さ118cm、両袖幅124cmで、壁外への掘り込みは38cmである。袖部は粘土と砂粒を混せて構築されている。火床部は、楕円形に6cmほど掘り込まれ、火熱を受け亦変硬化している。煙道は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 焚口袖舟 ローム小ブロック・ローム粒子・燒土粒子少量、燒土小ブロック・炭化粒子微量
- 2 灰化層 土・ローム粒子少量、ローム小ブロック・燒土粒子少量、燒土小ブロック・炭化粒子微量
- 3 灰化舟 燃土小ブロック・燒土粒子少量、ローム小ブロック・燒土粒子・燒土袖舟・炭化粒子微量
- 4 灰化舟 燃土粒子多量、燒土小ソロックリ亞、燒土小ブロック・炭化粒子少量、燒土大ブロック・炭化物微量
- 5 烧土袖舟 ローム小ブロック・ローム粒子・燒土中大ブロック・燒土小ブロック・燒土粒子・炭化物微量

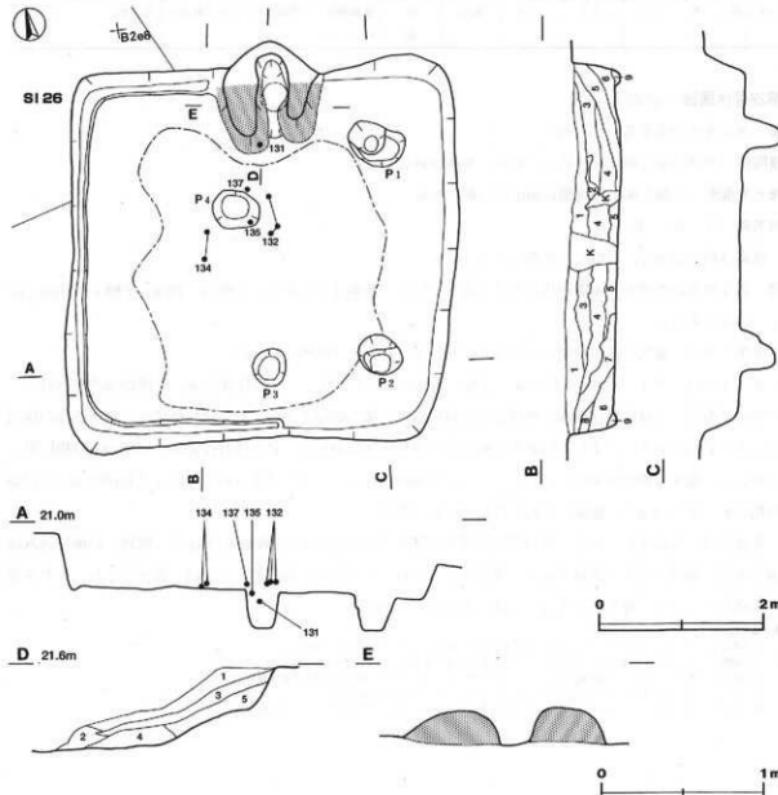
覆土 9層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

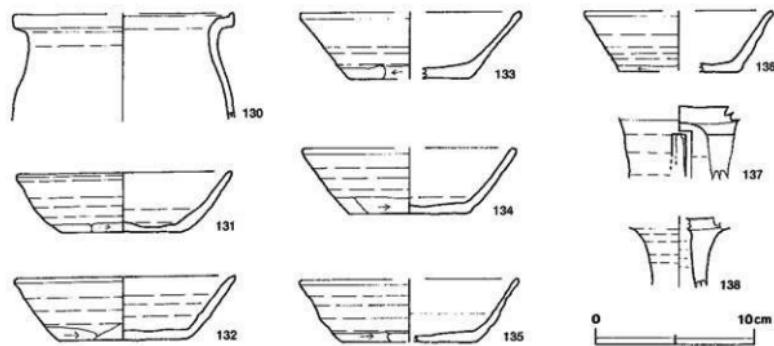
- 1 砂褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 浅褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 8 浅褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 9 黄褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック微量

遺物 土師器及びその小破片105点、須恵器及びその小破片35点、鉄滓23gが出土している。第56図130は土師器で、131～138は須恵器である。覆土下層では、132の壺が中央部から壊れた状態で、137の高盤の脚部がP4の北側から逆位の状態で出土している。床面では、134の壺が中央部から壊れた状態で出土している。135の壺は、P4の上層から出土している。竈内では、131の壺が左袖部に貼り付いた状態で出土している。その他にも覆土から、130の小形甕、133・136の壺、138の高盤の脚部、鉄滓が出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第55図 第28号住居跡実測図



第56図 第28号住居跡出土遺物実測図

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・地版	備考
第56図 130 七. 食器	壺	A (13.8) B (6.8)	体部上部から口縁部片。体部は内側して立ち上がりる。(口縁部は上方につまみ上げられている。)	口縁部内・外面糊ナデ。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	10%
131 壺	壺	A 13.4 B 3.9 C 7.3	体部から口縁部・底欠損。平底。体部は外側して立ち上がり、(口縁部に立てる。)	口縫部、体部内・外面ロクロナデ。 体部下端手持ちへラ削り後、底部一方向のへラ削り。	長石・石英・雲母 灰黄色 普通	P L20
132 壺 瓶 淵 器	壺	A 13.8 B 4.0 C 8.0	底部から口縁部片。平底。体部は外側して立ち上がり。(口縁部に立てる。)	口縫部、体部内・外面ロクロナデ。 体部下端手持ちへラ削り。底部一方向のへラ削り。	長石・石英・雲母 灰白色 普通	60% P L21
133 壺 瓶 淵 器	壺	A [13.8] B 4.2 C [7.6]	底部から口縁部片。体部は外側して立ち上がり、口縁部に立てる。	口縫部、体部内・外面ロクロナデ。 体部下端手持ちへラ削り。底部一方向のへラ削り。	長石・石英 暗灰黄色 普通	40% P L21
134 壺 瓶 淵 器	壺	A [13.2] B 4.2 C 7.6	底部から口縁部片。体部は外側して立ち上がり、口縁部に立てる。	口縫部、体部内・外面ロクロナデ。 体部下端手持ちへラ削り。底部一方向のへラ削り。	長石・石英 灰褐色 普通	40% P L21
135 壺 瓶 淵 器	壺	A [13.6] B 4.2 C [8.4]	底部から口縁部片。体部は外側して立ち上がり、口縁部に立てる。	口縫部、体部内・外面ロクロナデ。 体部下端手持ちへラ削り。底部一方向のへラ削り。	長石・石英 黄灰色 普通	30%
136 壺 瓶 淵 器	壺	A [11.8] B 3.8 C 7.6	口縫部一部欠損。体部は外側して立ち上がり、口縁部に立てる。	口縫部、体部内・外面ロクロナデ。 体部下端手持ちへラ削り。底部両脇へラ削り。	長石・石英・雲母 灰黃褐色 普通	20%
137 高 置 淵 器	高 置	B (4.6) E (3.7)	縫部の上部片。透かし孔が3方向に立ぐ。	縫部外面ロクロナデ。	長石・石英・雲母 灰白色 普通	10%
138 高 置 淵 器	高 置	B (4.5) E (3.8)	縫部の上部片。	縫部ロクロナデ。	長石・雲母 灰色 普通	5%

(2) ピット群

第1号ピット群 (第57図)

位置 調査A区の中央部、△2j2区。

規模 東西0.80m、南北0.90mの範囲に5か所のピットを確認した。ピットの平面形は、P 1・P 2・P 4・P 5はいずれも不整形で、深さ20~45cmである。P 3は径28cmの円形、深さ22cmである。P 1はP 2を掘り込んでいる。

覆土 いずれのピットも褐色あるいは暗褐色土主体で、ロームブロックが混じり、人為的に埋め戻されている。

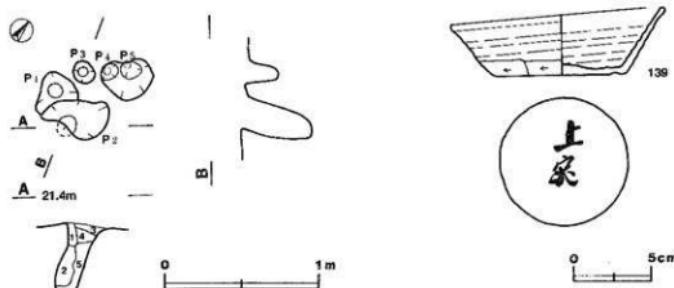
P 2 土層解説

1. 褐 色 ローム小ブロック少量
2. 黒 色 ローム粘子少量
3. 黄 色 ローム小ブロック中量。ローム粘子少量
4. 灰 色 ローム小ブロック少量
5. 白 色 ローム中ブロック少量。ローム小ブロック・ローム粘子少量

遺物 第57図139の須恵器の坏が、P 1 の覆土上層から壊れた状態で出土している。

所見 ピットの性格は、不明である。P 1 からは、底部に「上家」と墨書きされた須恵器の坏が出土している。

時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第57図 第1号ピット群・出土遺物実測図

第1号ピット群出土遺物観察表

回収番号	器種	可調質(㎤)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57回 139	坏 須恵器	A 13.8 B 4.3 C 8.1	口縁部・底欠損。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反す。 体部下段手持ちへラ削り。底部一方向のへラ削り。	口縁部・底内・外面ロクロチヂ。底部一方向のへラ削り。	長石・石英・雲母 灰白色 普通	80% P 1.2 東都跡御器屋「上家」

5 中世

中世の遺構としては、調査区域A区の中央部から土壤墓が1基、南部から塚1基が検出された。以下、検出された遺構の特徴や遺物について記載する。

(1) 土壙墓

第1号土壙墓 (第58図)

位置 調査A区の中央部、A 251区。

規模と平面形 径1.00mほどの円形で、深さ50cmである。

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 半坦である。

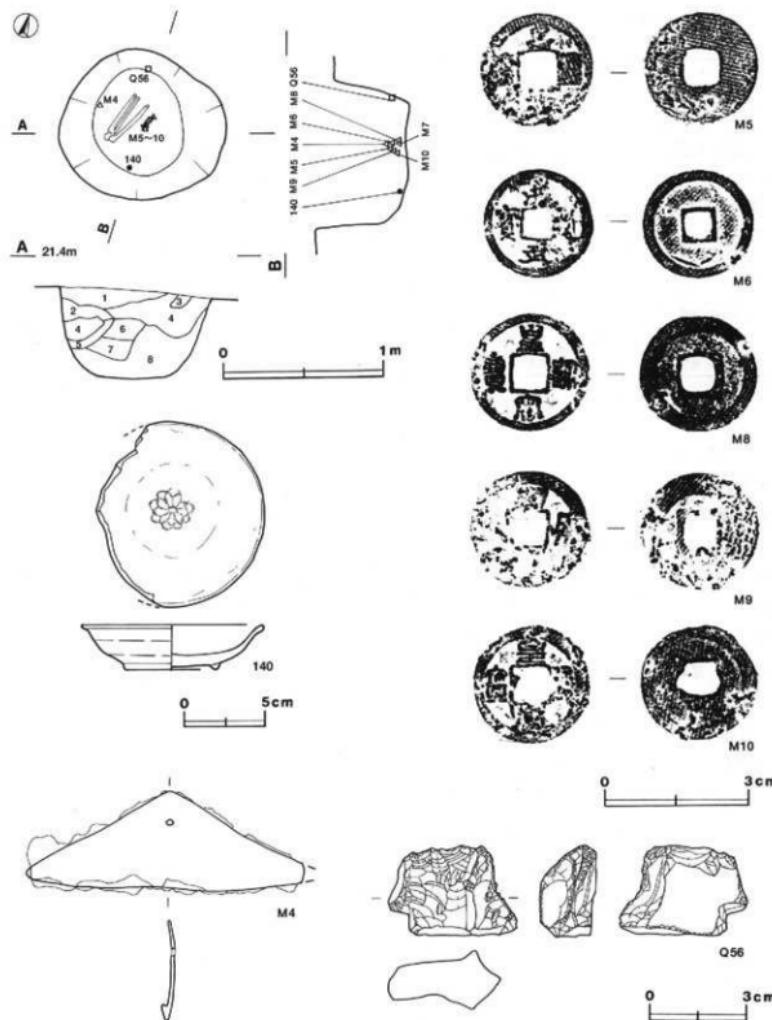
覆土 8層からなる。ロームブロック及びローム粘子を多量に含み、不自然な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

1. 黑 色 ローム中ブロック多量。ローム小ブロック・ローム粘子少量
2. 黑 色 ローム粘子少量。ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
3. 黄 色 ローム粘子少量
4. 灰 色 ローム小ブロック・ローム粘子中量。ローム中ブロック少量
5. 黑 色 ローム小ブロック・ローム粘子少量
6. 灰 色 ローム粘子少量。ローム小ブロック・ローム粘子微量
7. 灰 色 ローム中ブロック少量
8. 灰 色 ローム小ブロック・ローム粘子中量

遺物 人骨（頭部・大脚部など）1体分、陶器1点、火打石1点、火打金1点、古銭6枚が出土している。人骨は底面からで、他はいずれも覆土下層からの出土である。第58図140の小皿が南壁寄りから正位の状態で、Q56の火打石が北壁寄りから、M4の火打金が西壁寄りから横位の状態で、M5～M10の古銭が中央部の人骨上からまとめて出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から16世紀前葉と考えられる。



第58図 第1号土壤墓・出土遺物実測図

第1号土墳墓出土遺物観察表

図版番号	器 形	器 質	計 測 値 (cm)				胎 土 色 調	鉢付・桶座	支柱・特徴	墓地・年代	備 考
			A	B	D	E					
第59回 146	縦 反 電	陶 瓷	11.5	2.9	5.8	0.5	灰 白 色 浅 黄 色	灰 程	内面に印化 16C宿窯	瀬戸・美濃系 16C宿窯	P L20
図版番号			計 測 値				石 質	特 性		備 考	
第59回Q56	火 打 石	2.8	4.0	1.8	18.0	瑪 漆	2向使用				P L26
図版番号	器 形	材 質	計 測 値				特 性	備 考			
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)					
第59回M4	火 打 金	(8.6)	3.1	0.2	0.2	(19.4)	鉄	下縁に轟打の痕跡			P L26

回収番号	器 形	計 測 値			初 時 代		考
		様(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	直さ(cm)	時代	
第58回M5	小 明	2.4	0.1	0.7×0.7	2.5	不明	不明
M6	洪武通寶	2.3	0.	0.6×0.6	3.5	明	洪武元年(1368年)
M7	不 明	[2.5]	0.1	[0.7×0.7]	(2.3)	不明	不明
M8	草木通寶	2.5	0.1	0.7×0.7	2.5	北 宋	寶元元年(1038年)
M9	不 明	2.4	0.1	0.7×0.7	2.3	不明	不明
M10	草木通寶	2.5	0.1	[0.6×0.6]	(2.9)	北 宋	寶元元年(1038年)

(2) 塚

第1号塚 (第59回)

位置 調査区の南部、B 2bh4～B 2bh6区。

重複関係 本跡が、第1号住居跡、第3号上坑の上部に焼造されていることから、本跡が新しい。

規模と形状 基底面は、長径5.76m、短径5.42mのほぼ円形を呈し、現地表面から頂部までの高さは1.08mである。

長径方向 N-55° E

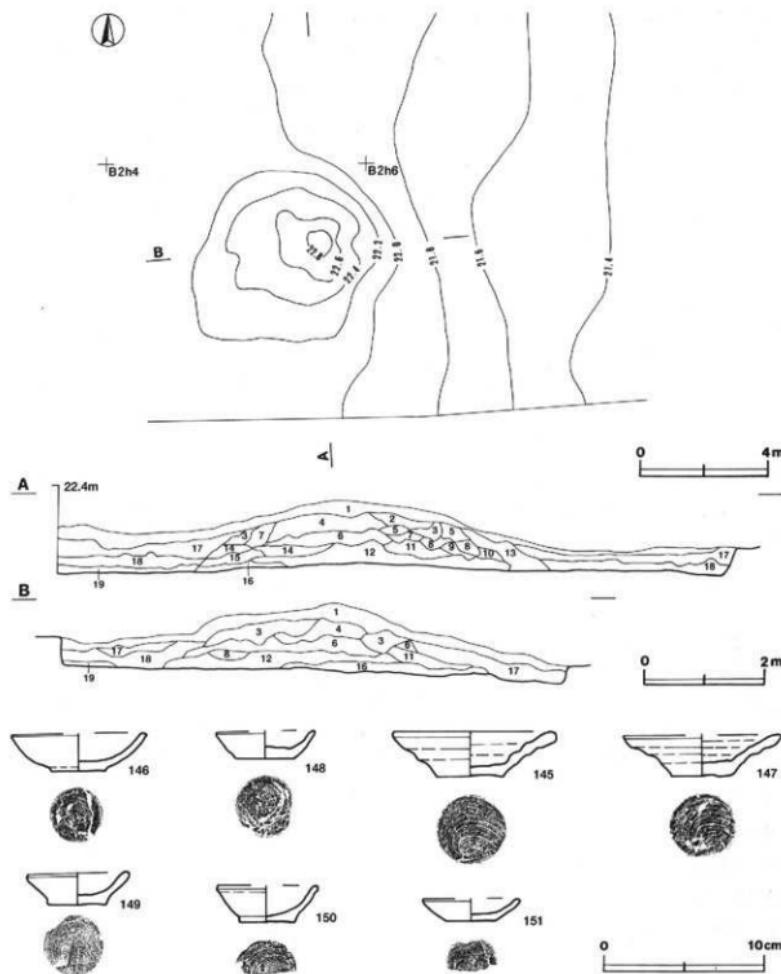
構成状況 基底部を旧地表面に置き、ローム中プロック・ローム小プロック・ローム粒子・炭化粒子を微量から中量含んだ暗褐色土や褐色土を裾部はプロック状、中央部はほぼ水平に盛土し、土段傾状である。粘性及びまりは弱い。

土層解説

1 水 上			12 細 細 色	ローム粒子少量、ローム小プロック少量、ローム小プロック・灰化粒子微量
2 粘 黄 色	セメント付少量、ローム小プロック・炭化粒子微量		13 細 黄 色	ローム粒子少、炭化粒子微量、ローム小プロック微量
3 黄 黄 色	ローム粒子少、ローム小プロック微量、炭化粒子微量		14 細 黄 色	ローム中プロック少、ローム小プロック・ローム粒子微量
4 黄 白 色	ローム粒子少、ローム小プロック微量、炭化粒子微量		15 細 黄 色	ローム小プロック、ローム粒子・炭化粒子微量、ローム小
5 黄 色	ローム小プロック・ローム粒子少、ローム中プロック微量		アリヤク微量	
6 黄 黄 色	ローム小プロック・ローム粒子微量		16 細 色	ローム小アリヤク・ローム粒子微量、ローム中プロック少
7 灰 白 色	ローム小アリヤク・ローム粒子微量、炭化粒子微量		17 細 粗 色	ローム小アリヤク・ローム粒子微量、炭化粒子微量
8 灰 黄 色	ローム粒子少、ローム中プロック・ローム小プロック微量		18 粗 色	ローム小アリヤク・ローム粒子微量
9 灰 黄 色	ローム小プロック・ローム粒子微量、炭化粒子微量		19 粗 色	ローム小アリヤク・ローム粒子微量
10 灰 黄 色	ローム粒子微量、ローム小アリヤク・炭化粒子微量			
11 粗 黄 色	ローム粒子微量、ローム小アリヤク微量			

遺物 十師賀土器及びその小破片10点、土師器1250点、須恵器片34点、繩文土器片9点が出土している。第59回145～151は土師賀土器の小皿で、いずれも盤上の下層及び中層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から16世紀後半と考えられる。



第59図 第1号塚出土遺物実測図

第1号塚出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第59図 145	小皿 土器質土器	A 9.9 B 2.8 C 4.0	口縁部一部欠損。平底。体部は外方に大きく開き、口縁部に至る。	体部内・外面クロナデ。底部回転糸切り。	良石・石英・赤色粒子 にぶい褐色 普通	50% PL21
146	小皿 土器質土器	A [8.4] B 2.4 C 3.2	口縁部一部欠損。平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面ナデ。底部回転糸切り。	良石・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	80% PL21

調査番号	部種	計測値(cm)	器物の特徴	手法の骨数	駆石・色調・焼成	備考
第59回 147	小 土器質土器	A [10.0]	底部から口縁部分。平底。体部は外方に大きく開き、口縁部に至る。	体部内・外面ナラ。底部周縁系切り。	長石・石英・赤色粒子 に赤い粒	30% PL2
		B 2.6				
		C 3.8				
148	小 土器質土器	A [6.2]	底部から口縁部分。平底。体部は外方に開き、口縁部に至る。	体部内・外面ナラ。底部周縁系切り。	長石・石英・青緑 に赤い粒	50%
		B 1.7				
		C 3.6				
149	小 土器質土器	A 6.4	体部・底欠損。平底。体部は外方に開き、口縁部に至る。	体部内・外面ナラ。底部周縁系切り。	長石・石英 に赤い粒	80% PL2
		B 2.1				
		C 3.8				
150	小 土器質土器	A [6.4]	底部から体部・底欠損。体部は外方に開き、口縁部に至る。	体部内・外面ナラ。底部周縁系切り。	長石・石英 に赤い粒	30% PL2
		B 2.3				
		C [3.4]				
151	小 土器質土器	A [6.0]	底部から体部・一部欠損。体部は外方に開き、口縁部に至る。	体部内・外面ナラ。底部周縁系切り。	長石・石英・赤色粒子 に赤い粒	50%
		B 1.4				
		C [3.0]				

6 その他の遺構

今回の調査で、時期及び性格不明な土坑58基、溝3条、不明遺構1基が検出された。以下、土坑及び溝については、実測図及び一覧表に記載する。

(1) 土坑（第83～85図）

今回の調査で、調査A区から60基、調査B区から1基の計61基の土坑が検出された。そのうち、縄文時代の炉穴1基、古墳時代の土坑1基、中世の土壙墓1基以外は、時期及び性格不明な土坑であり、ここでは、実測図及び一覧表で記載する。

(2) 溝（第63図・付図）

今回の調査で、調査A区から2条、調査B区から1条の計3条の溝が検出された。いずれも、遺物は細片で覆土からの出土であり、時期は限定できず、性格も不明である。よって、検出した溝については、断面図及び一覧表で記載し、配置や全体の形状については遺構全体図に掲載する。

(3) 不明遺構

第1号不明遺構（第64図）

位置 調査B区の北西部、D2f9区。

重複関係 第25号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 西壁際側が調査区域外にかかっている。長軸7.58m、確認できた短軸3.98mで、隅丸長方形と推定される。

長軸方向 N-8°-Eと推定される。

壁 壁高は8～12cmで、外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

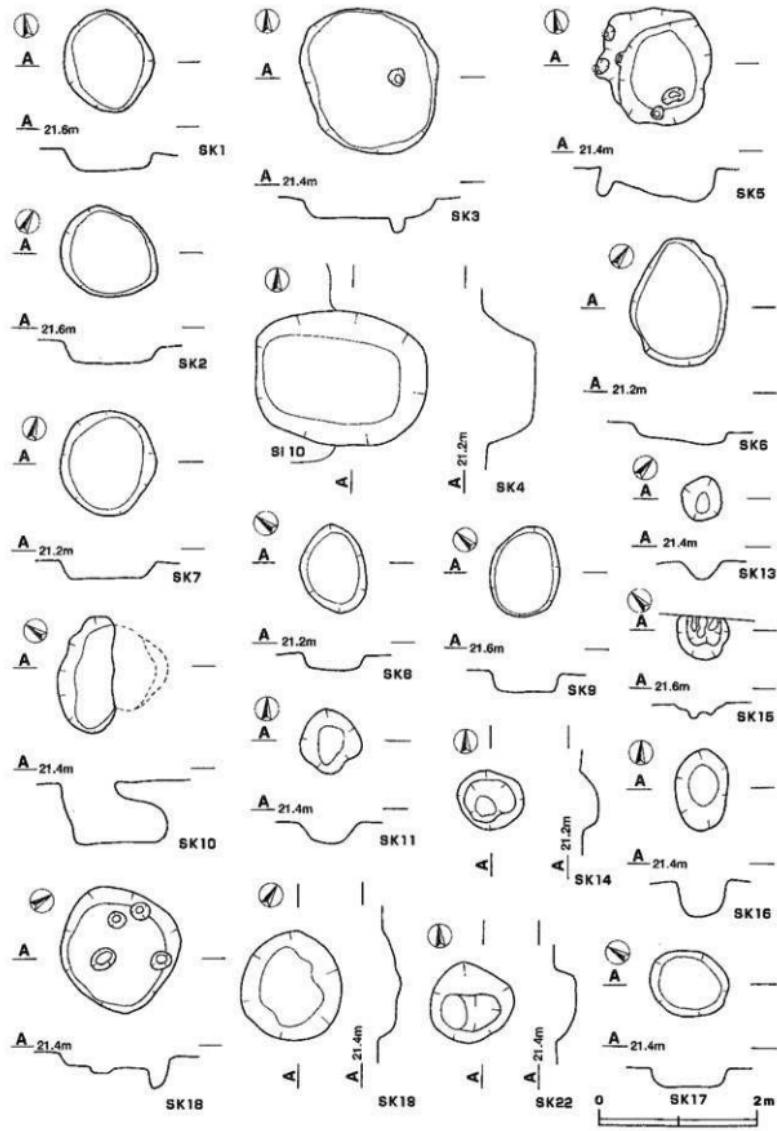
覆土 単一層で、自然堆積である。

土壤解説

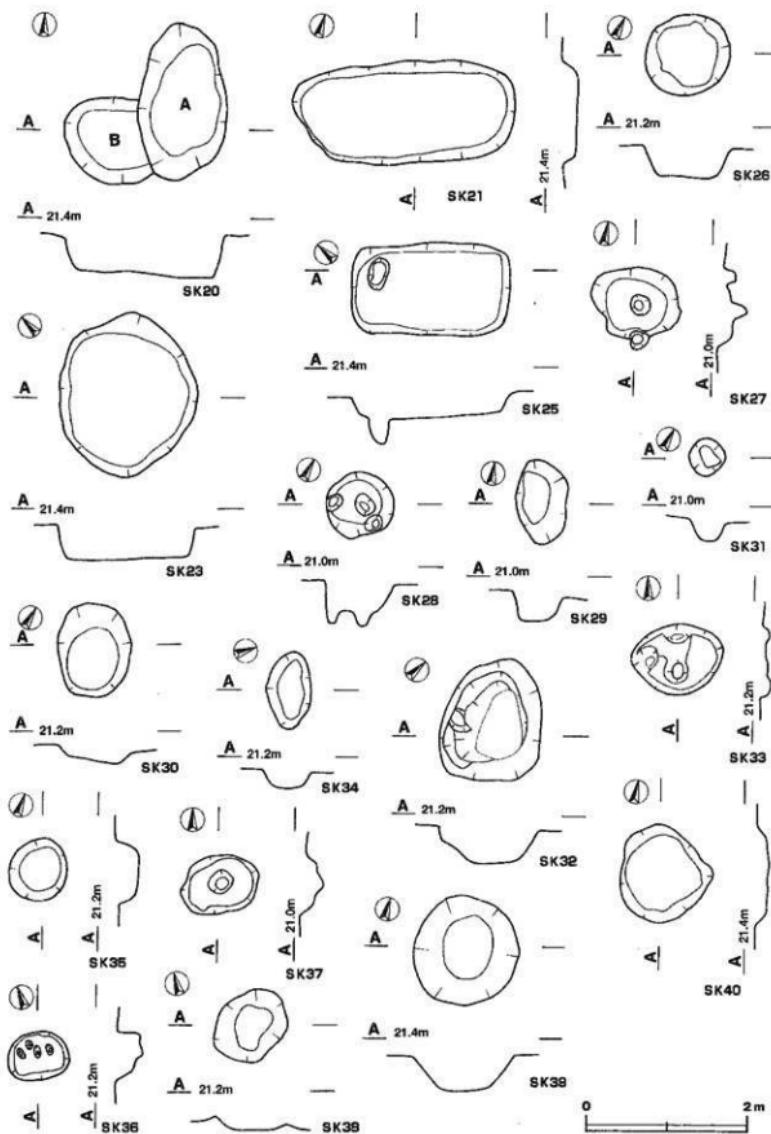
1 黒褐色 ハーム粒子少量、換土粒子少量、炭化物微量

遺物 土器器片1点が出上している。

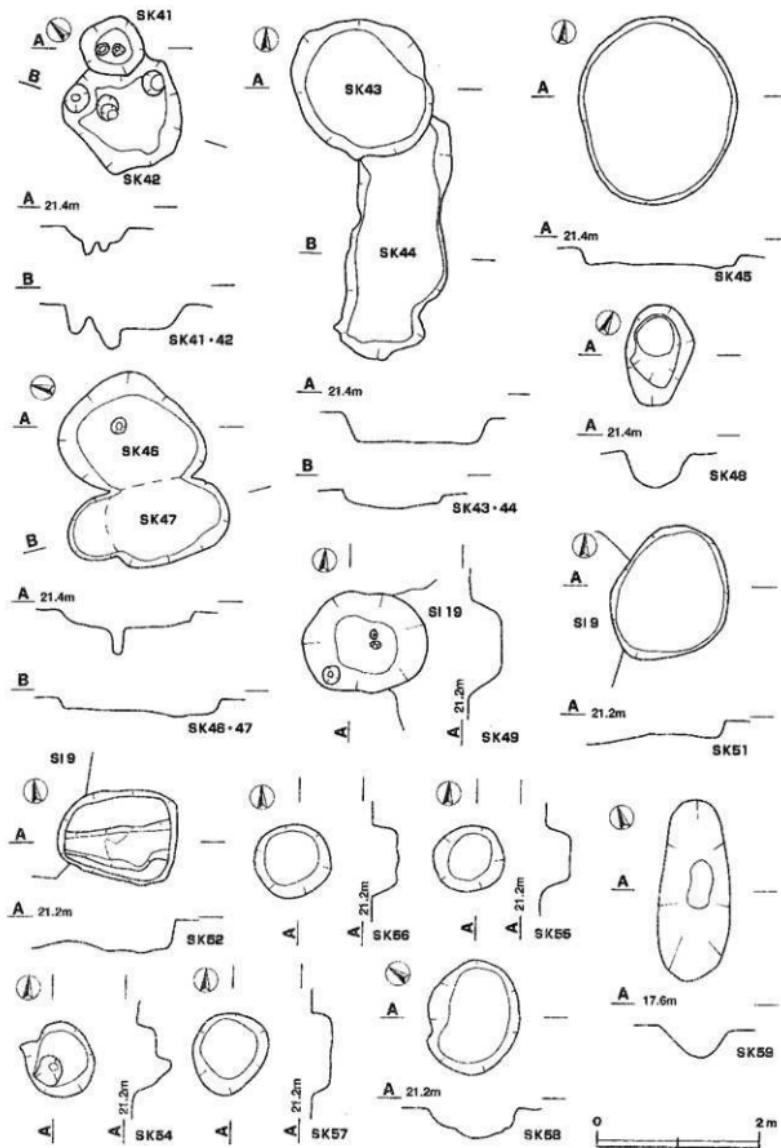
所見 本跡からは、出土遺物が1点のみであり、ピット及び窓等も検出されず、時期及び性格は不明である。



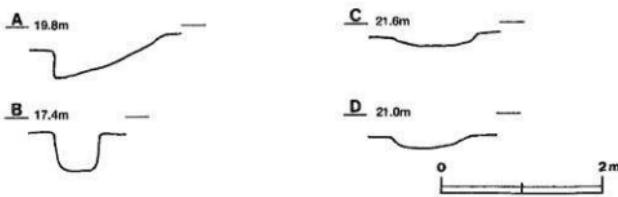
第60図 土坑実測図（1）



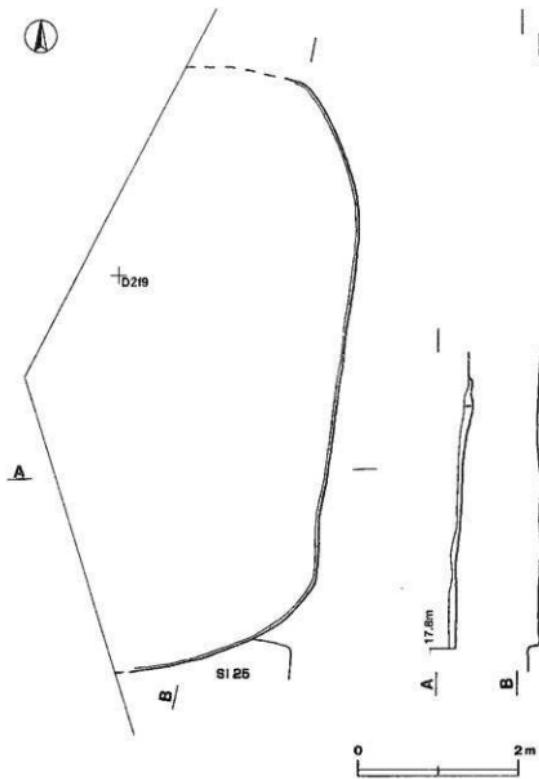
第61図 上坑実測図(2)



第62図 土坑実測図(3)



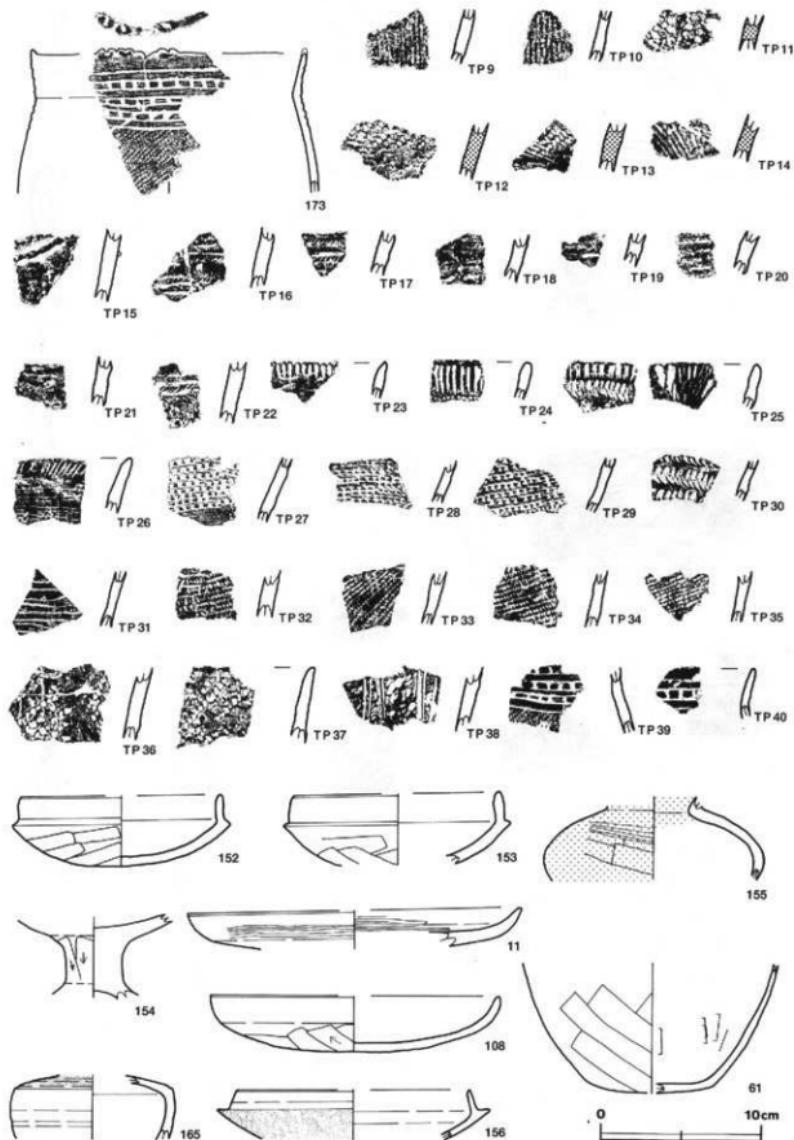
第63図 第1・2・3号溝実測図



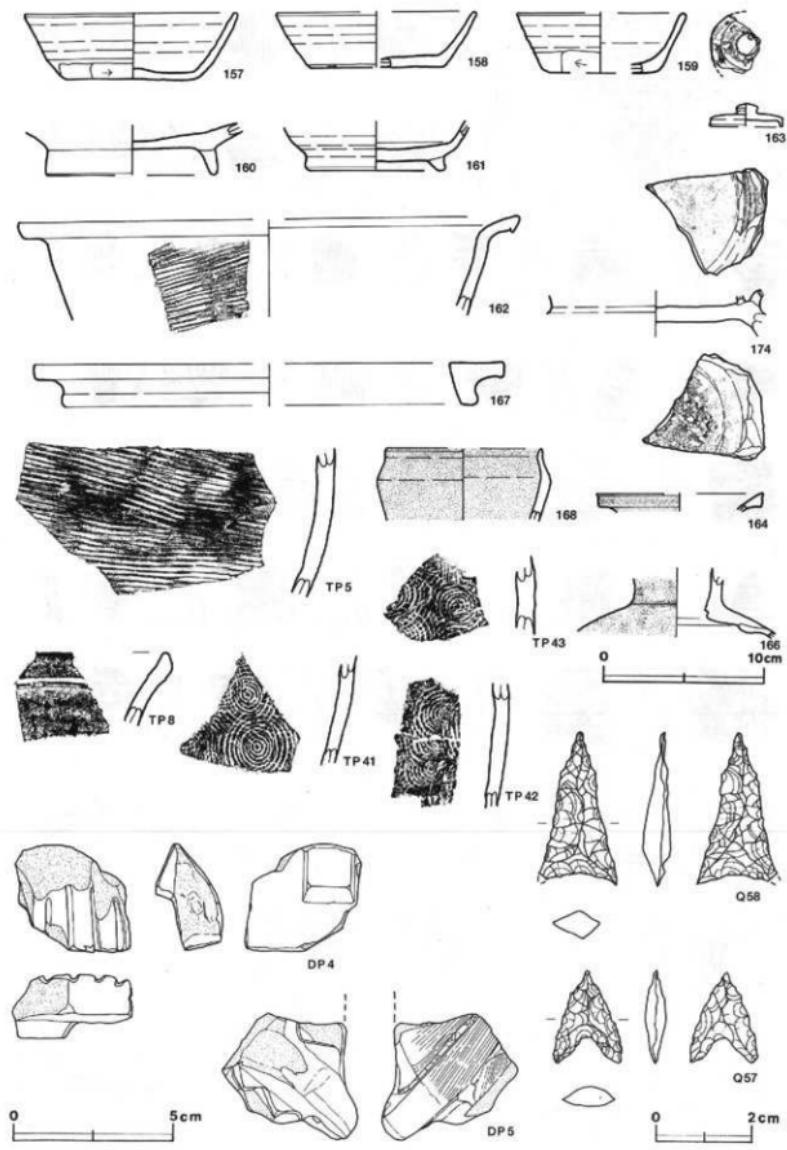
第64図 第1号不明遺構実測図

7 遺構外出土遺物

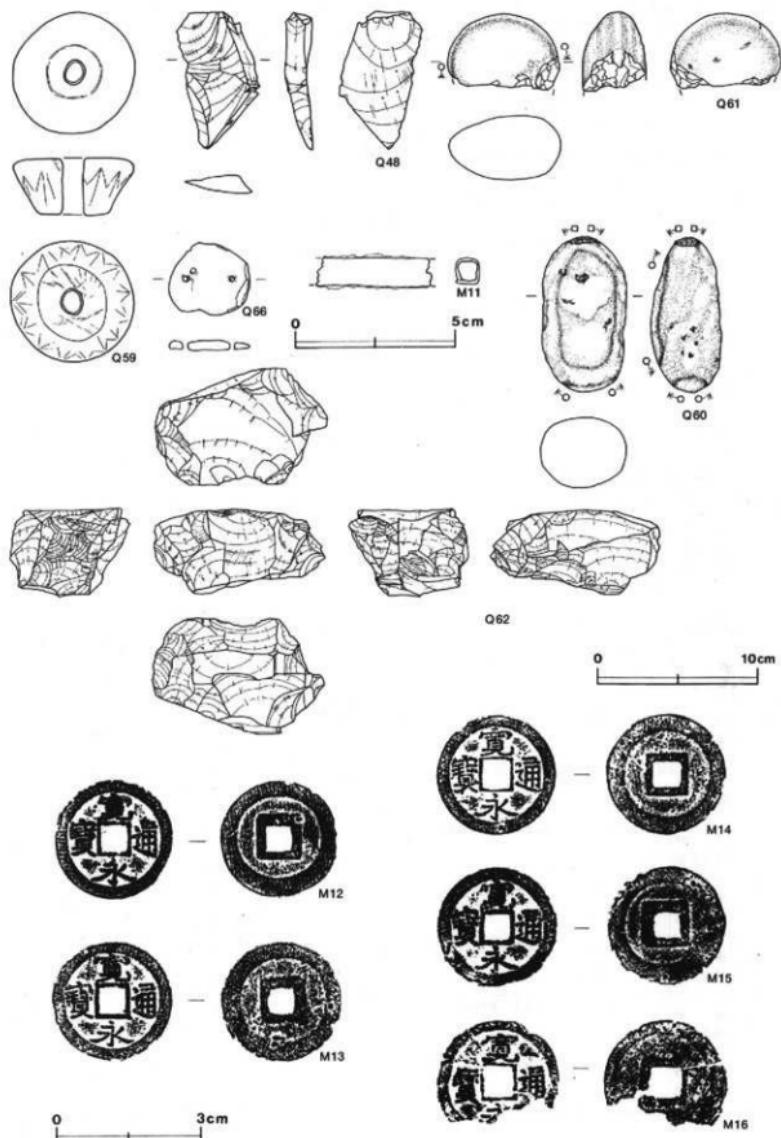
遺構外出土遺物は、試掘、表土除去、遺構確認の調査で出土した遺物である。ここでは、特色ある遺物を抽出し、実測図及び拓影図を掲載し、解説は一覧表等に記載した。



第65図 遺構外出土遺物実測図（1）



第66図 遺構外出土遺物実測図（2）



第67図 遺構外出土遺物実測図（3）

遺傳出土上遺物觀察表

回収番号	器種	大きさ(cm)	器形及び文様の特徴	釉上・色調・焼成	備考
第65回 173	深鉢 縦文土器	A (17.2) B (9.0)	U縁部から断面(口縁)。肩等山内押し、外側しながく断面に沿る。口縁部にB突起を有する。頂部から脚部止付にかけては、横窓の沈窓が施され、其窓内にはキザミが施されている。泥縫下には、S及び横縞文が施されている。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	10% PL23 (大断BC式)

回収番号	器種	大きさ(cm)	器形及び文様の特徴	釉上・色調・焼成	備考
第65回 TP9	深鉢 縦文土器	B (5.4)	脚部片。燃系文が施文されている。	長石 に赤い黄褐色 普通	5% PL23 (焼成式)
TP10	深鉢 縦文土器	B (3.2)	脚部片。燃系文が施文されている。	長石 に赤い黄褐色 普通	5% PL23 (焼成式)
TP11	深鉢 縦文土器	B (2.1)	脚部片。R.Lの単縞文が施文されている。	長石・鐵礫 に赤い黄褐色 普通	5% PL23 (焼成式)
TP12	深鉢 縦文土器	B (3.6)	軋部片。R.Lの単縞文が施文されている。	長石・鐵礫 に赤い黄褐色 普通	5% PL23 (焼成式)
TP13	深鉢 縦文土器	B (3.0)	脚部片。Rの単縞文が施文されている。	長石 に赤い赤褐色 普通	5% PL23 (焼成式)
TP14	深鉢 縦文土器	B (2.1)	脚部片。Rの単縞文が施文されている。	長石 に赤い赤褐色 普通	5% PL23 (焼成式)
TP15	深鉢 縦文土器	B (4.2)	脚部片。浮縞文上に縦文が施されている。	長石 に赤い橙色 普通	5% PL23 (焼成式)
TP16	深鉢 縦文土器	B (3.3)	脚部片。浮縞文上にキザミが施されている。	長石 に赤い赤褐色 普通	5% PL23 (焼成式)
TP17	深鉢 縦文土器	B (2.6)	脚部片。3条の浮縞文上にキザミが施されている。	長石 に赤い赤褐色 普通	5% PL23 (焼成式)
TP18	深鉢 縦文土器	B (3.0)	脚部片。浮縞文上にキザミが施されている。	長石・雲母 に赤い赤褐色 普通	5% PL23 (焼成式)
TP19	深鉢 縦文土器	B (2.0)	脚部片。浮縞文上にキザミが施されている。	長石 に赤い橙色 普通	5% (焼成式)
TP20	深鉢 縦文土器	B (2.5)	脚部片。浮縞文上にキザミが施されている。	長石・雲母 に赤い赤褐色 普通	5% PL23 (焼成式)
TP21	深鉢 縦文土器	B (2.7)	脚部片。浮縞文上にキザミが施されている。	長石・雲母 に赤い橙色 普通	5% PL23 (焼成式)
TP22	深鉢 縦文土器	B (3.8)	脚部片。3条の浮縞文上にキザミが施されている。	長石・雲母 に赤い橙色 普通	5% PL23 (焼成式)
TP23	深鉢 縦文土器	B (2.2)	U縁部片。口縁部に複合文が施されている。	長石・雲母 に赤い橙色 普通	5% PL23 (焼成式)
TP24	深鉢 縦文土器	B (2.2)	口縁片。口縁部に条縞文が施されている。	長石・雲母 に赤い橙色 普通	5% PL23 (焼成式)

国版番号	器種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 横 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備考
第65回 TP25	深鉢 縦文土器	B (2.8)	口縁部片。口縁部には無い条縞文が施されている。朱縞文直下には透焼系 文が施されている。	長石・黄母 に赤い褐色 普通	5% PL23 (横B式)
TP26	深鉢 縦文土器	B (3.4)	口縁部から脚部片。朝顔には模様の字形と沈縞文が施されている。(1)縫部に は扱い条縞文が施されている。	長石・石英・赤色粒子 に赤い褐色 普通	5% PL23 (横B式)
TP27	深鉢 縦文土器	B (3.9)	脚部片。半底各側による透焼条縞文が施されている。	長石・黄母 に赤い褐色 普通	5% PL23 (横B式)
TP28	深鉢 縦文土器	B (2.7)	脚部片。半底各側による透焼条縞文が施されている。	長石・黄母 に赤い褐色 普通	5% PL23 (横B式)
TP29	深鉢 縦文土器	B (3.3)	脚部片。半底各側による透焼条縞文が施されている。	長石・黄母 褐色 普通	5% PL23 (横B式)
TP30	深鉢 縦文土器	B (2.6)	脚部片。透焼条縞文が施されている。	長石・黄母 に赤い褐色 普通	5% PL23 (横B式)
TP31	深鉢 縦文土器	B (3.5)	脚部片。扱い平行沈縞文が施されている。	長石・黄母 明黄色 普通	5% PL23 (横B式)
TP32	深鉢 縦文土器	B (2.9)	脚部片。直前段合透焼文が施されている。	長石・石英・赤色粒子 に赤い褐色 普通	5% PL23 (深B合A)
TP33	深鉢 縦文土器	B (3.4)	脚部片。直前段合透焼文が施されている。	長石・石英・赤色粒子 に赤い褐色 普通	5% PL23 (深B合A)
TP34	深鉢 縦文土器	B (3.4)	脚部片。直前段合透焼文が施されている。	長石・石英・赤色粒子 に赤い褐色 普通	5% PL23 (深B合A)
TP35	深鉢 縦文土器	B (3.1)	脚部片。Lの無縞条縞文が施されている。	長石 に赤い褐色 普通	5% PL23 (深B合A)
TP36	深鉢 縦文土器	B (4.5)	脚部片。L Rの草節縞文が施されている。	長石・赤色粒子 に赤い褐色 普通	5% PL23 (深B合A)
TP37	深鉢 縦文土器	B (4.7)	脚部片。L Rの草節縞文が施されている。	長石・赤色粒子 に赤い褐色 普通	5% PL23 (深B合A)
TP38	深鉢 縦文土器	B (3.5)	脚部片。粗底上部。既往の条縞文が施されている。	長石・石英 に赤い褐色 普通	5% PL23 (既往B式)
TP39	深鉢 縦文土器	B (4.0)	腹部から脚部上位片。既往の沈縞が施され、区画内にはキザミが施されて いる。	長石・石英・紫母 灰褐色 普通	5% PL23 (既往B式)
TP40	深鉢 縦文土器	B (3.0)	底部から脚部上位片。模様の沈縞が施され、区画内にはキザミが施されて いる。	長石・石英・黄母 灰褐色 普通	5% PL23 (既往B式)

国版番号	器種	計測値(cm)	器 形 の 特 質	手 法 の 特 質	胎土・色調・焼成	備 考
第65回 152	坏土 鉢 瓶	A [12.4] B 4.4	体部から口縁部片。丸窓。体部は内 張して立ち上がり、口縁部との間に 明瞭な後をもつ。	口縁部内・外透焼ナダ。窓部、体部 外側へリ前引後ナダ。内面ナダ。 褐色 普通	長石・石英・赤色粒子 褐色 普通	50% PL23 (A1.2)
153	坏土 鉢 瓶	A [12.7] B (4.4)	体部から口縁部片。丸窓。体部は内 張して立ち上がり、口縁部との間に 明瞭な後をもつ。	口縁部内・外透焼ナダ。窓部、体部 外側へリ前引後ナダ。内面ナダ。 明黄色 普通	長石・石英 明黄色 普通	20%
155	用土 頭 瓶	B (5.3)	体部上半片。体部は扁平な算盤玉状 である。	体部外側へリ前引後。ヘラ削き。内 外白赤彩。	長石・石英 に赤い褐色 普通	20%

出典番号	器種	高さ(cm)	器 形 の 特徴	手 法 の 特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第65回 154	高 壺 七 菱 器	B (5.3) E (4.5)	脚部片。脚部はラッパ状に開く。	脚部外側へ削り。	石英・赤色粒子 褐色 普通	20% PL21
11	环 土 師 器	A [20.8] B (2.4)	体部から口縁部片。丸窓。体部は内 側して立ち上がり。口縁部に凹む。	口縁部外側削り。口縁部内面、体 部内・外側へタスク。	長石・石英 に赤い煙色 普通	10% PL21
108	环 土 罐 器	A [18.0] B 3.5	体部から口縁部片。丸窓。体部は内 側して立ち上がり。口縁部に凹む。	口縁部内・外側削り。体部外側へ タスク。	長石・石英・赤色粒子 に赤い煙色 普通	30% PL21
61	垂 上 鞘 刀	B (8.0) C [7.7]	底部から体部下伏せ。平底。体部は 内側して立ち上がる。	体部外側へタスク削りなし。内面へタ クス。	長石・石英 に赤い煙色 普通	40%
156	环 身 頭 忠 器	A [14.4] B (3.1)	体部から口縁部片。体部は内側して 立ち上がり。受部に平ら。受部は上 方に伸びる。	巻き上げ・ロクロ成形。立ち上がり 部内・外側ロクロナダ。体部外側自 然移行着。	白色粒子、灰色 (釉)灰オリーブ色 良好	10% PL21 6℃末～7℃前代
165	小 形 鞘 刀	B (4.0)	脚部片。体部は内側して立ち上がり。 右脚は茎をもつ。	体部内・外側ロクロナダ。外側自然 移行着。	白色粒子 灰色 良好	10% PL21
第66回 157	环 缶 痛 忠 器	A 13.2 B 4.3 C 7.9	口縁部と一部欠損。平底。体部は外側 して立ち上がり。口縁部に平ら。	口縁部、体部内・外側ロクロナダ。 体部下端手持ちへタスク削り。底部三方 向のタスク削り。	長石・石英・雲母 灰白色 普通	90% PL21
158	环 痛 忠 器	A [12.4] B 3.5 C [8.0]	底部から口縁部片。平底。体部は外 側して立ち上がり。口縁部に平ら。	口縁部、体部内・外側ロクロナダ。 体部下端脚部へタスク削り。底部内側 タスク削り。	長石・石英・雲母 灰色 普通	30%
159	环 忠 器	A [10.4] H 3.8 C [7.3]	底部から口縁部片。平底。体部は外 側して立ち上がり。口縁部に平ら。	口縁部、体部内・外側ロクロナダ。 体部下端手持ちへタスク削り。	長石 灰白色 普通	20%
160	高台付环 痛 忠 器	B (3.2) D [10.6] E 1.6	高台部から体部下平手。高台はハの 字状に開く。	体部内・外側ロクロナダ。底部凹部 へタスク削り。高台削り付け。	長石・石英・雲母 灰色 普通	30%
161	高台付环 痛 忠 器	D (3.1) E 8.3 F 1.0	高台部から体部下平手。高台はハの 字状に開く。	体部内・外側ロクロナダ。底部凹部 へタスク削り後。高台貼り付け。	長石・石英・雲母 灰色 普通	30%
162	鉢 痛 忠 器	A [31.4] B (6.1)	体部上部から口縁部片。体部は外側 して立ち上がり。口縁部は外反する。	口縁部内・外側削り。体部外側部 の平行削き。	長石・石英・雲母 灰色 普通	5%
174	円 直 痛 忠 器	A [13.2] B (2.9)	縦面部。脚部欠損。脚部は下方に 伸び、縦部と脚部の境に1条の沈線 が並ぶ。前面は平坦である。	腹面ナダ。縦面部彫刻、縦部強。脚 部削り付け。	長石・雲母、灰色 (釉)オーリーブ色 良好	10% PL21
166	長 鞘 忠 器	H (4.3)	体部下平から脚部片。脚部は外側し て立ち上がる。	脚部内面ロクロナダ。体部内側削 り。脚部、体部外側自然移行着。	長石・暗灰黄色 (釉)暗オリーブ 普通	10% PL21
164	長 鞘 忠 器 灰袖窓器	A [10.4] B (1.1)	口縁部片。口縁部は断面三角形。	外側削。	胎土: 灰白色 釉調: うす緑色 良好	5% 忠200号型式
163	蓋 三彩角器	A [4.6] B 1.4 C 1.4 G 0.6	つまみから口縁部片。天井部は平坦 で、先の沈線が溝り、ボタン状のつ まみが行く。口縁部は斜め折り返さ れている。	口縁部、外周内・外側ロクロナダ。	胎土: 浅黄褐色 釉調: オリーブ黄色 暗赤褐色 良好	30% PL21
168	天目茶碗 脚 若	A [9.6] B (4.5)	体部から口縁部片。体部は内側して 立ち上がり。口縁部はわずかに外反 する。	ロクロ成形。内・外側鉄輪。	胎土: 浅黄褐色 釉調: 黒褐色 良好	10% 6℃前代
167	露 茶 十脚貫十茶	A [29.4] B 2.6 C [25.6]	射口の跡を受ける部分は水平で。断 面形は逆字形である。	口縁部内・外側削ナダ。	石英・赤色粒子 に赤い煙色 普通	10% PL21

同版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴				胎土・色調・焼成	備考
第66回 TP 5	坐 須恵器	B (9.3)	体部片。外底機位の平行彫き。	長石・雲母 灰白色 普通	10%	PL23		
TP 8	坐 須恵器	B (1.6)	口縁部片。外唇に3本単位の壺背状工具による浅状文が施されている。	長石・雲母 灰白色 普通	3%	PL23		
TP 41	坐 須恵器	B (6.5)	体部片。外腹同心円の叩き。内面ナメ。	長石・雲母 灰白色 普通	5%	PL23		
TP 42	坐 須恵器	B (7.5)	体部片。外腹同心円の叩き。内面ナメ。	長石・雲母 灰白色 普通	5%	PL23		
TP 43	坐 須恵器	B (4.8)	体部片。外腹同心円の叩き。内面ナメ。	長石・雲母 灰白色 普通	5%	PL23		

同版番号	器種	計測値				特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第66回D4 瓦	塔	(3.3)	(3.6)	(2.0)	(16.4)	塔基部片	PL24
IP5	瓦	-	(3.9)	(3.0)	(33.6)	屋蓋部片	PL24

同版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第67回Q48	剪 石 片	4.3	2.6	0.9	5.6	墨 磨 石	薄子の擬長脚片	PL25
第67回Q51	行 繩	1.9	1.4	0.5	0.8	チャート	門脇加藤繩	PL26
Q58	石 繩	3.2	(1.6)	0.7	(1.9)	チャート	西京無名繩	PL26

同版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第67回Q59	粘 土 *	3.8	1.8	0.8	34.8	滑 石	逆台形状、模様に連続した「木」の線刻	PL26

同版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第67回Q60	鐵 石	9.2	5.4	4.9	334.5	安山岩	塊石状用	
Q61	磨 石	(4.9)	7.1	4.0	(168.8)	安山岩	側面使用	
Q62	石 桁	10.6	5.3	7.3	447.8	黒曜石	神津烏座	

同版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第67回Q66	灰孔口板	2.5	2.3	0.3	2.7	2.7	滑 石 孔が2つ空く	

同版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
他前回目	漆 瓷	全長(3.6)	0.8	0.8	(3.4)	鉛	腰沿部 大頭部欠損	

同版番号	器種	計測値				時代	年 号 (西暦)	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第67回Q12	立水通寶	2.4	0.1	0.5×0.5	3.9	江戸	寛永13年(1636年)	
Q13	實水通寶	2.5	0.1	0.6×0.6	3.6	江戸	寛永13年(1636年)	

国版番号	器種	計測値				初鑄年			備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	時代	年号(西暦)	備考	
2679M11	寛永通寶	2.5	0.1	0.6×0.6	4.6	江戸	寛永13年(1636年)		
M15	寛永通寶	2.4	0.1	0.5×0.5	3.4	江戸	寛永13年(1636年)		
M16	寛永通寶	2.5	0.1	0.6×0.6	(1.7)	江戸	寛永13年(1636年)		

表2 壓穴住居跡一覧表

住居 番号	位置	南北向 (東西方向)	表面形 面積×幅 (cm)	床面 面積×幅 (cm)	内部施設				出土遺物	備考 参考関係(古・新)	
					吹抜	土柱	人柱	壁・柱 柱穴			
1	B25	N-82°E	長方形	3.8×2.9	8~36 平坦	一部	1	-	1 1	自然	古墳時代中期 骨器
2	B23	N-72°E	長方形	0.8×1.6	35~39 平坦	一部	2	龜	- 水槽 1 人為	古墳時代後期 骨器、漆器、瓦片等	
3	B25	N-15°W	長方形	4.2×3.0	27~35 平坦	一部	3	- 龜	1 - 人為	9世紀後葉 骨器、漆器、瓦片等	
4	B26	N-15°E	楕円形	1.8×1.5	- 平坦	-	6	- 龜	8 2 -	古墳時代後葉 陶瓦等、石器	
5	B26	N-32°W	長方形	1.3×1.3	6~10 平坦	一部	4	- 龜	2 3 1 人為	9世紀後葉 骨器、漆器、瓦片等	
6	B16	N-67°E	長方形	1.0×0.8	- 平坦	-	2	- 1龜 1	- 2 -	平安時代 骨器	
7	B25	N-20°E	方形	2.8×2.8	24~30 平坦	一部	2	1 龜 Z	1 - 人為	9世紀後葉 骨器、漆器、瓦片等	
8	B22	N-45°E	方形	1.8×1.5	12~15 平坦	-	2	1 龜	2 1 人為	8世紀後葉 骨器、漆器、瓦片等	
9	A24	N-17°E	方形容	1.5×1.3	35~39 平坦	-	4	1 龜	5 -	人為	9世紀後葉 骨器、漆器
10	B26	N-5°E	長方形	1.3×1.2	22~25 平坦 全周	-	1 龜	-	自然	9世紀後葉 骨器、漆器、瓦片等	
										解説	
11	A25	E-4°N	方形	1.2×1.2	46~50 平坦	一部	1	1 龜	-	人為	8世紀後葉 骨器、漆器
12	B22	E-22°N	方形	1.0×1.0	10~12 平坦	一部	2	1 龜	1 6 人為	7世紀後葉 骨器、漆器、瓦片等	
13	B26	N-65°W	方形	1.6×1.4	20~35 平坦 全周	1	- 龜	1 4 自然	9世紀後葉 骨器、漆器、瓦片等		
14	B22	不明	不明	不明	- 平坦	-	-	-	-	平安時代 骨器、漆器	
15	A23	-	円 形	5.0×5.0	平坦	-	16	- 龜 5	-	解説	
16	B26	E-25°N	長方形	1.8×2.0	21~30 平坦 全周	-	- 龜	-	自然	8世紀後葉 骨器、漆器、瓦片等	
17	A26	円 形	5.0×5.0	- 平坦	15	-	-	-	-	平安時代 骨器、漆器、瓦片等	
18	D26	[N-29°-L]	楕円形	1.0×0.8	- 平坦	-	14	-	1	-	解説
19	B26	N-4°E	方形	1.5×1.3	20~45 平坦	一部	2 龜	- 2 自然	-	9世紀後葉 骨器、漆器	
20	A25	-	円 形	1.0×1.0	- 平坦	-	11	-	1	-	平安時代 骨器、漆器、瓦片等
21	A26	[N-45°-R]	楕円形	1.0×1.0	12~16 平坦	-	9	-	7	自然	8世紀後葉 漆器、骨器
22	A24	-	円 形	1.0×1.0	- 平坦	-	11	-	6	-	平安時代 漆器、骨器
23	B26	N-3°E	方形	1.0×1.0	25~35 平坦 全周	4	1 龜	7 1 人為	古墳時代後葉 骨器、漆器、瓦片等		
										解説	
24	B26	N-25°W	楕円形	1.8×1.8	7~12 平坦	-	11	- 灰	4 人為	古墳時代後葉 漆器、骨器、石器	
25	D26	N-65°E	長方形	1.0×0.8	28~32 平坦	-	- 龜	-	自然	古墳時代後葉 骨器	
26	B26	N-65°E	方形	1.0×1.0	36~50 平坦	-	4 龜	- 人為	古墳時代後葉 骨器、漆器、瓦片等		
										解説	
27	B26	R-7°N	長方形	1.8×1.8	45~60 平坦	一部	2 龜	-	自然	9世紀後葉 骨器、漆器、瓦片等	
28	B26	E-10°E	円 形	1.0×1.0	45~50 平坦	一部	2 1 龜	- 1 自然	9世紀後葉 骨器、漆器、瓦片等		

表3 土坑一览表

土壤 番号	位置	反轴方向 (长径方向)	平面形	横 幅		深さ (m)	坡面	底面	板土	内土造物	備考 重複關係(古→新)
				長軸(幅)×短軸(幅) (m)	(cm)						
1	B2gl	N-6°-W	椭円形	1.30 × 1.06	26	緩	斜	平	坦	自然	
2	B2g2	N-82°-W	椭円形	1.28 × 1.10	25	外	傾	平	坦	自然	
3	B2g3	N-26°-W	椭円形	1.94 × 1.62	24	緩	斜	平	坦	自然	
4	B2g5	N-77°-W	椭円形	2.17 × 1.69	60	外	傾	平	坦	自然	上部器、須恵器
5	B2g6	N-30°-W	不定形	1.61 × 1.40	40	外	傾	平	坦	人為	土師器、須恵器
6	A2i7	N-41°-W	椭円形	1.61 × 1.24	16	緩	斜	平	坦	自然	上部器
7	A2i8	N-11°-W	椭円形	1.33 × 1.19	23	緩	斜	平	坦	自然	
8	A2i5	N-44°-E	椭円形	1.11 × 0.82	20	外	傾	平	坦	自然	
9	B2a2	N-58°-E	椭円形	1.13 × 0.87	25	外	傾	平	坦	人為	
10	B1i9	N-52°-E	不定形	1.46 × 1.33	76	?火灰	平	坦	人為		
11	A2j2	-	円形	0.81 × 0.75	25	緩	斜	圓狀	自然		
13	B2a3	-	円形	0.58 × 0.52	24	緩	斜	平	坦	人為	S 1-18・本跡
14	A1i6	-	円形	0.80 × 0.77	21	緩	斜	圓狀	自然		
15	A1g8	[N-50°-E]	椭円形	0.65 × (0.53)	16	緩	斜	圓形	凸	自然	
16	A2j3	N-3°-E	椭円形	1.04 × 0.65	45	外	傾	直	狀	自然	S 1-15・本跡
17	A2g2	N-7°-E	椭円形	1.91 × 0.85	25	緩	斜	平	坦	自然	
18	A2g1	-	円形	1.62 × 1.50	18	緩	斜	平	坦	自然	
19	B2i1	-	円形	径 1.30	20	緩	斜	圓形	凸	人為	
20A	A2h3	N-2°-E	椭円形	1.97 × 1.00	50	緩	斜	平	坦	自然	上部器
20B	A2h2	[N-86°-W]	[椭円形]	1.10 × (0.96)	43	緩	斜	平	坦	自然	本跡→SK-203
21	A2g2	N-73°-E	椭円形	2.78 × 1.27	20	緩	斜	平	坦	自然	上部器、須恵器
22	A2i5	-	円形	徑 1.02	27	緩	斜	圓狀	人為		
23	A2g3	N-49°-E	椭円形	2.08 × 1.72	45	外	傾	平	坦	自然	
25	A2g1	N-42°-W	長方形	2.00 × 1.15	26	緩	斜	平	坦	人為	
26	A2i4	-	円形	径 1.05	37	緩	斜	平	坦	自然	
27	A2i4	N-75°-W	不定形	1.13 × 0.94	17	緩	斜	平	坦	自然	
28	A2i4	-	円形	径 0.85	38	緩	斜	平	坦	自然	
29	A2i4	N-23°-W	椭円形	1.98 × 0.63	35	緩	斜	平	坦	自然	
30	A2i3	N-35°-W	椭円形	1.19 × 0.92	15	緩	斜	平	坦	自然	上部器
31	A2g5	-	円形	徑 0.46	35	外	傾	直	狀	自然	上部器
32	A2g5	N-15°-W	椭円形	1.63 × 1.30	35	緩	斜	平	坦	自然	土師器
33	A2i5	N-84°-W	椭円形	1.13 × 0.90	10	緩	斜	圓形	凸	自然	
34	A2i2	N-63°-W	椭円形	1.00 × 0.56	22	緩	斜	平	坦	自然	
35	A2i1	-	円形	0.80 × 0.73	28	外	傾	平	坦	自然	
36	A2i1	N-54°-W	椭円形	0.76 × 0.63	24	外	傾	平	坦	自然	
37	A2i1	N-52°-E	椭円形	1.00 × 0.74	15	緩	斜	圓形	凸	自然	
38	A2g5	N-54°-E	椭円形	1.00 × 0.83	16	緩	斜	平	坦	自然	S 1-21・本跡
39	B2g5	-	円形	1.40 × 1.30	45	緩	斜	平	坦	自然	土師器
40	B2g4	-	円形	1.25 × 1.13	15	緩	斜	平	坦	自然	土師器
41	B2e5	-	円形	0.82 × 0.74	15	緩	斜	平	坦	自然	上部器
42	B2e6	N-17°-W	不定形	1.50 × 1.37	30	緩	斜	平	坦	人為	486・SK-41
43	B2e5	N-45°-W	椭円形	1.95 × 1.66	35	外	傾	平	坦	口	自然
44	B2g5	[N-2°-E]	[長方形]	(3.10) × 1.27	18	外	傾	平	坦	自然	上部器
45	B2e5	N-4°-W	椭円形	2.35 × 1.96	18	外	傾	平	坦	自然	不詳→SK-43
46	B2e5	[N-12°-W]	[椭円形]	1.81 × (1.41)	20	緩	斜	平	坦	自然	SK-47-4號

土壤 番号	位置 標記	長軸方向 (長径方向)	平面形	渠 槽		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 重複關係(古・新)
				長(延)轴×(屈)幅(m)	深さ(cm)					
47	B2e5	[N-24° E]	格円形	(1.52) × (1.04)	22	外傾平	直自然	土師器		SK 50・本跡・SK 46
48	B2e5	N-28° W	格円形	1.25 × 0.81	45	外傾直	弧状人為	土師器		
49	B2e6	N 73° W	格円形	1.50 × 1.25	40	外傾平	直自然			SI-19・本跡
50	B2e5	[N-24° E]	格円形	0.70 × (0.48)	12	外傾平	直自然			本跡・SK 47
51	A2j3	N-20° E	格円形	1.75 × 1.40	22	外傾平	直自然	土師器		SI-9・本跡
52	B2e5	N-47° W	格円形	1.46 × 1.25	42	外傾平	直自然			SI-9・本跡
54	B2j4	N 13° W	格円形	0.95 × 0.80	25	外傾平	直自然			
55	B2e5	-	円形	径 0.90	33	外傾平	直自然			
56	B2e5	-	円形	径 0.90	32	外傾平	直自然			
57	B2e6	N-2° W	格円形	1.01 × 0.94	27	緩斜平	直自然			
58	B2e5	N-60° E	格円形	1.44 × 1.13	38	外傾直	弧状人為			
59	D2e9	N 22° E	格円形	2.24 × 0.90	33	緩斜直	直自然			
60	B2e7	[N-7° E]	格円形	1.64 × (1.49)	57	外傾平	直人為			本跡・SI-23

表4 溝一覧表

唐 番号	位置	上輪方向	形状	渠 槽				断面	底面	方位	覆土	出土遺物	備 考 判斷依據
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)						
1	A2e1	N-70° E	直溝状	(3.85)	(1.26)	(0.55)	(26)	直方狀	平坦	西 → 東	自然		
2	D2e-52e4	N 87° W	直溝状	正四	0.50~0.60	0.30~0.40	48	J字狀	半圓	西 → 東	自然	土師器、瓦器等	
3	A1e6-A2e5	N 70° E	T字状	右H-左斜H	0.90~1.30	0.30~0.35	12	楕円状	半圓	右H→左H	自然	土師器、瓦器等	
		S-36° W		椭圆状				U字狀					

第4節 まとめ

今回の調査によって、当遺跡から旧石器集中地点1か所、縄文時代の堅穴住居跡8軒、炉穴1基、古墳時代の堅穴住居跡4軒、土坑1基、奈良・平安時代の堅穴住居跡16軒、ピット群1か所、中世の塚1基、土壙墓1基、時期及び性格不明の土坑58基、不明造構1基、溝3条を検出した。また、出土した遺物は、旧石器時代の石器から近世の古銭・鉄製品と多時期及び多種にわたっている。ここでは、主としてそれぞれの時期の検出した遺構と遺物について概要を述べ、まとめとする。

1 旧石器時代

調査区は、調査A区の北部及び中央部の標高21mの台地平坦部に立地する。当遺跡からは、ナイフ形石器を伴う石器集中地点1か所が確認された。以下、石器集中地点及び表面採集等で確認された石器について述べることにする。

今回の調査で出土した石器類を器種別に分類すると、剥片が25点で全体の55%を占める。次にナイフ形石器5点、石核5点、礫3点、サイドスクリイバー・握斧・チップ各1点ずつである。石材別に分類すると、貞岩が10点で全体の22%を占める。次にガラス質黒色安山岩8点、流紋岩7点、チャート6点、黒曜石6点（信州系3点、高原山産3点）、瑪瑙3点、ホルンフェルス3点、石英片岩1点、硬砂岩1点である。製品としての石器が少なく、剥片が多く出土していることから、石器製作跡と考えられる。

周辺遺跡では、小野川右岸で当遺跡の南西約2kmに所在する茅崎町大井五十塚古墳群内遺跡の前方後円墳の周溝内から継長の刃器が出土している。小野川左岸では、当遺跡の南東約3.5kmに所在する牛久市中久喜遺跡から、貞岩のナイフ形石器が出土している。当遺跡も含め石材としては、信州系及び高原山産の黒曜石があり、石器製作のため遠距地から石材を手に入れ使用していることから、他地域との密な関係があったと思われる。

2 縄文時代

当遺跡の周辺には、小野川及び稻荷川沿いに多数の縄文時代の遺跡が確認されている。

当遺跡では、調査A区の中央部から堅穴住居跡8軒、炉穴1基を検出した。遺構内からの出土遺物が少なく、時期決定ができるのは、第4・24号住居跡・第1号炉穴のみで、他は時期不明である。

- ・縄文時代早期前葉（夏鳥式期）……………第1号炉穴
- ・縄文時代前期後葉（興津式期）……………第4号住居跡
- ・縄文時代前期末～中期初頭（栗鳥台式期）……第24号住居跡

遺構に伴わない遺物で確認できた時期は、縄文時代前期前葉（黑浜式期）、前期後葉（諸磯毛式期）、後期中葉（加曾利B式期）、晩期前葉（大洞BC式期）である。その他、石器・敲石・磨石等が出土している。

周辺遺跡では、稻荷川沿いに縄文時代前期及び中期の遺跡が確認されている。小野川沿いでは、当遺跡を含め左岸に所在する馬場遺跡で前期、東山遺跡で早期、ヤツノト遺跡で後・晩期の遺構が検出されている。

当遺跡は、小野川の右岸に所在しており前述のように左岸も含め、継続的ではないものの、早期前葉から晩期前葉までの長い間、生活の場として利用されたことがうかがえる。

3 古墳時代

当遺跡の周辺では、小野川沿いに多数の古墳群及び集落跡が確認されている。特に、小野川左岸に多く見ら

れる。

当遺跡では、調査A区の南部から竪穴住居跡3軒、土坑1基、調査B区から竪穴住居跡1軒を検出した。

- ・5世紀後半……………第1号住居跡
- ・6世紀前半……………第26号住居跡
- ・6世紀末～7世紀初……………第23号住居跡
- ・7世紀代……………第25号住居跡

調査A区とB区は、直線距離で50mほど離れているが、両区とも台地の縁辺部から緩やかに傾斜する位置から検出されていることから、この時期の集落が營まれていたと考えられる。

周辺遺跡では、当遺跡から南西約2kmに所在する大井五十塙古墳群内遺跡で、前方後円墳2基、円墳9基以上が確認されており、そのうち5・8・10号墳が調査されている。時期は6世紀後半頃と考えられており、当遺跡で確認された集落との関係も考えられる。小野川左岸では、牛久市中久喜遺跡で古墳時代中・後期、馬場遺跡で中・後期、行人田遺跡で前期、東山遺跡で中期、ヤツノ上遺跡で中期、中下根遺跡で中期、西ノ原遺跡で中・後期、隼人山遺跡で中期の遺構が検出されている。

遺物としては、第2号住居跡から石製の勾玉2点、管1点が出土している。周辺の古墳との関係が考えられる。土器としては、6世紀末～7世紀初頭の須恵器壺身1点、7世紀代の須恵器小型壺1点が表面探集されている。

当遺跡は、前述のように古墳時代中期から後期まで継続的に集落が營まれたことがうかがえる。

4 奈良・平安時代

当遺跡のある小野川右岸では、当該期の遺跡は存在するものの未調査のものが多く、左岸では牛久市中久喜遺跡等で集落跡が確認されている。

当遺跡では、調査A区から竪穴住居跡16軒、ピット群1か所を検出した。今回の調査で検出された竪穴住居跡28軒中16軒がこの時期であり、当遺跡の中心となる時期でもある。時期は8世紀後葉から9世紀前葉の2期に分けることができる。

- I期（8世紀後葉）……………第2・8・11・16・19号住居跡
- II期（9世紀前葉）……………第3・5・7・9・10・12・13・27・28号住居跡
- 平安時代……………第6・14号住居跡

当遺跡を含む周辺地域は、平安時代中期に著された『和名類聚抄』の記載に見られる「常陸国河内郡河内郷」に含まれるものと推定されている。周辺遺跡では、小野川右岸については不明であるが、左岸では牛久市中久喜遺跡、馬場遺跡、東山遺跡、ヤツノ上遺跡、行人田遺跡、中下根遺跡、隼人山遺跡等で合計30軒ほど住居跡が検出されている。上記のことから、この時期には、古墳時代に継続的に集落が營まれていたことがうかがえる。以下、特徴ある遺構と遺物について述べてみたい。

（1）コーナー竈について

当遺跡からは、「コーナー竈」と呼ばれる住居のコーナー部に竈が付設された住居跡が5軒検出された。Ⅰ期の第2・8号住居跡では、南東コーナー部から検出された。Ⅱ期の第5号住居跡では、北西コーナー部から、第7・13号住居跡では、南東コーナー部から検出された。検出された5軒中4軒は、南東コーナー部に竈が付設されていた。住居跡の規模は、第19号住居跡が長軸4.80m、短軸4.66mと当遺跡の中では一番大型である。第13号住居跡は長軸4.43m、短軸4.02mとやや大型であるのに対し、他はいずれも長軸が3.50m前後、短軸が

3.00m前後であることから、小型の住居跡に「コーナー窓」が付設されているという特徴がある。

(2) 出入り口施設について

第11号住居跡において、南壁中央部から壁外へ張り出した階段が検出された。今回の調査では、階段はこの1軒のみであり注目される。階段はテラス状の硬化面2段を有している。

「出入り口施設」については、高橋泰子氏が下記のように4分類している。

- ・張り出しタイプ
- ・ステップタイプ
- ・階段タイプ（盛上）
- ・階段タイプ（張り出し）

上記の分類からすると、当遺跡から検出された第11号住居跡は、階段タイプ（張り出し）に当てはまる。

(3) 鋳治工房跡について

今回の調査で、鋳治工房跡は検出されなかつたが、調査A区の南西部を中心に第2・3・5・7・8・12・16号住居跡の7軒から鉄滓が検出された。第5・7号住居跡からは小片ではあるが羽口も出土している。時期は8世紀後葉から9世紀前葉である。出土した遺物から、当遺跡周辺に鋳治工房があった可能性が考えられる。

(4) 遺物について

今回の調査で、第5表のように14点の墨書き土器が出土した。「上家」8点、「×寺」2点、「上寺」1点、「馬方」1点、「扇方」1点、「上」1点である。その他、瓦塔片2点、灯明具として使用された壺5点（上師器4点、須恵器1点）、鉄鉢形土器2点（須恵器・上師器）が出土している。仏堂的な建物跡は検出されなかつたが、8世紀後葉の住居跡から出土した「×寺」の墨書き土器等から、8世紀後葉にはこの地に仏教信仰が浸透したものと思われ、村落内寺院の存在も考えられる。

その他特徴ある遺物としては、第27号住居跡から鉄製鉗具1点が出土している。その他、三彩陶器壺1点、須恵器円面鏡1点、灰釉陶器長頸瓶1点が表面採集されている。他地域との流通を考えるうえで興味深い遺物である。

表5 墨書き土器一覧表

番号	釋文	墨書き部位	器種	遺構番号	備考
1	馬方	底部外面	須恵器 壺	第23号住居跡	6世紀末～7世紀初 住居廃絶後の投棄
2	上家	底部外面	須恵器 壺	第2号住居跡	8世紀後葉
3	×寺	底部外面	須恵器 壺	◆	
4	×寺	底部外面	須恵器 壺	第3号住居跡	9世紀前葉
5	上家	底部外面 体部外面（横位）	須恵器 壺	第10号住居跡	9世紀前葉
6	上家	底部外面	須恵器 壺	◆	
7	上家	底部外面	須恵器 高台付壺	◆	
8	上家	底部外面	須恵器 盆	◆	
9	上	底部外面	須恵器 高台付壺	◆	
10	上寺	底部外面	須恵器 壺	第13号住居跡	9世紀中葉
11	馬方	底部外面	須恵器 壺	第16号住居跡	8世紀後葉
12	上家	底部外面	須恵器 壺	第27号住居跡	9世紀前葉
13	上家	底部外面	須恵器 高台付壺	◆	
14	上家	底部外面	須恵器 壺	第1号ピット群	8世紀後葉

5 中世

当遺跡の南西に約5.5kmの稲荷川沿いに、1396年に築城されたといわれている下岩崎泊崎城等がある。

当遺跡からは、土壙墓1基、塚1基が検出されている。時期はいずれも16世紀代である。第1号土壙墓からは人骨1体分、瀬戸・美濃系の瀬戸皿1点、火打金1点、火打石1点、古銭6枚が出土している。墓は1基のみの検出であるが、16世紀前葉には墓域として利用され、後半には信仰の対象とされた可能性が考えられる。

6 近世以降

当遺跡からは、遺構は検出されなかったが、古銭（寛永通寶）、煙管等の遺物が出土している。

以上まとめると、今回の調査で、旧石器時代から中世までの人々の生活の痕跡を確認することができた。旧石器時代及び縄文時代は狩猟の場として利用され、その後、古墳時代中期から後期にかけて小集落が形成されていたことがうかがえる。奈良・平安時代には大規模な集落が形成され、ピークを迎えたと思われる。9世紀中葉から15世紀後葉までは、人々の住んでいた形跡が見られなくなり、土壙墓が検出されたことから16世紀代前半には墓域として使用されていた可能性が考えられる。これらのことから、当遺跡は、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明した。

註

- 1) 茨城県教育財團「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(II) 中久喜遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告』第86集 1993年9月
- 2) 茨城県教育財團「牛久市北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(IV) 馬場遺跡 行人田遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告』第106集 1996年3月
- 3) 次城県教育財團「牛久市北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(III) 東山遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告』第101集 1995年3月
- 4) 茨城県教育財團「牛久市北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(I) ヤツノ上遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告』第81集 1993年3月
- 5) 2)に同じ
- 6) 茨城県教育財團「牛久東下根特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 中下根遺跡 西ノ原遺跡 华人山遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告』第113集 1996年6月
- 7) 6)に同じ
- 8) 6)に同じ
- 9) 高橋泰子「梯子以外の出入口施設 一出入口施設は梯子だけではない!」『土壁 別刊号』考古学を楽しむ会 1997年5月
高橋泰子「盛土施設の硬さ状況観察 一盛土を施す出入口施設の検討に向けてー」『土壁 第2号』考古学を楽しむ会 1998年5月

参考文献

- ・半崎村教育委員会『半崎村史』 1973年3月
- ・半崎町史編さん委員会『半崎町史』 1990年3月

写 真 図 版



下大井遺跡遠景



A区遺構確認状況

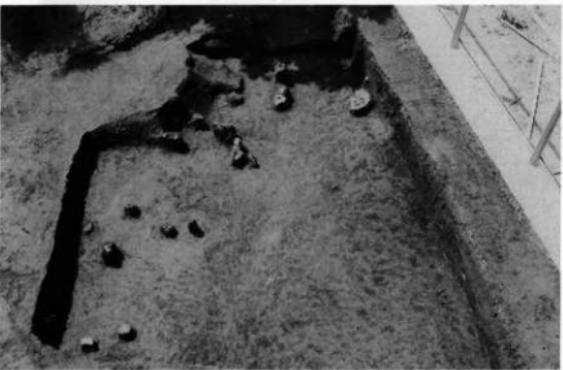
PL 2



第1号住居跡
遺物出土状況



第2号住居跡
完掘状況



第2号住居跡
遺物出土状況



第 2 号 住 居 跡
窓内遺物出土状況



第 3 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 3 号 住 居 跡
遺物出土状況

PL. 4



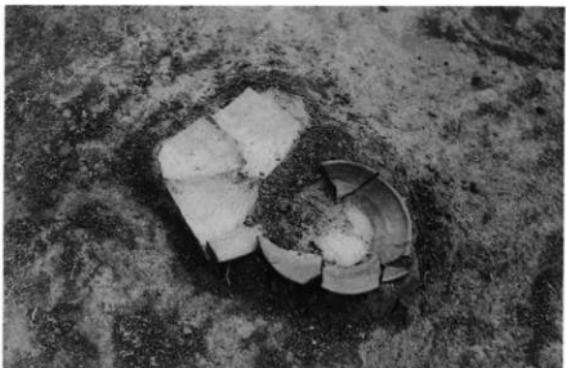
第3号住居跡
甕内遺物出土状況



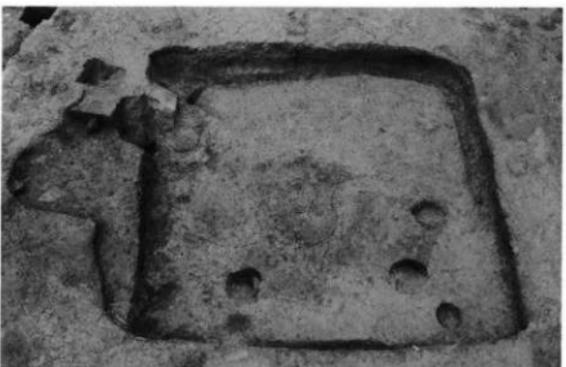
第4号住居跡
完掘状況



第5号住居跡
完掘状況



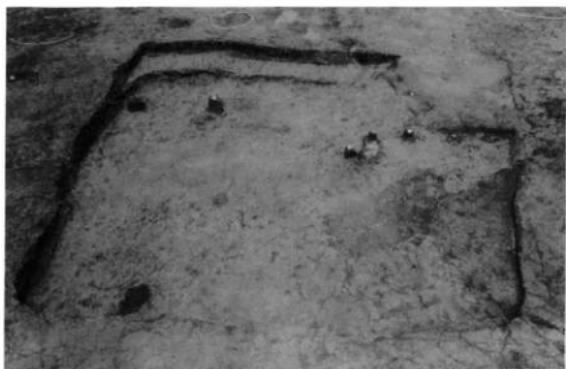
第 5 号住居跡
遺物出土状況



第 7 号住居跡
完 据 状 况



第 8 号住居跡
完 据 状 况



第8号住居跡
遺物出土状況



第9号住居跡
完掘状況



第9号住居跡
遺物出土状況



第9号住居跡
竈内遺物出土状況



第10号住居跡
遺物出土状況



第11号住居跡
完掘状況

PL 8



第 11 号 住 居 跡
出入り口施設完掘状況



第 11 号 住 居 跡
出入り口施設完掘状況



第12・13・14号住居跡
完 挖 状 況



第13号住居跡
遺物出土状況

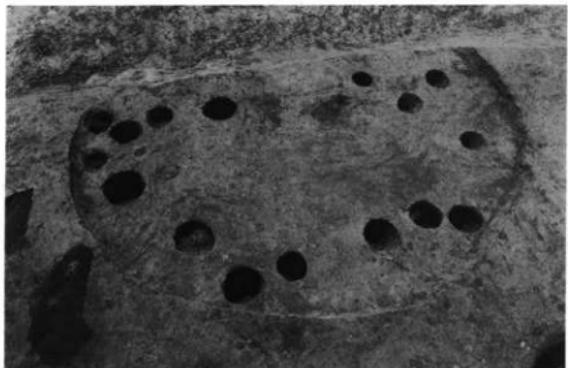


第16号住居跡
完掘状況

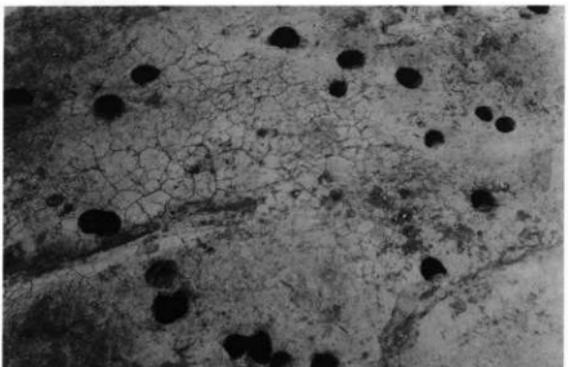


第16号住居跡
窓内遺物出土状況

PL10



第21号住居跡
完 売 状 況



第22号住居跡
完 売 状 況



第23号住居跡
遺 物 出 土 状 況

第26・27・28号住居跡
完 壊 状 況



第 27 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



第 27 号 住 居 跡
窓 内 遺 物 出 土 状 況



PL12



第28号住居跡
完掘状況



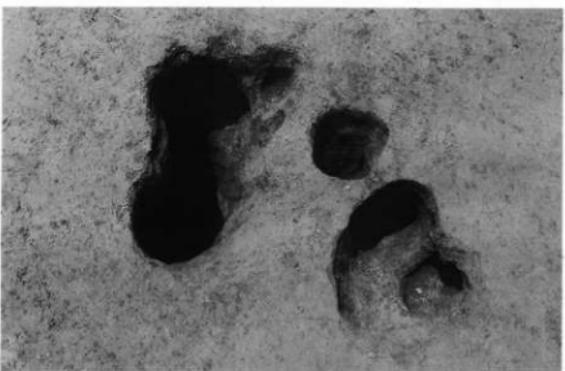
第28号住居跡
遺物出土状況



旧石器
グリット調査状況



旧石器出土状況



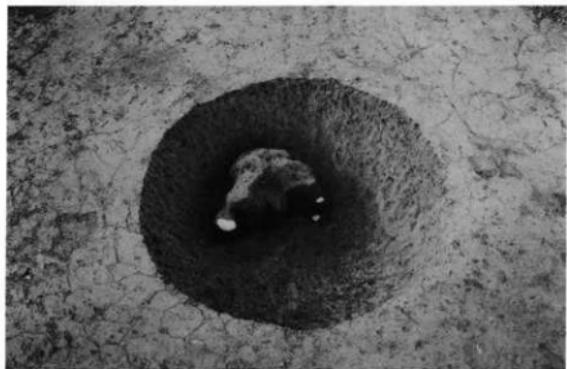
第1号ピット群
完掘状況



第1号塚
確認状況



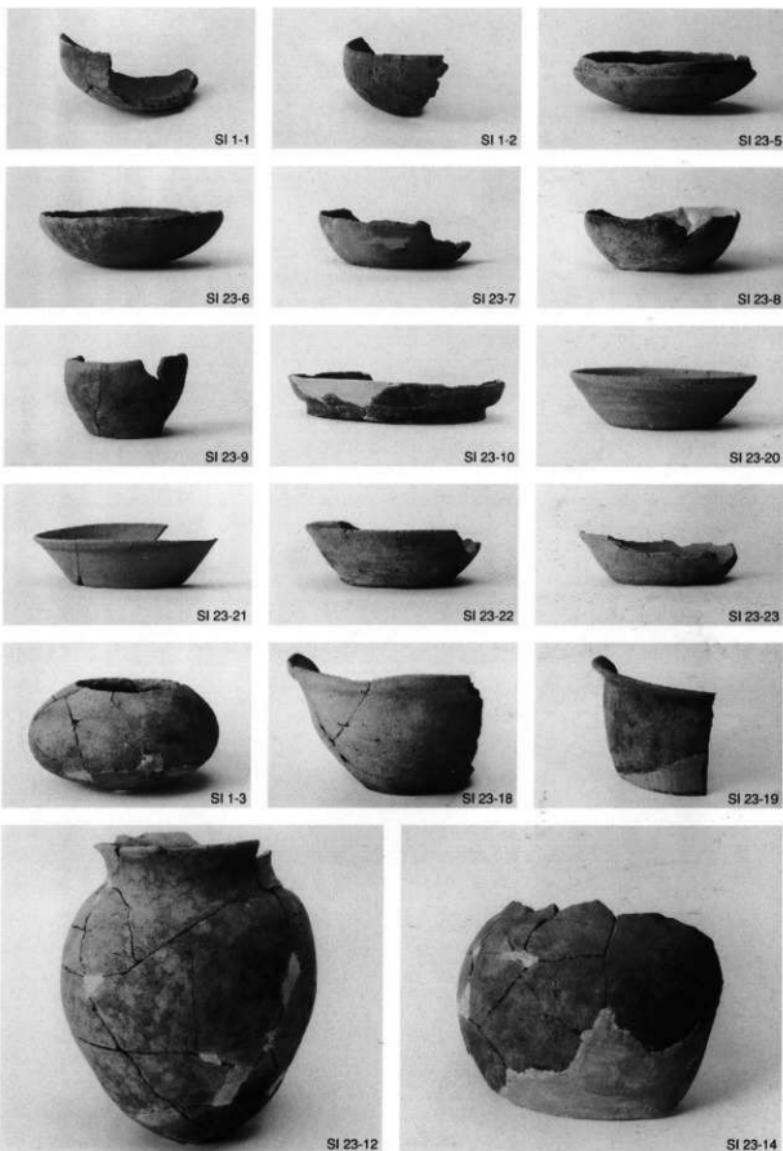
第 1 号 塚
土 层 断 面



第 1 号 炉 穴
遗 物 出 土 状 况



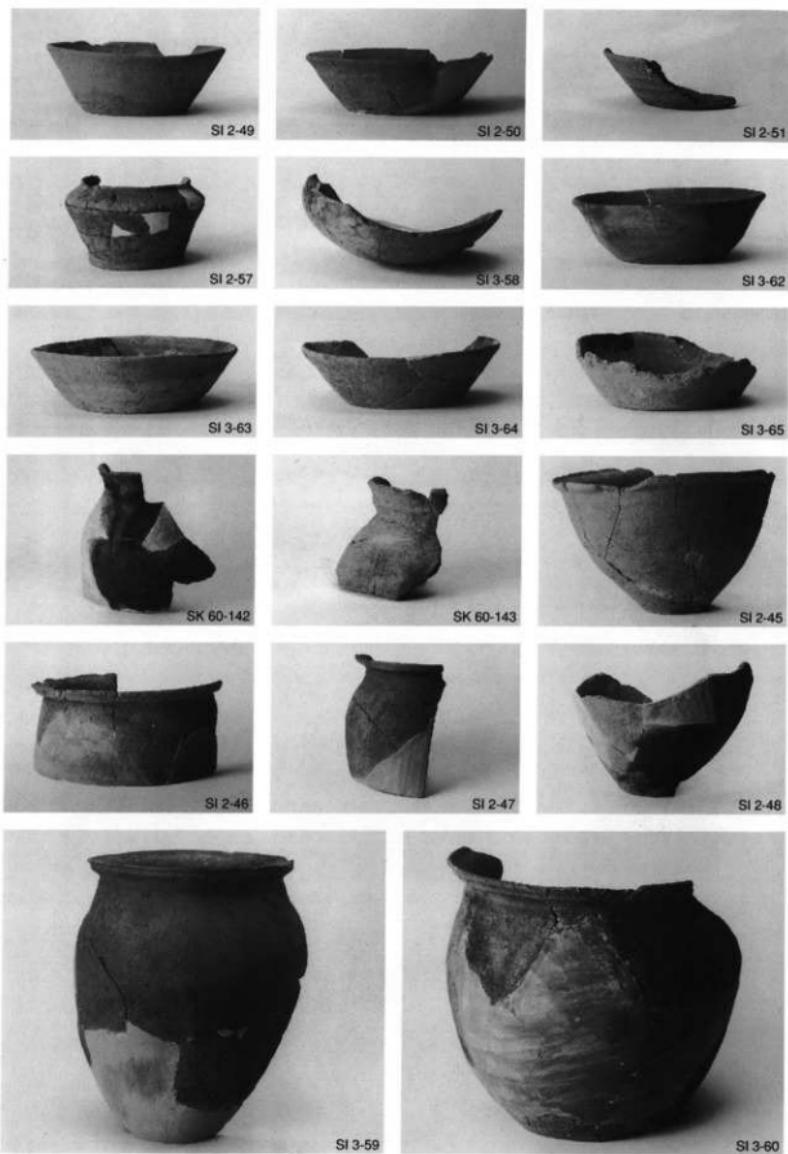
第 1 号 土 墓
人 骨 · 遗 物 出 土 状 况



第1・23号住居跡出土遺物

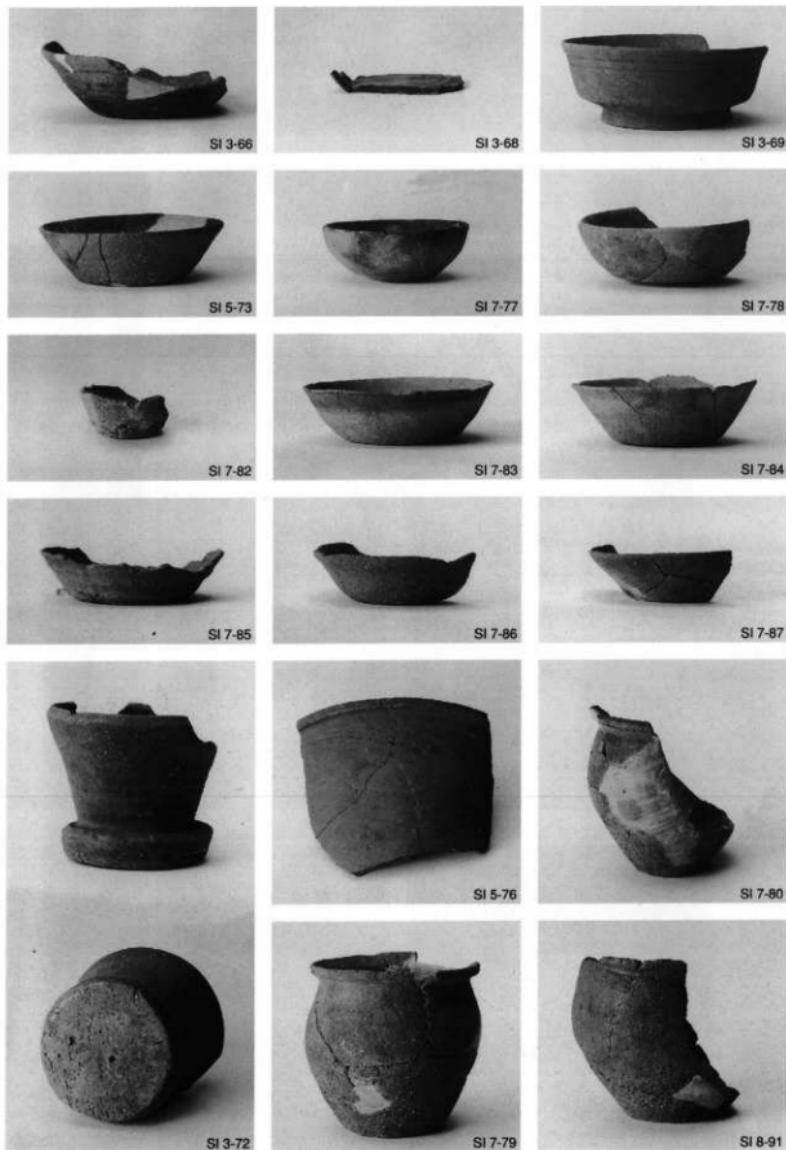


第23·25·26号住居跡、第60号土坑出土遺物

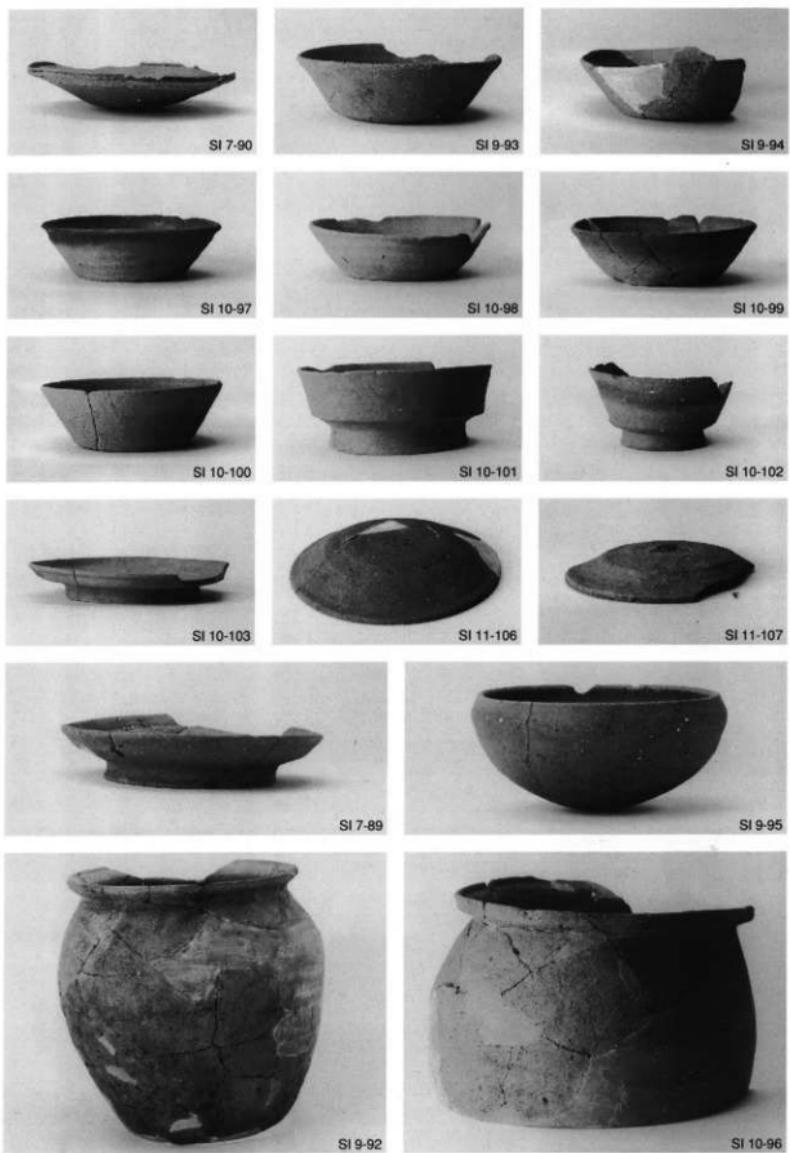


第2・3号住居跡、第60号土坑出土遺物

PL18



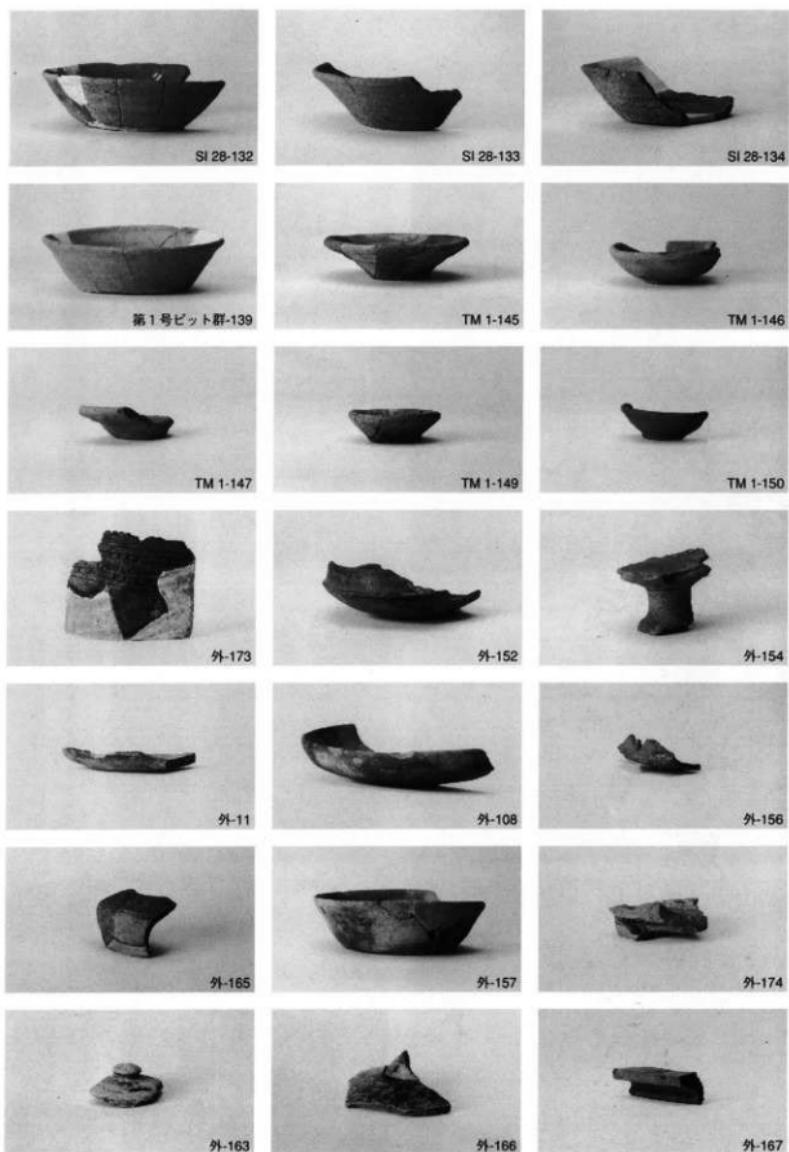
第3・5・7・8号住居跡出土遺物



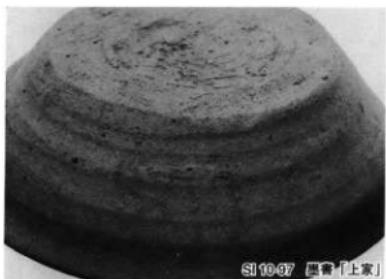
第7・9・10・11号住居跡出土遺物



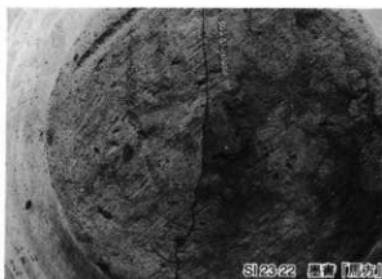
第13·16·19·27·28号住居跡、第1号土壤墓出土遺物



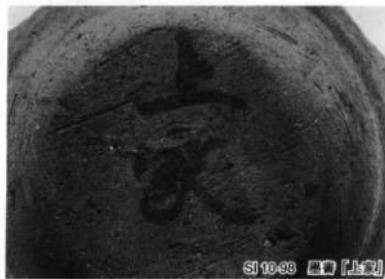
第28号住居跡、第1号ビット群、第1号塚、遺構外出土遺物



SI 10-97 墨書「上家」



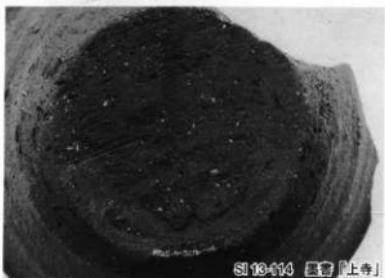
SI 28-22 墨書「加物」



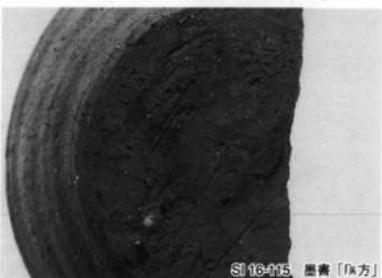
SI 10-93 墨書「上家」



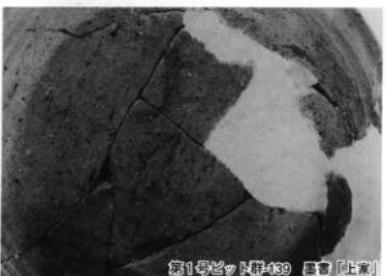
SI 3-68 墨書「×寺」



SI 10-94 墨書「上寺」



SI 10-95 墨書「口方」

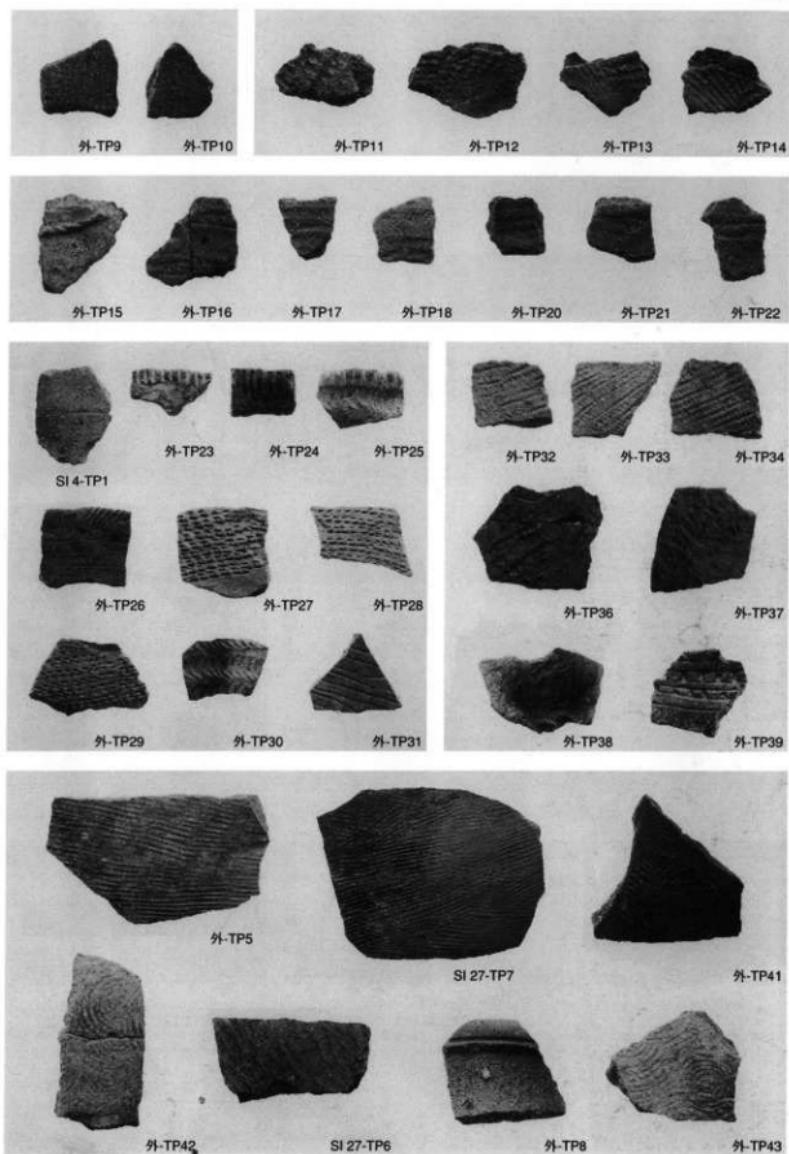


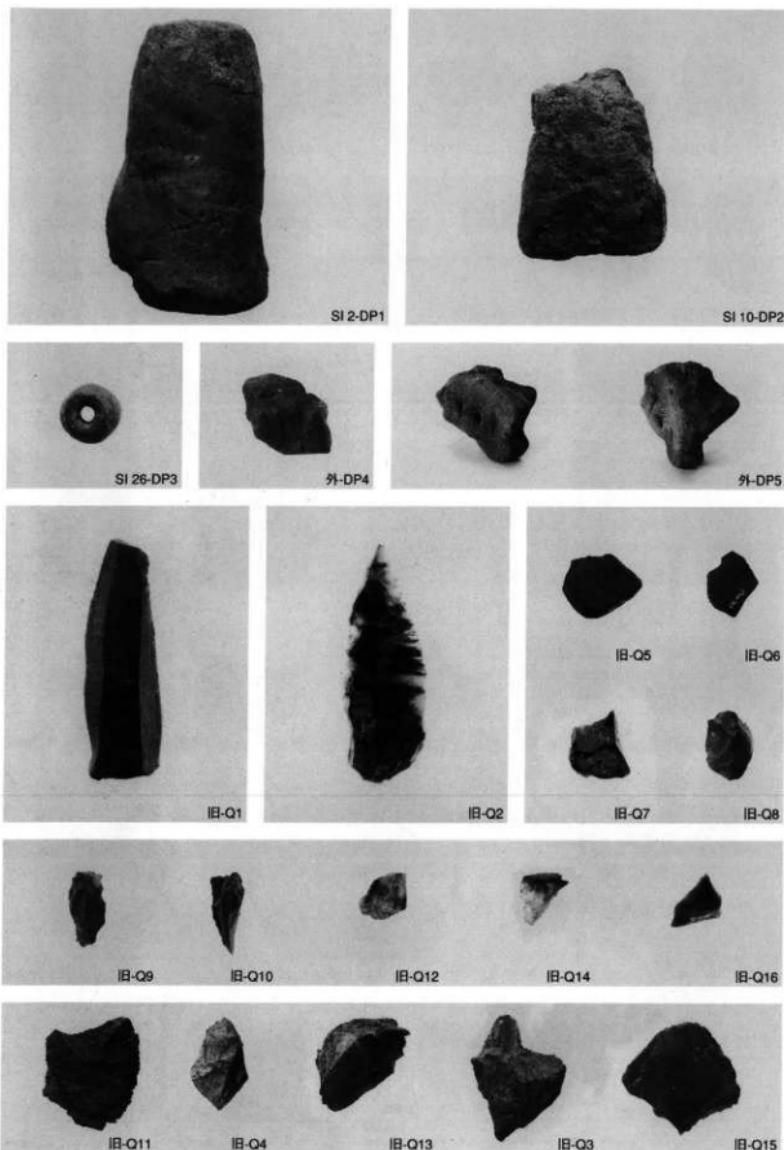
第1号ビット群-109 墨書「上家」



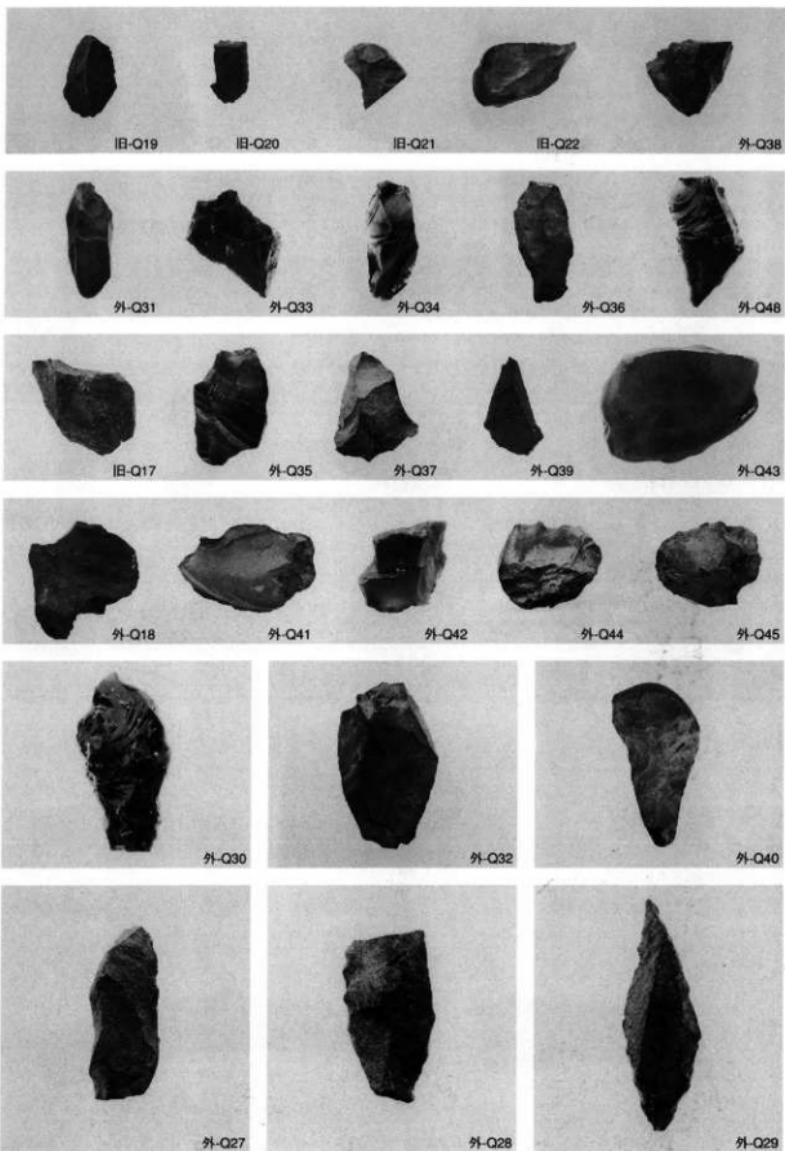
第1号ビット群-109

出土遺物（墨書・印花文）

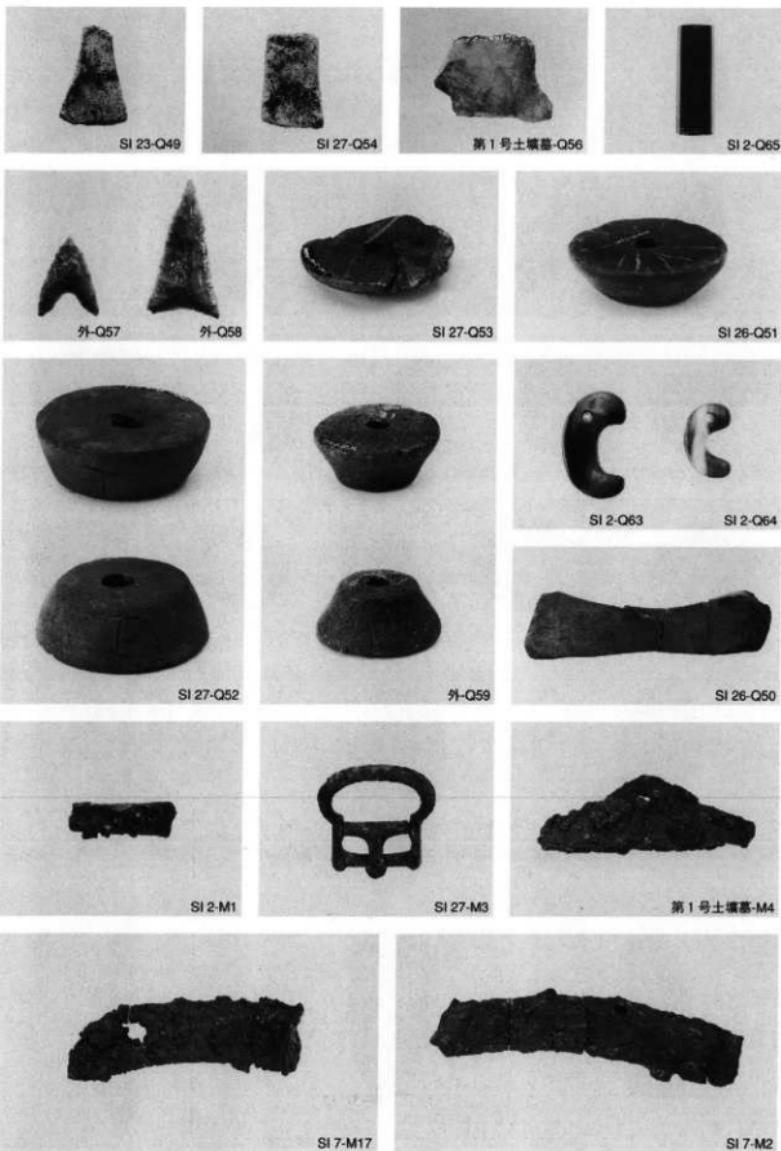




土製品出土遺物、旧石器出土遺物



旧石器出土遗物



石製品・金属製品出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第171集
一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設工事地内埋蔵文化財調査報告書1

下大井遺跡

平成13(2001)年3月15日 印刷

平成13(2001)年3月21日 発行

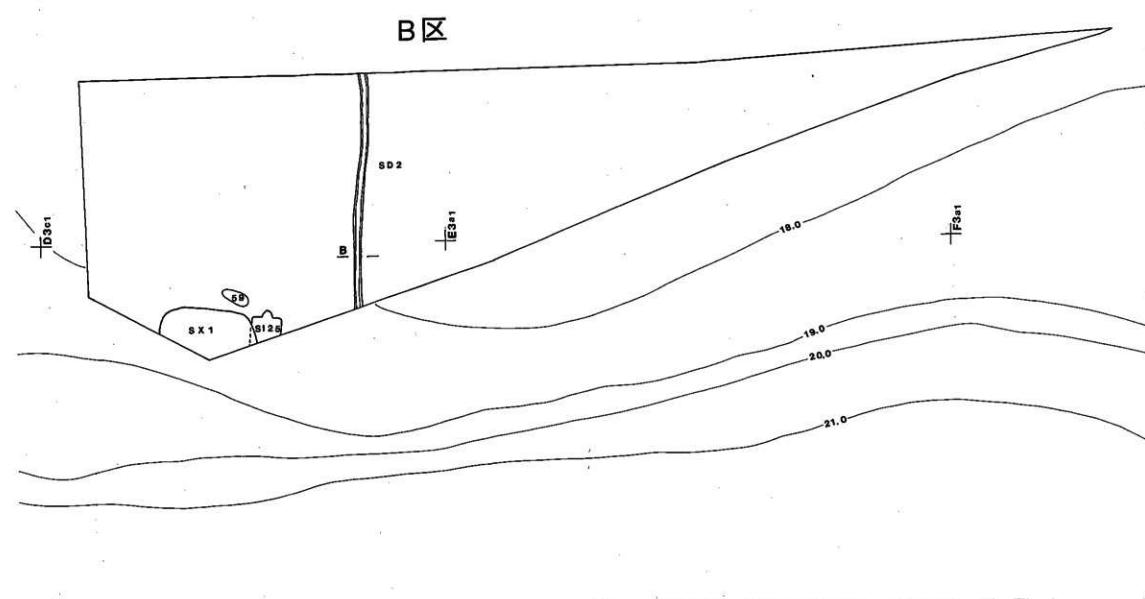
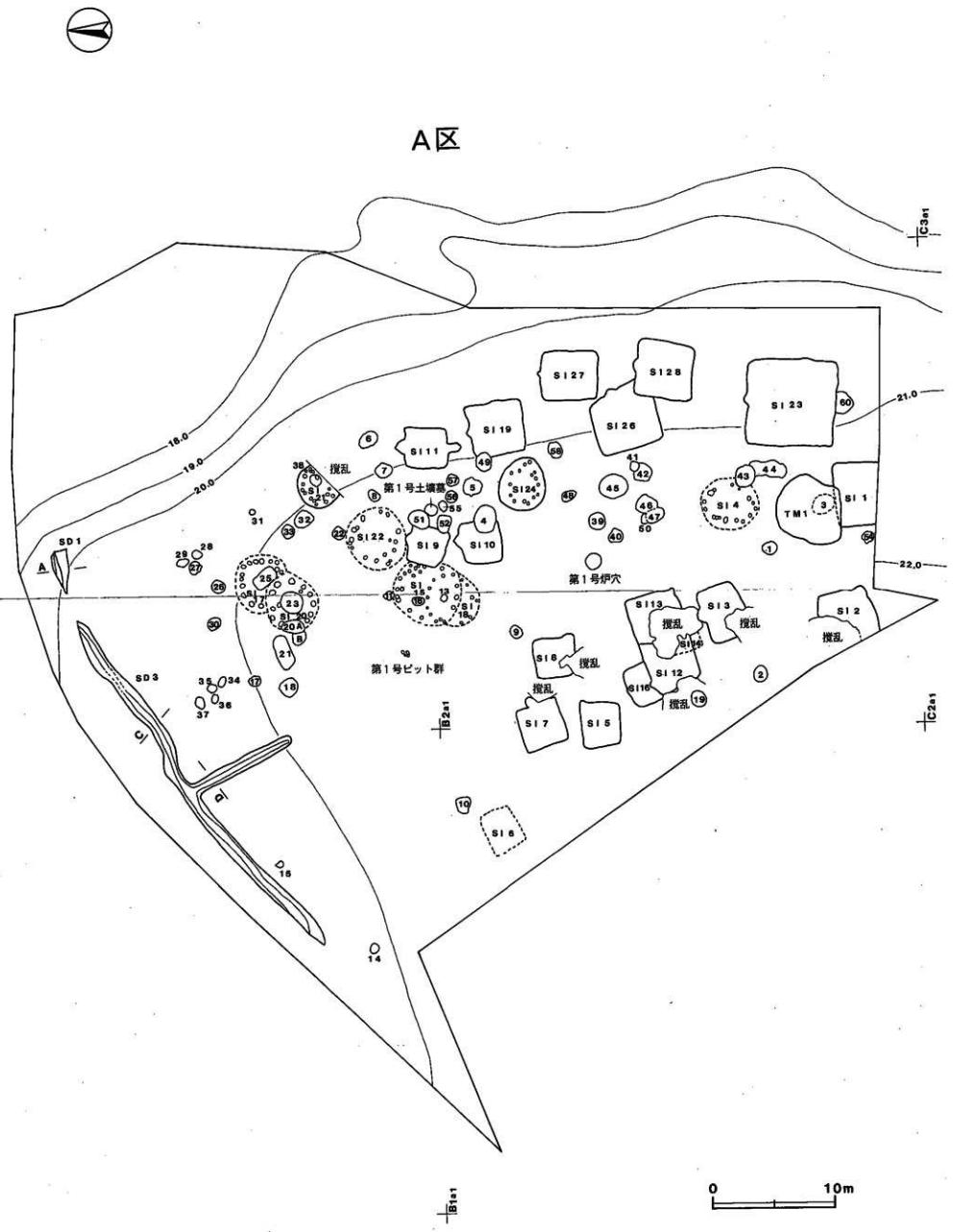
発行 財團法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地2号
茨城県水戸市生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 山三印刷株式会社
〒311-4153 水戸市河和田町4433-33
TEL 029-252-8481

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第171集

下大井遺跡遺構全体図



付図 下大井遺跡遺構全体図